

萩中學校 寄贈

明治四十二年十一月發行

校友會雜誌

第八號

山口縣元萩中學校校友會



聚人材振國勢爲今日要務而人材
一聚則國勢不期振而振矣

吉田 松陰

山口縣立 萩中學校 校友會雜誌第八號目次

思海……………一頁

- 自立自營 山根 正直
- 偶感錄 馬場 健一
- 健全なる精神 堀 勘市
- 玩物喪志 村上 實造
- 自信力は成功の母 守重 哲成
- 人間の殘酷虎狼に勝る 渡邊 梅吉
- 勝敗あらずんば人生滅す 椋木 史朗
- 學生と宗教 矢田 篤
- 我國躰の基礎 藤村 良作
- 學風を興せ 松井 隆美
- 禁酒論 藤原 政一
- 面倒臭い病 梅田 吉郎
- 敵 藤井 醇一
- 運命觀 山一 源吾
- 文明の新潮流 植村 九一
- 青年と自覺 安達 茂作
- 社會に對する現今青年の覺悟 田中 貢

○別れに臨みて同窓の諸君に參らす 早川 富正
○岌々乎として危きかな 中村 道生

藻林……………三十四頁

- 秋 町原千代輔
- 病床の感 伊藤 道顯
- 萩四景小記 三浦 嘉七
- 不言錄 福田敬二郎
- 讀松陰傳 特別會員 藤井 百輔
- 和歌 特別會員 高木 瑞枝

英文……………四十八頁

- The True Yamato Bushi. By K. Uemura.
- Bushido. By M. Tanaka.
- The Sense of Shame. By K. Toda.
- The Wrestling. By M. Murni.

講演……………五十四頁

- 松陰先生事蹟 特別會員 安藤 紀一
- 學生諸子に告ぐ 代議士 山根 正次

會報……………七十四頁

○劍道部記事○柔道部記事○野球部記事○庭球部記事○文藝辯論部記事○秋季陸上大運動會○部長委員の改選○各地雁信○四十一年度會費收支決算報告○寄贈書目

本校記事……………百四頁

第九回開校紀念式○戊申詔書奉讀式○松陰先生事蹟の講話○第九回卒業證書授與式○修學旅行○山根代議士の演說○戊申詔書奉體心得の配布○恩師の送迎

雜纂……………百十八頁

勤王諸家詩文

附錄……………百二十二頁

萩中學校沿革略○職員表の學級數及生徒數表○生徒郷貫別調査表○生徒年齢調査表○生徒入學前の成業別調査表○武學貸費生表○卒業生一覽



生先ト、チ、一、ナ、タ、ル、ド、ラ、セ、敬



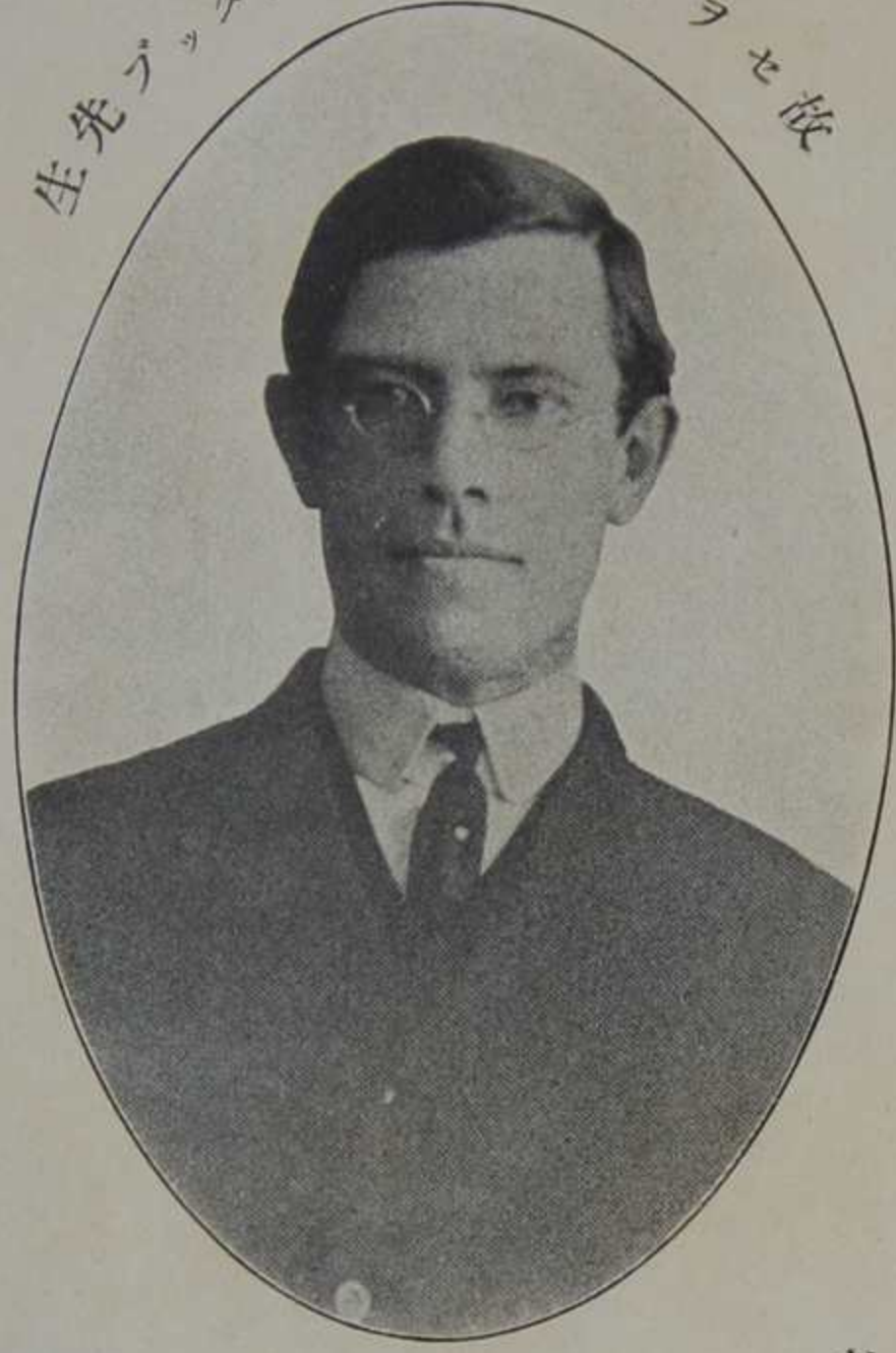
生先造原



生先泉川



生先ブッタ、ーナータ、ルドラセ故



生先吉泉川平故



生先造厚野河故



會報

○創立部記事○柔道部記事○野球部記事○庭球部記事○文藝部記事○秋季陸上大運動會○部長委員の改選○各地通信○四十一年度會費收支決算報告○多謝書目

本校記事

第九百四十二紀念式○戊申證書奉讀式○松陰先生事蹟の講話○第九回卒業證書授與式○修學旅行○山根代議士の演説○戊申證書奉讀心得の配布○恩師の送迎

雜纂

塾主諸家詩文

附録

秩中學校沿革略○職員表の學級數及生徒數表○生徒部別調査表○生徒年輪調査表○生徒入學前の卒業別調査表○武場費調査表○卒業生一覽

百十八頁

百二十二頁

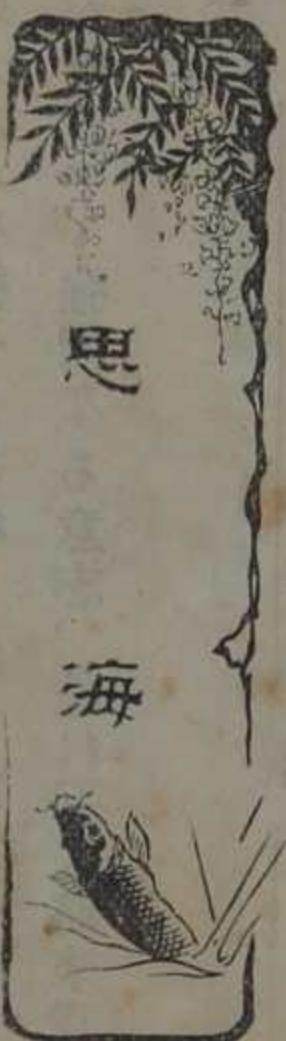
百四頁

七十四頁



山口縣立
中學校

校友會雜誌第八號



自立自營

一學年 山根 正直

凡て人は、相當の年齢に達すれば、皆業務に従事し、家を整へざる可からず。是れ人たる者の務なり。されど、常に、幼き時は、やゝもすれば、己が力に成し得る事をも、自らなすを厭ひ、人に依頼せんとす。されど、常に、人に依頼する時は、獨立奮勉の氣力を養ふこと能はず、遂には、習慣となりて、成し易き事だに成し遂げ得ざるに至る可し。是に反して、常に、何事も、成る可く己が力にて成さんと欲する者は、自ら勉め自ら勵む氣力、次第に強盛となりて、始めに難しと思ひし事も、容易となりて、何事をも成し遂げ得るに至る可し。されば、幼少の時より、己が力に成し得る限りは、必ず成就す可き精神を作りおかば、成長の後、よく自立して、業を修め家を整ふる人となる可し。實に國家の盛衰は、かゝる國民の多少による事勿論なれば、人たるものは、幼き時より、克く自立自營の精神を養成せざる可からず。

偶 感 錄

二學年 馬 場 健 一

噫、世に、境遇程妙なるものはあらず。人は、順境にさへあらば、白痴狂漢に非ざる限り、トン／＼拍子に、大抵の望は達し得べし。

然し、一度蹉跌して、轆轤落魄、逆境に沈淪しなば、忽ち意氣消沈し、或は自暴自棄となり、或は徒に怨嗟

失望の聲を發し、厭世悲觀の輩となり、あたらず有爲の身を以て、天命を全くせざるに至る、悲しむ可き哉。

また、世の罪惡も、多く逆境より胚胎し來れるが如し。罪人必しも憎む可きに非らず、深く犯罪の動機を探

究せば、頗る憐憫に値すべきもの多からむ。

茲に於てか、堅固なる意志の必要を見る。幾多の障害、前に横はるとも、百折撓まず、千挫屈せず、身は斃

れて後ち止むの決心を以て勇往邁進せざる可からず。此の意志てふ最大利器を以て、周圍に蟠る逆境を打破

せざるべからず。

斯くてこそ、眞の成功の人たるを得べきなれ。「赫々たる功業の裏面には、必ず強固なる意志潜めり。」と

は誠に千古の金言なるかな。ア、強固なる意志、是れ吾人將來爲すことあらんとする青年の唯一の金楯ナ

り。

健全なる精神

二學年 堀 勘 市

世には、往々にして、己之を是とするも、人之を非とすれば、忽ちにして心を變じ、是ならずと知りつゝ、非

をなし、後に至り悔ゆるものあり。之を薄志弱行の徒といふ。何ぞ、彼等を、健全なる精神を有するものと

いふべけむや。吉田松陰は、正義の爲めには己を顧みざりき。西郷隆盛は、情義の捨てがたきが爲には、は

かなき城山の露と消ゆるをいとほざりき。嗚呼、何ぞ、其精神の健全なるや。君に忠義を盡し、親に孝養を

なすはもとより、忍耐を以つて事に勉め、誠實を以つて心を率ゐて動かざるを、健全なる精神を有する人と

はいふべし。學生にして、學業劣等なる人あり、其の人も、首席の人も、何ぞ異なるどころあらんや。人は、

天才あるものといへども、學ばずして學業進歩するものにあらず。即ち、學業の劣等なるは不勉強より來れ

るなり。己の不勉強を知りながら、尙勉強せざるは意志薄弱の徒といふべし、實にかゝる青年は、己に克つ

のすべを知らずして、前途遼遠なる生涯をあやまるあはれむべき青年なり。然れども、健全なる精神は健全

なる身體に宿る」と、ローマ國民のいへりし如く、人の心身は、車の兩輪の如く、心強くして身體弱き等な

く、身體強くして、心弱き等なし。されば、勉めて、身體を攝生鍛練し、以つて健全なる身體を造るべし、

健全なる精神は、自然に其身に宿るべし。而して、之を率ゐるに至誠を以つてし、勉め勵みて、成功の彼岸

に達せざるべからず。

玩 物 喪 志

三學年 村 上 實 造

凡そ、人の此世に在りて、孜々砧々、電勉努力せざるべからざることは、論を俟たず。然りと雖も、人の精

力には制限あり。故に精神上の快樂も、時に、心融々として勞を忘るゝために採るは、あながち無要のことに非ざるなり。否、寧ろ必要のことといふべし。然るに、世には、往々にして、安逸を貪り、徒に歡樂を求むるに汲々たる者あり。甚しきは、家産を傾けて、千金、茶碗を購ひ、萬金、畫を得むとする者あり。斯の如きは、斷然非難せざるを得ざるなり。

すべて、物を玩べば、志を喪ふ。徒に、器物の末に營々として、夥多を貪り、珍奇に誇らば、遂に志を失ひ、空しく、一生をして、浮浪に終らしむべし。古人笑話あり曰く、昔、唐土に、甚だしく古物を愛する男ありけり。古物をさへ見れば、必ず之を購ひ、座右皆古物ならざるはなし。時の人、その心のひがみたるを嘲けり、その名を知らざるはなし。或時、人ありて、古き碗を持ち來り、之を購はしめ、自から大利を得むと思ひ勧めて曰く、これは古のひじり舜の若かりし時、河濱にて製せし無比の珍品なりと。此の男、之を見、直に得むと欲し、所有の土地を賣りて、遂に之を求めたり。數日にして、又、古き杖を持ち來りて曰く、これは古の明君周の大王の常に愛せられしものなりと。乃ち、以前求めたる諸物品を以て之と交換せり。次に席を携へ來り、又、告げて曰く、これは孔子の机邊に布きしものなりと。その狀甚だ古く、今の世の物とも見えねば、己が品となさんと思ひて、残れる家屋、器具等と交換せり。されば、その日より、居るべき家もなく、席を身に纏ひ、大王の杖を携へ、舜の碗を手にして、家を出て、市中に流離し、戸毎に憐を乞ひあるきて曰く、願くは太公九府の錢一文を與へよといひけりとぞ。蓋しこの人、舜の碗、大王の杖、孔子の席など貪らざれば、家屋衣類器具等を失ふことなく、永く子孫に傳へ、その身も安らかに終りしならん。されど、あはれ、此等の貴き物を失ひ、遂に乞食となりても、猶ほ太公九府の錢を口にす。何とて、覺らぬことの甚だしき。斯の

如く、物を玩べば志を失ひ、家を亡し、名を穢すべし。青年たるものよく鑑みざるべけんや。

自信力は成功の母

三學年 守 重 哲 成

人、多く、得意のことあれば、意氣軒昂、喜色満面に溢れ、得々然たるも、一度失意のことあれば、意氣頗る消沈し、甚しきは病を得るに至るものあり。あゝ、かゝる人物は、到底凡骨にして採るに足らざるなり。しかれども、かの傑物に至りては、成敗利鈍によりて、決して心を動かさず。否凡人の失意する時に於ても、平然として、奮勵心を喚起するものなり。やゝその地位を得て、喜悅満面に現はるゝものは、全く小成に安んずる小器なり。人傑は、何故に、得意と失意とを以て、毫もその心を改めざるか、英雄は大精力を有すればなり。大精力とは何ぞや、自信力即ちこれなり。熟々考ふるに、己の欲する地位は自ら求めて來るべきものにあらず。唯一大自信力を以て、銳意奮勵せば、自らその身に供はるものなり。自信力を以て事にあたれば、必ず忍耐力を奮起せしむべし。かの世界の大探検家コロンブスを見よ、彼は、「地球は圓形なるを以て、東より西に、一直線に航せば、必ず印度の東端に達するを得べく、その間には、珍らしき島々もあるならん。」と云ふ説を主張して已まず、遂に當時賢明の聞えありしイスパニヤの皇后イサベラの助を借りて出帆し、西へ西へと行きたるに、陸影も、忽見えずなりて、見ゆるは、たゞ海と空とのみ。行けども行けども、島影らしきものもなければ、水夫等愈々恐れを抱き、「歸航すべし」「コロンブスを海に投げ込むべし」など曰ひ罵るに至れり。あゝ、此時のコロンブスの中心いかばかりなりけん。然れども、彼は、一大自信力を有す

れば、平然自若として、大忍耐を喚起し、遂にアメリカ大陸を發見せしにあらずや。平凡に甘んずるならば、いざ知らず。苟も一大事業を成さんと思はば、大自信力を奮勵せざるべからず。自信力は實に成功の母なり。

人間の殘酷虎狼に勝る

三學年 渡

邊

梅

吉

天下、未だ、嘗て、人間ほど勝手氣儘にして、且つ殘酷なる者はあらざるなり。而して、自ら曰く、人は萬物の靈なりと。又、曰く、人は仁なりと。甚だしきかな、その自ら尊大横柄にして、自惚なる。抑大なるものは象鯨より、小なる者は蟻蚊蜉蝣に至るまで、皆、是れ、生を天地の間に稟くる者なり。天地の萬象を生ずる、豈に、愛憎好惡あらんや。是を以て、大象は、深山幽谷に成長し、天を以て屋根となし、地を以て床となし、一行千里、生を保つ者も亦、是れ、一生命あつてなり。長鯨の如きは、大海廣洋に往來し、萬里の内を以て家となす者も、亦、是れ、一生命あつてなり。蚊の、子才以來の苦勞をなし、漸く羽根を生じて、嬉しやと思ふ間もなく、蚊遣の烟に果敢なく消え行くも、亦、是れ、蚊に取りては、一生命なり。又彼の、人間の、譬を其の短命微軀に取る、朝に生れ、夕に死する蜉蝣も、亦、是れ、同一理なり。若し、象鯨は大なり、故に其の生命も亦重し、蟻や蚊や蜉蝣やは小なり、故に、其の生命も亦輕しと云はば、天地の、萬象を生ずる意を知るものに非ざるなり。是に由て之を觀れば、人間生命を惜めば、則ち、蟻や、蚊や、蜉蝣や、其の他の微虫も、亦、生命を惜しむ。人間の生命大切なれば、則ち、蟻蚊蜉蝣の生命も亦大切なり。人若し、

此言を諛なりと云はば、論より證據なり。試みに、指を以て、蟻を擒へんとすれば、蟻、必ず、一生命懸命に免れんことを思ふ。また、額にとまれる蚊を打殺さんと欲せば、必ず、靜に是を打つ。然らざれば、則ち、蚊、様子を知つて、必ず、飛び去る。蜉蝣も亦然り。人、蜉蝣群翔の處に到らば、蜉蝣必ず高く飛び、遠く去りて、人を避く。是皆、生命の尊ぶべく、惜むべきを知ればなり。然らば、則ち、人間、微虫、みな是同一に生命を惜み、生命を貴ぶこと、知者を待つて後に知らざるなり。夫、天地の萬象を生ずる、此の如く愛憎好惡なし。唯、人間は、思想と言語とあるを以て、種々雜多に理窟を設け、以て、世にあるに便す。是に於て、法律規則も出來し、曰く、人を殺す者は殺し、人の物を盜む者は、獄に投ず。曰く、何をなす者は何、何をなす者は何と、罪當らざれば、則ち、罵つて曰く、殘酷なり。曰く、暴戾なりと、口を極めて抗争止まらず。天下、人間の行をして、皆其の言の如くならしめば、則ち、人間は、誠に、萬物の靈なりと云ふを得べし。唯、いかんせん。其の行ひ必ず、其の言の如くならず、其の暴戾殘酷、彼の虎狼に勝るもの枚擧するに遑あらざるなり。今其の二三をあげんに。若し一疋の蚊の、飛ぶを見るときは、乃ち、忽ちに、之を打ち殺し、一滴の血、尙且つ、啜らず、而して忽ち命を取る、豈に殘酷の人間ならずや。又、未だ、人間を蝨すに及ばざるに、人、蚤を見れば、忽ち之を殺して免さず。亦、暴虐の極なるかな。其の他、道を行きて、蛙を踏み潰せども、恬として、之を哀れと思はざるの類、枚擧に遑あらず。予は此の夏休暇に、九州各地を遊覽し、長崎市街を散歩して、捕鼠器を賣るを見しに、廣告の爲め、捕鼠器を用ゐ、鼠を捕へて店にあり、其の狀、鐵鋏錯齒、生さながらにして鼠を挟み、鮮血淋漓、苦痛困頓、其の慘狀見るに忍びざりき。予覺えず嘆じて曰く、嗚呼、天下の最も殘酷なるもの、人間に如くはなし。己の口を糊せんが爲めの貨物を賣らんと欲

し、無辜の鼠を捕へ、此の残酷を極む。しかのみならず、之を買ひて、鼠を捕ふるものも、亦、残酷ならずといふべからず。鼠の害は甚しと雖も、米を喰ひ、膳を嚙むの小事なり。之を處するに、死罪の虐刑を以てす、豈に悲しからずや。天下に一種の鼠あり。古來國家に害あるは小少ならず。此の害鼠を捕ふるを爲さずして而して、微罪の鼠を捕へ、之れを殺す。人間の残酷、覆載の間、豈に又此の如き者あらんや。

勝敗あらずんば人生滅す

四學年 椋木史朗

一口に、勝敗と言つても、甚だ漠然たるもので、勝敗にも種々雑多の區別がある。然し、何れの勝敗にせよ、人は苟も活動して居る限り、息の根のある限り、人生必ず勝敗がある。勝敗がなければ、既に黄泉の客となつたのである。人は社會を相手に、自己の同業者を相手に、絶えず戦つて居るので、時には順境の寵兒となり。又逆境の繼子ともなる。然し、其の戦に全力を捧ぐるものは常に捷ち、然らざるものは、常に敗を取るのてである。西諺にも「奮闘せざれば勝利なし」と言へり、實に然りである。斯て、一度勝利を得たならば、勇氣百倍、この機を利用して、非常な速力で、己が理想の天地に猛進する事が出来る。俚言にも「英雄は風雲に乗ず」と言へり。風雲とは即ちこの機會の別稱である。豊太閤にせよ、奈翁にせよ、皆此機を有利に、巧妙に利用せる大人物である。併し此機會即ち順境は逆境の母である。古來、偉人と呼ばれ、豪傑と稱せられし人が、常に口にせし「勝ちて兜の緒を締めよ」の言は、此場合に於ける最善の金言で、猛進すると同時に、輕舉妄動は深く戒むべき所である。之に反し、不幸逆境の惡魔の虜となり、若しも失敗せんか、意氣沮喪

して、失望の淵に沈むのが通例である。一度の失敗に屈せず、二度之を繰返す人はあるが、二度の失敗に屈せず、三度まで之を繰返す人に至つては、天下廣しと雖も僅かに指を屈するに過ぎまい。況んや四度目の奮發に於てをやである。前車の覆轍に鑑み、之に修正を加へた上、更に四度目を試むる勇氣と忍耐とがあらば、天下の事物は最早や恐るゝに足らないのである。人は如何に失敗すとも、再び繁昌すべき種子は、常に、人の體內に存在し、機を見ては、萌芽を發せんとして居る。唯その土壤の良否即ち身體の強弱、その種子の培養如何に依つて、更に萌芽を發する事もあり、又其儘に一生を零落して終る事もある。この培養土壤の良否によりて、成功不成功の大半は決するのである。種子とは即ち一點の希望であつて、この一點の希望にあらば、逆境は寧ろ其心志を切磋すべき他山の石たるに過ぎないのである。

學生と宗教

四學年 矢田篤

つらつら、青年壯者の状態を觀察するに、古今を問はず、東西を限らず、餓狼の如く、傷猪の如く、猛進突飛、徒に血氣に走りて、前後を顧慮するの能なく、不慮の災難に遇ひて失望落膽するもの殆ど數ふるに遑あらず。

又、遠く、古郷を去りて遊學する輩は、夙に起き、夜に寝ね、終日刻苦淬勵すと雖も、其の疲勞を慰むるに、父母なく、妻孥なく、只、胸中無量の感にうたるゝのみ。若しそれ、不幸にして、疾病事故に遭遇し、試験に落第するが如きとあらんか、悲憤痛嘆、遂に意氣全く消沈して、また起つの勇なきに至る。

嗚呼、彼の失望や、苦難や、遂に彼等をして、自暴自棄して、遼遠なる其前途をば、都て抛擲するに至らしむるなり。此の如く、既に活動に於て死したる青年を、能く戒め、能く慰め、能く之を救ふ偉力を有するものは何ぞ。宗教に依らずして、又何かある。

此に人あり。一朝宿善開發して、宗教の時雨に浴せんか、彼の心中には、絶對の希望と光明とを得て、人界の悲嘆や、失望や、忽然去りて影を止めず。一夕、開祖の慘憺たる苦辛に想到せんか、自己の艱苦の遠く及ばざるを恥ぢ、奮然として起ち、悠然として、志すところに猛進するを得ん。

殊に、佛前に端坐して、晨に、謹慎を誓ひ、夕に行爲を反省せば、向上的の精神、胸中に溢れ、遂に大なる修養をなすを得べし。あゝ、宗教感化の勢力何ぞ其大なるや。

余、嘗て謂へらく、「學生たるものは、一意専心、己の學ぶ所を切磋琢磨せば足れり。何ぞ他を顧るの要あらんや。宗教何者ぞ。佛陀何者ぞ」と。近時頗る其非を悟り、一夜、四隣寂くして聲なきとき、獨り床中に横はりて、靜思默考し、過去の淺見を慚愧し、胸中不安の念滿ちて眠るべからず、汗の、背を洩すを覺えざりき。

我が國體の基礎

四學年 藤 村 良 作

嘗て青ヶ島の噴火するや、灰火の雨を降らせ、火光炎々として、天日爲めに暗く、島中の人畜亦殆ど斃れたる中に、拾數人の、舟によりて八丈島に逃れたるものあり、夢寐望郷の念に堪へず、拾數年後、火の熄むを

聞き、欣然としてこの怖るべき故郷に歸れりとか。脆きは人の情なり、誰かは我が故郷の美を謂はざるべき。然れども、今、吾がこゝに云はんとするは、かゝる偏執的觀念の下に於てするにあらず、一種冷靜且つ公平なる見解の下に、我が國體の尊嚴を誇らんとはするなり。

天孫降臨以前に於て、國土の基礎を有し、神武天皇に至りて、國體の根本を確定したる我が細矛千足の國は、その國體に於て、世界諸外國と大に其趣を異にせり。その異趣なる點、即ちこれ世に誇るに足る國體の尊嚴の存するところなり。

實に各國組織の根本を比較するに、我に單純にして、諸外國に複雑なり。我は、上に、民主として開然する所なき血統上の資格を有し給ふ皇室を、その基礎として有せり。而して、この基礎なき諸外國は、支那に於ては、徳を以て王位の標準となし、西洋諸國々々の本源たる羅馬は、その根本的標準を協議にとれり。即ち有徳なる禹は、卑賤より起り、遂に支那の皇帝たるを得、桀紂兩王の如き無徳漢は、支那に於ては、一國の君主にあらずして、一個の匹夫が君權を恣にせるものとして殺されたるなり。かくの如き標準のよりて來るところを究むれば、その種族の同一ならざるに歸因す。不同一種族を統一せむとするや、必ず各種族間に、威信徳望を具有せるものたらざるべからず。若しこの資格なからむか、同姓のものは恕すべきも、異姓のものも決して心服すべきものにあらず。かくて、そこに軋轢を生ずるなり。西洋も亦同然なり。西洋現今の國家、模範を羅馬にとる。羅馬建國の次第を見るに、ロミュラス族、ゼビン族、エツルスカ族等は、皆イタリア北部より、漸次南遷せる種族にして、以前は同一種族たりしも、言語上に差違を生じ、その各々の拜する神祇を異にしたるなり。故に當初に於ては、互に侵略これ事とし、相共に和せざりしも、後に至り、各を

の不利を自覺して協同するに至りぬ。茲に於て、又他種族の合同あり。遂にかの族會コミチャキユリアタの出現を見るに至りしなり。即ち支那は基本を道徳にとり、羅馬はこれを協議に求めたり。支那に儒教の、羅馬に法律の盛なりしは、これ固より因あるなり。我國に於ては然らず。天孫降臨以前に於て、一部を統一せるかの大國主命等の如き、皆同一種族にして、神武天皇の東征に際しても、饒速日命の如き、その宗家の正嫡たるを知るや、直ちに出て、その軍門に降り。中に穴居民族鼻師民族の如きものありたりと雖も、そは遂に驅逐せられて、種族滅し、或は滅するに至らざるも、我民族の奴隸となり、公民としての權を失へり。熊襲の如きは、これ海外の煽動に依るもの、撃ちてこれを退けたり。由來、我國は島帝國にして、他民族の侵入を被らず、遂に同一民族にて、國家を組織せり。

斯くの如き理由の下、又族制上の關係により、我等が、天皇を君として仰ぐはこれ本分なり。我が蒼生の中、よく、この宗家の正嫡たる天皇の系統に代るべきもの、過去現在未來を通じてあることなし。かの道徳を以て君位を動かす、合議協約を以て君權を限るが如き、支那及び歐米各國と、その國體の根本基礎を異にする實に茲に存するなり。

學風を興せ

四學年 松 井 隆 美

凡そ一國を誘導し、一世を警醒して、之に新鮮なる思想と、健全なる進歩とを與ふるは、果して、如何なる種類の人士なるか。現在の位置に満足する人か、將た之に満足せざる人か、蓋し現在の位置に満足するもの

は多數凡庸の徒にして、之に満足せざるものは、少數英俊の徒なるべし。満足すれば、社會は平穩にして、靜波渺然たり。満足せざるときは、波浪起伏簸揚して、活動を生ず。然らば則ち、一國に元氣を與へ、風潮を起さしむるものは、多數人士にあらずして、却て、少數人士の手にあること炳焉として明かなり。而して、此等有數人士の行動は、恰も、一碧萬頃鏡の如き海、時として、大濤峭立し、雪山崩れ來る偉觀を呈するが如く、或は、寂寞寥々たる念佛聲裡に、忽然として、百雷耳を劈く喝聲を聞くが如し。怯者は驚きて耳を掩ひて走り、愚者は啞然として爲さん所を知らず、識者は欣んで手を拍つて迎ふべし。而して、茲に始めて、活動を起し、進歩を來すなり。それ社會の原動力たる此等有數人士は、如何にして出て來るか。多くは、深山大澤に蟠蜿して、能くその英氣を蓄へ、深くその心膽を練り、羽翼已に成り、一朝風雲に際會して、猛然荆棘を排し、九天の上に飛揚するにあらざるは莫し。思ふに、彼等は、已に、地平線上に、嶄然頭角を顯し。一世の風潮を排する英物たるが故に、其の志向氣品、固より凡俗に超絶し、自研自修以て己が思想手腕を運用して、其の境遇を作為するに由るとはいへども、而も亦、四圍の状況、師友の感化、豈與りて大いに力なしとせんや。象山の門に、松陰を出し、松陰の門に、久阪・高杉以下の俊才を出し、を見れば、師友の啓發誘掖の如何に大關係あるかを知るに足るべし。一個人の感化既に此の如し、學校の感化に至りては、尙一層明瞭適切なるものあり。抑も、學校氣風は、凝りて、一國の習俗を造り、集りて、一世の精氣をなすものにして、凡そ社會に活潑なる刺戟力を與ふるは、概ね、一講堂若くは一學舎内の壁内より反響するにあらざるはなし。學校は實に社會潮聲の一大動機なり。國家盛衰の大源泉なり。然れども、其の生涯の平穩なる、恰も木の葉を潜る溪間の清泉の如く、山寂々として、林寥々たるに似たり。たゞ、其の潜勢力に至りては、竟に、洋々

蕩々の江河となり。森々漫々の大海となるものなり。之を例ふるに、かの化学者が、密室内に於て製造したる一塊のダイナマイトの、他日爆發して、山の如き巨艦を破碎するに同じ。其の結果の偉大なるを知らば、其の原因の如何なるかは、ただちに知るを得べし。已に、學校を以て、國家の骨子たる青年學生の氣風品性の趨向を一定し、之を鍛練陶冶する所なりとせば、其の教養の良否は、實に一國盛衰の關する所にして、豈一日も等閑に附するを得んや。

禁酒論

四學年 藤原政一

諸新聞を閱するに、近來、凶賊、博徒、刃傷鬪爭頗る多し。而して、その大半は、飲酒に起因するもの、如し。余、これによりて、酒の大に世人に害あることを感じ、今其害の及ぶ所を論ぜんとす。

第一、人の品行は、酒の爲に最も破れ易きものにして、たとひ、平素溫厚篤實を以て、世人に稱せらるゝ人と雖も、一たび、杯を口にすれば、之が爲に、性情全く一變して、浮薄輕躁傲慢粗暴の人となり、注意、判斷の力消失し、小膽者も假の勇氣を生じ、少許りの刺戟に逢ふも、忽ち憤怒し、理否を顧みず、地處を選ばず、怒罵呼號し、遂に鐵拳を振つて人を打つに至る。之が結果として、昨日までは、刎頸の交を結びし親友と雖も、遂に絶交し、最愛の妻子と雖も、忽ち水火の敵となり、甚しきは、離別の慘境に陥るに至ることあり。豈恐るべきものならずや。

第二、身軀も亦酒のために害せらるゝこと最も甚しきものにして、其量を越ゆるや、思考の力全く消失し、

呼吸血行の麻痺によりて、人事不省となり、終に、斃死するに至ることあり。しかのみならず、獨り其身に止まらず、延びて、子孫に及ぼし、ために、血族をして、幾多の不幸災厄を蒙らしむ。豈恐るべきものならずや。

第三、經濟上に及ぼす影響亦決して小少ならず。小は一人一家の資産より、大にしては、一國の財政に至るまで、損害を蒙ること限りなきものにして、實に、吾等豫想以外にあり。嗚呼恐るべきは酒なるかな。以上論ずるが如く、酒は人の品行を破り、衛生を害し、資財を蕩盡せしむるものにして、天下の之に溺るゝもの多きときは、其國の滅亡疑なし。嗚呼恐るべき哉。

特に、吾等學生にとりては、大に慎むべきことにして、世間酒の爲に、墮落するもの往々にして之あり、是余が禁酒を論じ、大にこれを實行せんことを勉めて已まざる所以なり。

面倒臭い病

五學年 梅田吉郎

現今、世は滔々として、奔馬の進むが如く、日々に開明に趣きて、政治法律宗教より、あらゆる學術藝能に至るまで愈々進歩して、事として其の蘊奥を極められざるはなく、理として研究されないものは無い様になつた。斯く社會の進歩するにつれて、人間の精神と肉軀との衝突が愈々はげしくなる。即ち處世の法が困難となつてくる。されば、吾人は、精神上肉體上に、多大の勞苦を費さなければ、忽ち強者の肉ともなるのであらう。

人間には、整頓を好むと之をうるさがるとの矛盾せる二種の性がある。この整頓をうるさがるといふは、即ち面倒くさいといふ事である。何も面倒くさい、かも面倒臭いと云つて、勤勞せぬならば、遂には、何事も皆面倒臭くなる。萬事皆手につかず、頭腦に入らないのである。勞苦を厭はなければ、決して面倒くさい病はつかない筈である。要するに、常に面倒臭いと云ふ者は、自己に、克己心忍耐力が無いといふ事を示してゐる者である。吾々は今學生である、日々、單純な課業を履行して行きさへすればよいのである。が、其の日々の豫習復習が、往々面倒くさくなる。尙ほ進んで、社會にても出た時は、尙更面倒くさい事が多くあらうと思ふ。社會に出た時は、他より、各種の誘惑が起る。不運に落る。數多の障礙物は、たえず、目前に見えて来る。若し、此の時、勞苦を恐れたらばどうであらうか、忽ち社會の競争場裡より撥出されて、世人に輕視せられるであらう。誠に心すべき事である。然るに、悲い事には、此の病が、現今、世の中には隨分流行してをる。自己の正業が嫌忌になつて、糊口をしのぐために、人の苦勞した結果を窺ふ盜人。勞苦少くして、一攫に千金を得んとする投機家。或は、人世を、果なき修羅場と考へ、萬物皆不可解と牽強附會して、身を奈落の底に沈める厭世家等、皆該病に襲はれた者である。加之、身には立派な肩書ある堂々たる紳士でさへ、裏面には、色々な悪手段を弄して、勞苦せずして、私慾を逞くせんとする者が少くない。實に面倒臭い病は流行の極に達して居るではないか。

古語に、「精神一到何事不成」と云へるが如く、自己の目的に、精神をこめて、熱心に着實に勉めた時には、如何なる困難な事でも、決して成し遂げられないといふ事はない。随つて、面倒臭い病のために退屈する様なつまらぬ事は無い。實に、艱難は、人を玉にもするもので、勞苦と人生とは隔離すべからざるものである。

古來、勤勞を積んで、名を擧げた人は甚多い、第一に、二宮尊徳翁は勤勞界の巨擘ともいふべき人である。また、其外、哲學者宗教家著述家發明者等、專心一意、周圍の面倒な事を厭はずして、遂に、目的を遂げて、社會に貢献し、芳名を千歳に傳へた人士も多い。

然れば、現世が如何に腐敗して居ても、吾々は、この病氣に打ち勝つて、專心に勤めたならば、極めて不遇の人と云つても、必ず成功の月桂冠は得られるであらう。吾人の唱道する成功の秘訣は、失敗中より、勝利を抜いて、之を吾が障礙物を越ゆべき踏石ともなさなければならぬのである。斯くするには、第一に、面倒くさいといふ事を思つてはならぬ。古歌に、

憂き事のなほ此上につもれかし

限りある身の力ためさん

といつてをるのは、誠に、面倒臭い病患者の良薬とすべき語である。吾等青年は、この意味を詳に了解し、成るべく面倒臭い事に接して、而も面倒臭いとせず、全力を注いで、即ち人事を盡して、天命を待たなければならぬのである。其の目的に適する才能と之を貫くに足る精神とを以て、不屈不撓の勢で進んだならば、如何なる面倒臭い事と云つても、蓋し成し遂げられないものはあるまい。實に吾々青年たる者は、大に其邊に心懸けねばならぬ事である。

敵

五學年 藤 井 醇 一

明治三十七年二月九日、仁川沖の海戦に、日露の平和破るゝや、我が忠勇なる將卒は、陸には、彈丸雨飛の中を、吶喊の聲と共に進軍し、九連城を始めとし、得利寺、遼陽、はた奉天と、連戦連勝の裡に、敵を遠く満洲より驅逐せり。又海には、旅順口閉塞船の決死の働あり、海陸一致の攻撃に、難攻不落と誇りたる堅壘も、遂に、一月一日旭の昇ると共に陥落しぬ。露帝忿激して、バルチック艦隊を、遠く、東洋に向はしめしが、忽にして日本海の藻屑となり終れり。あゝ勇なる哉、壯なる哉。東洋平和の敵も亡び、ポーツマス條約に、數十年來の恨は晴れぬ。されど、人は、生存競争場裡に於ける一種の軍人なり。人の生存する間は、敵なきを得ざるなり。數十年來の平和の敵は亡ぶとも、吾人の爲さむとするものには、或意味に於て皆敵あるなり。先づ、吾人が日常の状況より説き起さむか。寒風枯枝を動かして吹く冬も、炎暑燦くが如き夏の日も、孜々として登校するは、何の故ぞ、これ、學校に於ける席順の競争なり。即學問の敵あればなり。衆人の前に優れたる力を試みては、各自その得たる所に従ひ、或は投げ、或は投げられ、或は倒し顛されて、エーオーの掛聲勇ましく揉みあふなり。これは力の敵あればなり。茫々たる亞弗利加の内部を旅行する者は、常に、劍銃を持つ。これ猛獸といふ敵あればなり。顔色蒼然として、病床に臥す。これ健康の敵の襲ひし時なり。この外、地位の敵、金力の敵、爵位の敵等あり。されど、是等は、皮想的、客觀的敵なり。吾人は、是等よりも猶遙に恐るべき實質的、主觀的敵をもてり。即ち良心の敵是なり。良心の敵とは何ぞ。夫れ、良心は、至善を標準として、行爲の正邪善惡を判斷す。よりにて、邪惡を避けて、正善に就かむとす。換言すれば、

ば、道徳的人物とならむとするなり。さらば、吾人は、容易に、道徳的人物となり得るか。否々、多くの敵は身邊を圍みて、しきりに私慾の矢をはなてり。人世、私慾程恐るべきはなし。古今の歴史を繙きて見よ。あたら英雄も、偶々私慾のために、身を亡ぼし、ことあり。近くば、日糖事件の如きは、私慾の爲めに、身を傷ひし好例なり。この私慾の敵を防がむには、精神、身體を健全にせざるべからず。顧るに、體育の目的は、教育の目的を達せむが爲めに、被教育者の身體を擁護し、且つ、之が發達健康を進めて、心のよき被役者たらしむるにあり。されば、吾人被教育者は、盛に體育を奨励して、身體を健康にし、健全なる精神を養ひ、以て、心の敵を滅すべきなり。

運 命 觀

五學年 山 一 源 吾

複雑にして、轉化極なき世の中、不可思議なるもの、素より少しとせず。然りと雖も、人間の運命程解す可らざるものはなきなり。目に見えず、耳に聞えず、形なく、色なく、而も、宇宙の表裏に瀰漫して、常に、人生の行路を支配す。

人世の行路は、所謂一寸先は暗にして、蠢爾として進まんとする所、武陵桃源の仙郷あるか、龍虎蟠るの蒼野あるか、黄金の花咲くか、蕭殺の風荒ぶか、憂か、喜か、殆ど圖り知るを得ざるもの、是れ、實に、運命てふものに支配せらるゝ所以に外ならず。

ア、解す可らざる哉、人世の運命。今日、金殿玉樓に起臥するの士、明日、忽ち破屋の下に呻吟する人と化し、

昨は落魄厭世の人なりしもの、今や一躍して榮達樂天の人となる。積善の家、必ずしも餘慶を蒙らず、醜徳の人必ずしも厄災に罹らざるなり。昔公を見よ、徳高く、行厚く、識秀てたりしも、而も、配所の月に、袂を濡したるに非ずや。藤氏の專横、如何に、人倫に悖りたる事よ。而して、榮華此の如くなりき。彼の豊公の如き、頼朝の如きは、實に運命の寵兒たりしなり。彼の吉田松陰先生は如何、彼の感化、實に我が國今日の隆盛を來すの徳を有し、且、終始公明正大、事に當りしも、終には、獄裡の人と爲られしに非ずや。是れ實に運命の神に棄てられしものなり。近くは、本年八月に起りし大阪市の大火、滋賀縣下の大地震等の災害に相遇せし人々の如き、運命の神に棄てられしものなり。ア、運命の支配する所、凡夫も忽ちにして起ち、英傑も空しく眠る。思へ。東西幾萬里、上下幾千年、世に、不世出の才を抱きつゝも、而も、是を實地に施すの期なく、或は、事情に妨げられて、空しく枯死埋没して、名聲遂に揚らざりし大英雄、大豪傑もありしなるべく、平凡なる俗漢にして、却つて、英雄と呼ばれ、豪傑と爲られしもの、亦甚だ少からざりしなるべし。ア、運命なる哉、運命なる哉。因果應報の理、必しも眞理とならず、科學の發達するも、哲學の研究進むも、之を如何ともすること難からん。

觀じ來れば、人は、運命に對して盲目なり。無意識なり。常に、自由を愛し、獨立獨行を欲するも、而も、一舉手、一投足、悉く運命に支配せられ、境遇に束縛せられて、何等の自由、何等の獨立あるを認めず。見よ、神佛に祈りて、家運長久を願ひ、狐狸を崇拜して、身の安寧を祈り、卜者の言によりて、將來の吉凶を窺ひ、曆冊を便りて、婚嫁葬禮を行ふは、社會一般の通弊に非ずや。而も、是れ悉く運命の豫測すべからざるよりして、自己以上の勢力の援助を待つて、不幸を免れ、幸運に浴せんと欲するに外ならざるなり。

然り雖、翻りて、考一考せよ。人世は、是れ蜉蝣の朝夕に非ずや。此の短日月に於て、適應なる因果、幸福なる境遇のみを願はんか、それ、恰も鏡裏の花、水底の月を望むに等しく、蹉跎又蹉跎、遂に、懷疑不平の裡に、一生を終らんこと必せり。由來、蒼穹は、漠々として涯なく、黄土は、茫茫として極なし。皎々たる月は依然として明に、赫々たる太陽は、長へに、宇宙を照せり。四時の變遷は、千古變せず。此の限りなき世に、限りある身を嘆ずるは、何等の愚ぞ。況や人は棺蓋に封せられずんば、其の眞價を知る可らざるに於てをや。夢の如き刻下窮達の運命に泣くを止めて、心を九天の高さに致し、想を大洋の曠きに比せんか、かの運命の如きは、敢て杞憂となすに足らざるなり。試に、遠く古聖賢の事蹟を探れ。毒を仰ぎて、静けき眠につきたるソクラテスは如何。陳蔡の野に食はざりし孔夫子は如何。十字架上に血を濺いで、而も從容として、死につきたる基督は如何。玉冠を棄て、財寶を抛ち、苦行を積みたる釋尊は如何。其の思想を宇宙の大に比し、視る所、渺々として遠く、待つ所、遼々として遠く、生涯の運命を度外視し、刻下の窮達を一笑に付し、綽々乎として、別に、大に期する所ありしに非ずや。

吁、運命の測るべからざるを以て、自暴自棄し、運命の解すべからざるを以て、全く、身を運命にまかすは、是れ、實に凡俗の所爲にして、吾人の取りて學ぶべき所にあらざるなり。須く、大悟徹底、運命の羈伴に泣くを止めて、拮据盡瘁、自己の天分に安んじ、不變の心を以て、無窮の間に逍遙し、天地の悠久永劫なるを樂むべきなり。

かの輕躁なる似而非厭世家は、宜しく、熟考すべきなり。

文明の新潮流

五學年 植 村 九 一

史を按ずるに、黑暗なる天地開けて、今に至るまで歲月は流れて、茲に、三千の大數を以て數へられるのである。漠たる太古の事はいざ知らず、此の永き年月の間に於ける渾球上の變化は素晴敷いもので、到底、學者の尺度外ならざるを得ない。而して、是等の變化の中でも、最も進行の速き、最も不停的の性質を有するものはと云はゞ、先づ、指を、今、吾人が論ぜむとする所の文明の世潮に屈せねばならぬ。史の、吾人に示す所に依れば、文明の基礎は、其初、ヒマラヤ、崑崙附近の平原に置かれたのであるが、中々古いので、今は其地には、形骸をさへ留めて居らぬ。之より膨脹して、西部亞細亞、亞弗利加の北方に擴がり、更に進みて、西方歐羅巴に波及し、尙ほ、底止するとなき、十五世紀の末葉より、北米大陸に向つて、猛烈なる勢力を以て蔓延し、歐洲と類似の文明を形つくり、餘力將に南米に流れんとする有様であつた。所が、建國二千五百年來、亞細亞大陸の東端に喰つ付いて、孤立の状態を保つて居つた日本は、明治の初めになり、例の黒船の煙に目を驚かされ、大砲の響に耳を愕かされたのが動機となりて、遂に國門の鎖鑰を外した以來、今迄米大陸に沈滞して、趨く所を知らなかつた潮流は、時を得て、恰も激湍奔流の防遏すべからざるが如き勢を以て侵入して來て、古來、かの印度より東漸して、久しく我國に留つて居たものと、茲に大衝突を演出せんとした。而しながら、好新厭舊は人類の通情で、前者の勢力は、到底、後者の敵するところもなく、遂に、新進の西漸文明は、古參の東漸文明を壓倒しやうとしたが、後者も亦全く枯衰せぬので、双方恰も、河口に於ける流水と海潮との如くである。偕て、兩潮流の將來は如何。或時季に於て遂に沈淪すべきか。或は永久に、

此の如く、この小島裡に衝突を持続すべきか。或は又、遠き將來に於て、一個の新世潮となりて、世界に瀾漫すべきか。是は吾人否一般人類の尤も注意すべき現象ではあるまいか。

元來、文明なるものが、史の教ふるが如く、古往今來、終始移動して止まぬものとするのが原則とすれば、吾人は如上舉げし所の疑問の、第三の解決を要すると思ふ。即ち現在の我國の文明は、東西の兩潮流が混淆せられたもので、或時季に於ては、二者相融和して、一の特殊の新文明を構成して、何れの方面かに向ひて流れるに相違ない。然るに、熟々我國の位置を見るに、古より東西を流れて來た潮流の最終點に當つて居る、由是觀之、以後新成の潮流が嚮ふ方向は、東西にもせよ、南北にもせよ、一定の出發點を定めて、更に、新に進み直す順序になつて居るではないか。畢竟、以後は我が日本島が新文明の基礎となり、二十世紀以降の文明は我國に生れて東西に、將た南北に、五大洲を經廻るであらう。されば、四千年前の文明の基礎國たる印度の、積歲衰微するが如きことなく、不朽不變に、世界文明の開拓者たり、新世潮の源泉たらねばならぬ。試に地圖を開いて一瞥すれば、茫洋たる太平洋の一角、孤龍、北方の天より、蒼溟を目がけて奮迅するてはないか。

青年と自覺

五學年 安 達 茂 作

今や、文明的諸惡病は、恐るべき勢力を以て我が帝國に侵入し來り、底止するところを知らざらんとす。文明的諸惡病とは何ぞ、ハイカラ病、戀愛病、厭世病、空想病、拜金病等其の種類枚舉に遑あらず、然も皆恐

るべき亡國病なり。喋々として悲觀を説き、滔々として樂觀を語る。整然として向上的に樂觀の途を辿るは賢なり。歩武亂れて進路を知らず、東西に狂奔して、名利に醒醒たる者は愚なり。自覺なき小我を抱ける鼻下長者流のみ。余輩深く、現代前途有爲の青年に、此の類多きを嘆ず。

複雑なる我が人生、否、宇宙の神秘を左右せんとして成らず、いたづらに、其不可解を嘆じて煩悶し、煩悶はやがて悲觀となり、悲觀は厭世を生みて、遂に、あたら番の花を、阿蘇の煙と化し、華嚴の藻屑と消ゆ、これ厭世病毒の致す所なり。彼等は自覺を失へるなり。萬古の光明漲り湧く天地の間、人は實に一塊肉のみ、一蜉蝣のみ。然れども、我が精靈的活動は、善く萬古を推究し、天地を吐吞す。茲に至りて、天地は實に一塊土のみ、一小塵のみ。心靈の宿る所、即人生の存在する所なり。人生は蓋し心靈の活動に外ならず。人生の風波は實に人生の人生たる所なり。人生の趣味なり、人生の花なり。既に人生と云ふ、風波なかるべからず。風波なくして人生なし。恰も、花開き鳥歌ふ春、炎熱焼くが如き夏、皎月明輝を放つ秋、互寒銅を挫く冬、以て、一年を成すが如く、無限の趣味は其の中に潜めり。其の波浪の裡には、不可解の深淵あるべし、不可思議の岩礁横はるべし、深淵を渡り、岩礁を過ぎ、以て、始めて、彼岸に達すべきなり。

今や戦勝の夢に耽りて醒めず、太平洋より來る暗流に、堂々たる帝都は。早くも渦中に卷込まれ、餘波將に山間僻地に及ばんとす。即ち國民は華美侈奢を事とし、上下安逸に流れ、優柔風を成すの觀あり。是れハイカラ病毒に感染せしなり。彼等は果して尊敬すべき眞の紳士なりや、淑女なりや。彼等は體よき京人形なり、否、毒を社會後進青年に流す毒蟲なり。自覺せよ、未來の青年よ。

矢矧橋上に薦を被りて臥したる賤童、遂には立ちて、天下の權を掌握し、遠く韓土を席捲し、豊太閣と呼ばれし秀吉。身はコルシカ孤島に生立ち、歐洲を蹂躪し遂には、佛帝の冠を受け、霸權を世界に振ひしナポレオン、皆吾人青年の模倣すべき模範的人物なり。青年は須く偉大なる抱負なかるべからず、遠大なる理想を有すると共に、又幾多の困苦艱難の、前途に横はるを期せざるべからず。然るに、現今の青年は如何に、いたづらに、理想、否、空想に耽り、成切を急ぎ、成金黨を希ひて、一生を僥倖せんとす、空想病も亦甚だし

い哉。殊に恐るべきは戀愛病なり。見よ日々の新聞記事を。一日として青年墮落の記事なきはなし。而して其の根源は戀愛に在り。「罪惡の半面には必ず色情を含む」ものなり。見よ、淫猥なる繪畫雜誌小説の如何にもはやさるゝかを。有爲なる青春の血は、早くも、佳人の涙に穢れぬ、いづこに、維新時代の青年の如き熱血の宿れるか。衣至肘袖至腕的の氣象はひそめるか。嗚呼、達觀せよ青年、功成り名遂げなば、佳人は期せずして來らむ。自覺せよ青年。

青年墮落の聲囂し、其の罪の青年に在るは論を待たず。されど、社會道德の一般に腐敗し來れること亦争ふべからざるなり。見よ、先般の日糖事件を。彼等は、身國政を議するの地位に在る堂々たる代議士にして、黄金に目くらみ、名譽を忘れ、責任を忘れ、人格を没して、金錢の奴輩となり、毒を社會に流して憚ること知らざりしにあらざや。これ社會墮落の一斑に過ぎざれど、亦にて全豹を知るに難からじ。拜金病亦侮るべからず。

以上の論述に由り、諸惡病の如何に恐るべきものなるかを知るに足らむ。今にして救治の法を講ぜずば、帝

國次第に衰弱疲弊して、遂には救ふべからざるに至らむ。嗚呼、危い哉、危い哉。上下三千年の、東洋、否、世界の大帝國、皇統連綿たる此の日の本の國は、永久に世界の大帝國たるべき國なり。現今の青年は、未來の國家を荷いて立つべき、第二の國民なり。當に大覺悟すべき秋なり。立てよ青年、目醒めよ日東健兒。

社會に對する現今青年の覺悟

五學年 田

中

貢

現今の社會は、過去の青年によりて成り、現今の青年は、未來の社會を成す。現今の社會が理想的ならんには、過去の青年は理想的なりしなり。現今の青年が非理想的ならんには、未來の社會は非理想的なるべきなり。果して然らば、未來の社會を組成せんとする吾等青年の責任それ重大なる哉。

抑理想的社會とは如何なるものを言ふか。物質的文明をなせる社會の意か、道德的進歩をなせる社會の意か。社會の物質的文明は、一は人類の向上的精神と、一は人類の慾望的精神とより成れるものにして、坐して大洋を渡り、一夢の中に千里を走る等、凡て諸種の慾望を満さんとするより出づるもの、人生の物質的幸福を與ふるものなれ共、毫も、社會の安寧秩序を保つ上に裨益あるべきものに非ざる也。物質的文明は、日進月歩、殆ど止まる所を知らざるも、道德的進歩に至りては、著しきを見ず、かへりて退歩せしにあらざるかを疑ふものある也。茲に、理想的社會と云へるは、物質的文明のみをなせる社會に非ずして、道德的文明に伴へる社會の謂なり。茲に、社會に對する青年の責任覺悟と言へるは、物質的文明に對するに非ずして、道德的進歩に對する責任覺悟也。社會の物質的文明は人類の向上的慾望より出づるものなれば、自然的に長

速度の進歩を成すものなれども、道德的進歩に至りては則ち然らず。社會には一種の風俗習慣ありて、之を一時に釐革せんこと實に容易の業に非ず。過去より未來に渡りて、悠悠流れ去り、流れ來り、漸次に改良すべきのみ。我國、古來武士道によりて、剛勇質樸の美風を成し、が、維新以後僅々三四十年間に於て、歐米の文明を吸収し、其の崇拜熱に驅られて、その正邪善惡を吟味するの暇なく、文物と共に、盲從的に、彼の風習を傳へ、我國古來の道德習慣は一掃せられ、武士道の精華は地に落ちて、漸く今日の惡風醜俗を見るに至れり。見よ、新聞紙第三面の自殺殺人を記せざる無きを。赤衣の人獄に滿つるを、訴訟法廷に絶えざるを。遠くは、金港堂書籍事件より、近くは、日糖の醜事件を。之によりても、現今社會が如何に腐敗せるかは想像するに餘りあるべし。是等社會の惡風潮を根絶して、醇厚俗をなすの習風に挽回するの責任を有する者は、青年を措きて、他に何人をか求めむ。

つらつら現今の青年を見るに、智識の點に於て、古人に優れたるは争ふべからざる事實なり。中學程度の青年の智識といへども、到底過去先輩の企て及ぶ所に非ざる也。若し智識は萬能なりと謂ふを得べくんば、現今の青年は、皆、將來の社會に於て十分有望なりと言ふべき也。されども、智識は吾人の才能を發揮すべき材料なり。故に之を統一活用するに意志を以てせずんば、其智識は死物たるべく、徒に疑惑に陥り逡巡躊躇せしむるの具たるべきのみ。

精力に至りても、亦必しも古人に譲らざるべし。彼等は、頗る武藝を重んじて、之に熱中せしも、衛生の注意を缺きたるもの、如し。若し精力は成功の基なりとせば、現今青年は、皆將來の社會に於て大に成功すべしと謂ふを得べし。されども、精力は吾人の大に活動せんとするに必要なる資本なり。之を活用するに意志

を以てせざれば、其精力は死物たるべき也。然れども、品性の點に至りては則ち然らず。古の物質的文明の恩澤を仰ぐこと甚だ僅少にして、旅行の如きも、諸種の交通機關の備はらざりしにより、如何なる遠路と雖も、長日月を費し、山野を跋涉し、不折の精神によりて達せざるべからず。學問の如きも亦然り。非常に強固なる意志あるに非ざれば、到底成し遂ぐる能はず。且つ武士道盛に行はれて、意志の修養に益すること多大なりき。然るに、世の文明の進むに従ひ、有形に無形に、其恩澤を仰ぎて、快樂の方便増加すると共に、奢侈は一般の風をなし、何事も、困難を避けて、安逸を貪り、殊に教育に於ては、興味を主とし、短少の時間に、勞せずして多くの智識を得しめんとし、學校は完備し、書籍は充實し、器具はあらゆる利便を計り、今日の學ぶ者、恰も安樂に學問を修得するを以て目的とするが如き觀あり。且つ交通機關も非常に發達して、今日の青年は、或は徒歩に堪へざるが如きものあり。されば、現今青年が、困難に遭遇して、其意志を強固ならしむべき機會は、貧困病苦の他殆ど之を見ざる也。従つて、現今青年の意志は、恰も薄氷の日光に曝さるゝが如き觀無きこと能はず。されば、容易に、世の惡風に誘惑同化せられて、安逸を貪り、奢侈遊惰に流れ、其の品性の劣等なる者其數決して少しとせず。又假令青年時代に於て醜俗に感染せず、社會に於て無限の希望を有する者と雖も、一度世の濁流に投ずれば、滔々たる其惡風潮に同化せられて、遂にあたら希望を捨て、物質的利福を逐ひ、人倫道德を顧るに遑無く、多年學び來りし道徳倫理も、遂に其の効無くして、水泡と消え去るに至る。是現今青年の一大缺點にして、意志を強固ならしめて、品性を修養するは、現今青年の一大急務也。

世の青年諸君よ、願くば、全身の力を擧げて、意志の修養、品性の陶冶に力められんことを。柔劍道は更なり、遠距離徒歩旅行をも企つべし。怒濤の中に漕艇をも試むべし。凡て奮闘的生活の中に、己が意志を一貫斷行す可し。思へ、古の青年健兒が、高下駄がけに、箱根八里の岩根を踏みならしたる銳氣を。忍べ、古の青年武士が、大小腰に、英氣颯々、天下に修業せし英風を。

然れども、意志強固にして、社會の濁流に投じ、自ら其品性の潔白を保つのみが現今青年の唯一責任に非ざる也。更に、未だ社會に出てざる一個青年として、現今社會の弊風を矯正するの責任を有するもの也。青年は將に社會の一員として起たんとするもの、社會の一方にありて、一種の勢力を有するものなれば、よく、社會の原動力となりて、之を感化指導すべき也。殊に、學校生活をなせる吾等青年を然りとす。學校には一の校風あり。多數の生徒之によりて統一せられ、其團結強固にして、社會風潮の外に立つものなれば、其惡風潮に抗して、愈々其の校風の美を發揮し、以て、内は、各意志を固め、品性を養ひ、外は、社會の弊風を矯正するの任に當らざるべからざる也。是吾人青年學生の一大覺悟を要する所以也。學校は一の小社會なり、校風の美は即ち將來社會の美風善俗なり。然らば則ち、校風を振起するも亦社會に對する責任の一なる也。然るに、現今學生中、その本務を忘れ、徒に社會風潮を追ひ、奢侈遊惰に流れて、校風を萎靡せしむるものあり。社會の風潮を遠ざかれる學校に於てすら斯くの如し。況んや校門を辭し、社會の一員として起てるをや。浩嘆せざるべけんや。

要するに、自己の意志品性を修養して、己を未來社會に於ける完全なる一員たらしめんとするは消極的の覺悟也。青年の氣風を發揚して、現今社會の腐敗を收めんとするは積極的の覺悟也。吾人青年は常に消極的覺悟を要するのみならず、大に積極的覺悟をなさざるべからず。現今の青年亦多事なる哉。

別れに臨みて同窓の諸君にまゐらす

會友 早川富正

余は、今、一片の卒業證書を携へ、なつかしき校門を辭せむとして、暫し別離の情に得堪えず、校舎の聳然たるを顧み、既往に對する感慨交も襲ひ來り、平然として去る能はざりき。鳥の將に死なむとするや、其の鳴くこと哀しく、人の將に死なむとするや、其の言ふことよし。我が校に於ける余輩の生命も、暫し終りを告げむとする程に、今の回顧の涙亦一瞥するの價はあらむ。余中學に學ぶ事茲に年あり、花は五度笑ひて五度散り、紅葉は五度色つきて五度萎れぬ。其の間、何一つ人に誇らむ程の事もなく、唯悔恨の涙を湛へて、校門を去らざるべからざる吾の何ほど口惜しき事ならずや。然も、其の然る所以のものに至りては、一に、是を、余が確固たる主義を缺きしに歸せざるべからず。親愛なる同窓の諸君に切に望む、常に確固不拔の主義を維持し給はむ事を。主義の堅實なるものは常に榮え、主義の薄弱なるものは常に衰ふ。是は此宇宙間の一大法則なるを知り給はずや。實力の養成は、何人に取りても極めて肝要なる事なれど、而も、其の必要は、吾人學生に於て最も深きを見る。何をか實力と言ふ、僥倖の助を藉らずして活動し得らるべき範圍に於ける吾人の精力なり。時の利否を問はず、常に優勝の位置に立たむことを希望するものは、絶えず、實力養成の四字を、其の頭腦に刻せざるべからず。人往々にして誇る、吾實力あり、何となれば、何等の勉強を要せずして、試験に好成绩を得たればなりと。吾人は、その誤解の甚しきに驚かざらむと欲するも得ざるなり、斯くの如きは、實に僥倖中の僥倖なるものにして、偶々其の知悉せる問題に遭遇せしを以て、辛うじて、斯く

の如きを得たりしのみ。安ぞ、是を以て實力の豊富を誇るべけむや。眞面目なる勤勉によりて、始めて、實力は養成せらるべきもの、決して、放縱以て日を送り、冒險的漁點を試むるによりて行はるべきものならず。吾人は時に、斯の如き觀念を抱きたりき。然も、今や、思ひ此に至れば流汗淋漓たり。自己の才能を誇張するの目的を以て、斯くの如き言を發するものに至りては、其の心事の陋劣なる實に憎むべきの極なれども、然も、自ら、自らを欺く天罰の觀面なる、亦憐むべきの極ならずや。嗚呼、誤れるの甚しき哉。告白せむと欲する所は胸に餘り、而も、離別の情に切なる、筆路是に添はず、懺悔せむと欲する所の事は頭に充ちて、而も、悔恨の涙に、鈍き舌動かず。茲に、筆を擱して、諸君の健在を祈らむ。

岌々乎として危き哉

會友 中村道生

蘇轍曰く、「文者氣之所形。然文不可以學而能。氣可以養而致。」と、實に然り、仰いで蒼穹の邈乎たるを望み、俯して地章の燦然たるを觀ば、一種の美感を起さん。此美感の發現是れ文の形つくらるゝ源泉なり。春風雲を誘ひて。落花雪の如く、馬上將軍の髮を埋むる所、誰か歌をよまざる。弦月疎林に在り、雁聲寥々耳を掠むる邊、誰か詩を詠せざる。此の詩、此の歌、人をして人たらしめ、胸中樂怡、悠然として高尚優雅ならしむ。文學は實に人間自然の感情思想の發現にして、一日もこれなくんば、人世は荒野のみ、荆棘のみ。

明治文運の隆盛なる、將さに全美の觀を呈せんとしつゝありと雖も、その半面を窺はむ乎、董や星の戀愛文學、卑陋極まる駄小説、一々數へ來つて之を録せば、十紙も足らじ。佐藤一齋先生の言志録に曰く「稗官野

史俚説劇本吾人宜如淫聲美色遠之。余少年時好讀此等書。到今追悔不少。」と、先生にして猶此の如し、好んで馱雜誌を弄び、似而非文學者を氣取るもの、岌々乎として危き哉。學生風紀の紊亂、意氣銷沈の聲、世上に聳々たること久し。思ふに、學生をして今日の墮落に至らしめたるもの、似而非文學、惡小説の影響多きに居らずんばならず。作る者の否か、讀む者の否かは暫く措き、而かも、これらの文學にあやまられて墮落する學生こそ氣の毒なれ。然れども墮落の淵に沈倫せるもの豈嘗に學生のみならむや。政界の混亂は、有識の士をして、三百臭骸滿議堂と嘆せしめ、節を賣り義を捨て、收賄に浮き身をやつし、黄金の爲めに叩頭する者皆然らざるはなく、慨世の士をして、その肉を啖はんと欲せしむ。皇統長へに渝ることなく。有史以來三千歳、我祖先等が、大日本帝國をして今日あるに至らしめたる苦心經營の跡、歴史の示す所に眼を晒さん乎、吾人青年感憤激勵せざらむと欲するも得べからざる也。

請ふ見よ、彈丸黒子の孤島を以て、東海の表に卓立し、建國以來、未だ嘗て外侮を受けず、今日に至れる所以のものは何ぞや。國民一致、仁に勇み、義に勇み、命を鴻毛の輕きに比せしによらずんばならず。見よ、四面敵圍の裡に立ちて、從容たること泰山の如く、日本男子の本領を守り、冷かに笑つて、新羅王我が骨肉を食へと罵り、身は遂に死して、而して心は死せざる伊企灘の如き、妖僧、非望を覬覦するに當り、身を犠牲にして直言し、心膽を寒からしめたる、和氣清麿の如き、海を蔽ひて攻め來れる十萬の元寇をして、大瀛の裡に没し去らしめたる相模太郎の如きを。又見よ、蹇々匪躬、王事に勤め、子孫の肝腦を盡して惜まざりし楠公の如き、鼎鑊甘きこと飴の如く困圍の裡、死を見る歸するが如くなりし幕末幾多盡忠報國の士の如き、是れ皆我國の精華なる武士道の發現の效果に非ずや。

堂々として、意氣千丈、天に冲するが如きは青年の思想なり。滔々として、山は抜くべく、海は翻す可き底の氣概は大丈夫の思想なり。其手未だ動かさず、動かば將に世を駭かさんとす、その口未だ開かず、開かば將さに人を驚さんとす。青年が一國の原動となり、元氣となるは之が爲めなり。故に吾人青年は専心に蘊蓄すべく、修養すべく、研究すべきなり。世には言をなすものあり、「學生風紀の紊亂は一に繋りて社會の不備に在り、若し社會にして完全ならん乎、學生の風紀自ら改まりて、墮落者の數を減すべし。現に世人の遊ぶ處には、料理屋あり、劇場あり、玉突場あり、白晝酒を呼ぶもとがむる者なく、高樓娼婦に戯むるも怪むものなし。之に反して、青年學生には、何等遊歩する處もなく、矛盾せる社會に制せられ、而かも、陋劣野卑なる文學の多き、以て學生を誘はんとす、墮落せざらむと欲すと雖得べけむや」と。言固より理なきにあらざる、然れども、社會の不備不完全、これを歐米先進國に比せば或は然らむも、これを以つて我チヨン鬪時代に較べなば、その優劣果して如何ぞや。糟糠を管めて書を繙き、盃を釣りて雨漏を禦ぎ、隣家の燈光を盗みて苦學せし時代を思はば、生を現代に享くる吾人の幸福も亦大ならずや。文王を俟て後に起るは男子の愧づる所、彼の英雄豪傑の如きは、文王無くして猶起る。社會の不備不完、吾人に於て何の關する所ぞ。

吾人は再び叫び、馱雜誌、似而非文學、吾人の學ぶべき所に非ず。伊企灘の盡忠、清麿の直言、太郎の豪膽、楠公の勤王、何れか大和魂の發現ならざる。徳川三百年の基礎を固めしは誰の力ぞ、勇猛なる三河武士に非らざりしか。維新の大革命をなし、は、文筆を弄し、花に泣き、月に嘯きし京洛の青公卿にあらずして、寒山寂を破りて狡兎を追ひ、茅舎に月を帯びて夜書を讀みし武骨なる青年血氣の人なりしなり。吾人青年は國家の元動力たるを記憶せざるべからず。天地正大氣。粹然鍾神州。秀爲不二嶽。注爲大瀛水。洋々環八州。

發爲萬朶櫻。衆芳難俱儔。疑爲百鍊鐵。銳利可斷整。とは東湖藤田先生の詩に非らずや。吾人神州に生れ。神州の粟を食む、誰か神州の男子ならざらむや。吾人青年社會の一員として、常に、現今の青年は墮落せりてふ社會の聲に快からず、心よからざる者豈我獨のみならむや。内に鬱する者、外に通ぜざれば氣を害す。發して遂にこの拙文を生めり、諸君幸に一閱の榮を賜へ。



秋

二學年 町原千代輔

東風煽々として、花笑ひ鳥謠ひ、河邊に翠を拾ひ、隴間に紅を摘みし春も過ぎ、蟬聲喧しく、萬木千草皆枯凋せんとする夏もいつしか去り、秋空高くして馬肥え、草叢に唧く蟲の聲もそゞろ身にしむ秋となりて、光景凄絶、風色慘憺たり。紫廻せる溪流漸く涸れて、奇石怪壺其の間に盤礴す。仰ぎ見れば、險岨絶壁凡て楓樹、灼々として綉を纂め、錦を綴り、松檜其の間に相交りて翠點々たる、雅趣頗る深く、黄金の奇蕈、紫錦の艶葩を輝かして、百花に

殿たるの清景愛すべし。

滿苑の菊花秩あり、淡あり、黄なるあり、白なるあり、清香馥郁として鼻を撲ち、衣を薫す。嚴霜地を蔽ひ、百草凋衰する時、菊花獨り傲然として、妍容を銜ひ、清香を放つ。秀麗愛すべく賞すべし。山野の木々には、果實の紅く成熟する時なれば、子女等は出て、栗を拾ひ柿を摘むも亦樂しみあり。田家の收穫、刈る者、餉する者、負戴するもの、路旁に絡繹し、男女の歌聲鳴々相和す。夜は明月窓を照し、孤燈影暗く、颯々たる金風梢を吹き渡り、鎮守の森の蟲聲は、なみよる尾花の裡より起る。月いよ／＼明に、遠寺の鐘聲時に寂寞を破る。それ、秋は人生の最も愉快に、且つ活動に適する時なり。況や吾等學生に於てをや。暑寒中を得、燈火親しむべきは秋なり。第一學期は、酷暑の中に於て、徒に身心を苦悶せしめて、勉學に最も不適の時なりしが、秋は之に反して樂しき時なり。吾等は此の好時機を利用して、大に勉勵すべし。

病床の感

四學年 伊藤道顯

あゝ、忘れんとして忘るゝ能はざるは、去りぬる八月十五日の出來事なり。さきつ日より病の床に打ち臥せる吾は、日々に衰弱し來りて、今日と云ふ今日は、病勢の一しきりあらたまれるを、われから覺りぬ。こやみなく起る聲は、前日来、一粒の粟も、咽を越さざるわか疲れ果てたる身體を、さながら、奈落の底に引き入るゝが如く、時に眠らむと欲すれば、烈しきせき起り、吾が胸は裂けんばかり困しくして、眠りもせざ

るなりき。かくて、えも云はれぬ感想は、胸をついて起りぬ。嗚呼、われは何とてかくも恐しき病の手に捕はるゝ身とはなりしぞ。昨日の醫師の話には、病勢のたゞならぬ様らしかりしが、或は不治の病症とも成果てたるにはあらざるか。あゝ、吾は何たる不運の身ぞ、生れて、此に十八星霜、兩親の恵みの露にうるほひて、何の不自由なく、學びの道をたどりつゝありしものを、思へばはかりがたきは、人の運命なるかな。今不幸にして、死の命に會せば如何。吾是迄の勉學、父母のはかりかたき苦心は、水泡となるのみならず、天賦の職分を全くし得ずして、世を果つる事の口惜しさよ。かくて、父母のなげきは如何に、友のなげきは如何に、先の日尙ほ健全にてありし時は、友と共に大言壯語して、行末の事ども打ち語り、胸中に、未來の夢を書きては、相共に打ち興ぜしものを。友は皆歸省して、或は水泳に、旅行に、勇を振ふならん。然るに、吾は何たる事ぞ、同じく、故山に歸省しつるも、間もなく、病床に臥する身となり、父母の心をなやましつゝ、苦悶の深淵に呻吟し、明日の日もはかりかぬるとは。人生ほどはかなきものはなしと、思ひは果てしなく馳せ、心は亂れに亂れて頭腦は鎔けんばかり、熱を醸すなりき。ふと誰か呼び覺す聲す。はて眠りしなるかと、頭を上ぐれば、こはそも如何に、ベッドの周りには、家内中打ち集へり。聞けば、吾は數時間、昏睡の状態に陥り、はからずも幽明の境界にさまよひしも、天運尙ほ盡きやらず、遂に、人々の愁眉を開かしめしなりき。今擱筆するに當つてや、汗、雨の如し。

萩四景小記

五學年 三 浦 嘉 七

指月園の春霞

東風吹きて百鳥歌ひ、春雨到りて千草蘇り、朝日に匂ふ櫻花の、艶を競ひ美を争ふ頃至れば、春霞樹上に鑿鑿き騷人遊客、杖を曳きて徘徊す。時に花片飄々乎として、小池に散る亦興あり。

菊ヶ濱の暮色

金を銷し、石を鏢す日中の暑さに、草木も枯れんばかりなるに、身の置き所なき悲しさは、只日影の西に傾く時を待つのみ、暑さ漸く消えて、西の空、紅の雲たなびく頃となれば、夕陽水平線上に浮び、白浪紅を染め、海穩にして白帆進まず。暮烟忽ち黄昏を蔽へば、鳥啼を求めて歸る。指月山頭孤月明に、漁火波上に點し、夜色渺茫たり。

阿武川の朝景

水明に流清く、時に洞庭の潮を湛へ、或は西湖の波を揚ぐ。有明の月影薄れて、東天白めば、雲紫色に變じ、河水亦爲めに紫なり。曉鴉一聲、朝暎天に昇れば、波光的燦、眼之が爲めに眩す。嗚呼、此の曙光、絶觀と云つべし。

観音院の鐘聲

明け行く空の松の林、緑の色も深野町、船何時しか岸に着けば、観音院、山の翠のそが中に、樓閣巍然たり。院の鐘聲暮烟を破りて、諸行無常を告げ渡れば、風に咲きそふ白浪の華の中なる常盤島、蘆邊の孤雁驚啼く亦愛すべし。

不 言 録

五學年 福 田 敬 二 郎

○美は人生の花なり。人に美の觀念なきは、木に花なきが如し。花なき木は伐らるべし。人生亦斯の如し。「美は偶然の現象にあらず、天地人生の精神の發動なり。されば美を害ひ、美を滅す所に美の存するなし。吾等は美の毀損せらるゝ所に、常に道德の紊亂を視る」とグラッドストーン翁言へり味う可し。

○怒と云ふ事は最も慎む可き業なり。常に怒を抱く人には愚者多きものなり。見よ、怒れる仁王は寺の門にあり、慈悲の本尊は本堂に居まさずや。人は怒れる仁王を見て鑿鑿し、慈悲の本尊を尋ねて渴仰す。

○希臘の哲學者ダイオジニス嘗て街頭に立ちて、熱誠を注ぎて、德行論を演説せしに、聽衆漸く去らんとす。こゝに於て、急轉野卑猥褻なる歌を高吟したるに、聽衆直ちに山をなすに至れり。彼嘆じて曰く、「嗚呼甚しき哉、賢者の世に疎んぜられて、痴漢の人に喜ばるゝこと」と、人の性は、俗に傾く事八分にして、徳にづくこと二分、故に此の嘆あり咄。

○「腹八合の醫者要らず」とは、僅々九字の俚言なれど、よく眞理を道破せり。萬事、分に過ぎたる事をなせば必ず中毒するものなり。而して、中毒には、大概、藥の効少なきものなり。噫八合なる哉。されど、世に「八文」といふは、一錢に二厘足らざるを嘲りたる比喩語なり。宜しく前者と混同する愚をなすべからず。

○「基督の王國を此の世のものとしむとするは謬見なり。人國は遂に天國たることを得べからず。國家は基督教によりて成立せず、又成立すること能はず」とは、さる有名なる監督僧の公言なり。宗教は基督教に限

らずと雖も、その國家との關係を説く、説き得て妙なる哉。

○「吾十有五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず」とは、大聖孔子の自證なり。人生四十に達して始めて不惑に達し、過去の大煩悶を解き、人生に光明を見出せり。人は宜しく大に煩悶すべし。煩悶なき人は人事を解する能はず、安心を得る能はず、自我を知る能はず。大聖基督は、三十年の長日月を煩悶に費して、始めて、人生を悟得し、立つて、吾は神の子なりと絶叫して、千古に異彩をはなてり、再び大呼す、人は宜しく煩悶すべし。

○人間は、腦中に、自ら夙に化物てふ思想器を創設して、他の動物より無形の專賣特許を得、暗夜寂寥の所にては、柳の枝のそよぐを見て、早速長髮蒼顔の幽靈を製造し、先づ腰を抜かして、獨り之を實驗す。「人間は自ら不思議を作りて其の不思議に驚く」とカント氏曰へり。智ある人間は、案外他動物より愚なるものなり。

○偉大なる哉舌の力、雄辯の勢力、モーセは、其の雄辯を以て猶太民族を奴隷より救ひ、ペリクレスは、其の雄辯を以て、二十年間、雅典をして同盟の盟主たらしめ、ピーターは、其の雄辯を以て、未曾有の十字軍を起し、ピットは、其の雄辯を以て、那翁の勢力に抗せり。蘇秦一たび説いて、六國の印綬を帯び、酈生軾に伏し、齊の七十餘城を降せり。奮起一番、辯舌を修養すべき哉、現代の青年。

○歌を作らんとすれば、森羅萬象に、詩美的材料の發見に注意するに至り、引いては、人の美感を養成し、進んでは、人心を緩和し、憂悶を排除するに多大の効果あり。吾邦人は、神代より、作歌の習慣あり、專向は尙ぶ所にあらず、唯本業の餘暇、娛樂として勉めなば、又捨てがたき裨益あらん。

○「鶏口となるとも牛後となる勿れ」を、「牛後となるとも鶏口となる勿れ」と添削するもの、今の世有耶否耶。活動を捨て、安逸を願ふものは、亡國の民にして、新興國の異分子なり。一秒時も、首を胴に借すべからず。

○耶蘇教徒は偶像崇拜を冷笑す。抑も、崇拜は、そこに、己れより偉大崇高なる目的物を書きてなすものなり。之を形に表はすと否とに關係なし。木を彫り、石を刻みて想躰を作り、その形貌に接して、その實躰の人格を信念上に喚起し、崇敬止む能はずして、遂に頭を垂る。想躰は實躰の形象なり。故に五官なく、精神なしと雖も、吾人が一念、そのものを思ふ所に、神は存在するものとせば、何ぞ偶像崇拜を排斥すべけんや。○洋燈の暗きは石油の缺乏せるなり。光朦朧として明ならざるは笠なきなり。一時は甚だ明かなりしも、忽ち暗くなるは、螺旋を著しく上方に廻すなり。油あり心ありて、次第に暗くなるは、螺旋を下方に廻はすなり。石油よく燃え、笠全きも、尙ほ暗きは、ホヤ曇れるなり。人生亦斯の如し。机上の洋燈、これ吾人の良師友。

○「唯今日無事なる事を思へ」とは、楠公が千劍破の壁書に記されたる格言なり、人生は、今日ありて始めて過去未來の存在するを知る。現在に於て、最良事を盡さずして、未來に心を勞する愚人を誠む可き哉。「差當る事のみ思へ人は唯昨日は過ぎる明日は知られず」との古歌を又思はずや。

○一言以て君子と小人との差異を斷ずれば、君子とは、他愛の念強くして、小人とは自愛の念強きものなり。吾人は、君子小人二進の人物を理想とせば誤なからんか。

○單に甘さを甘しと感じ、辛さを辛しと味うは平々凡々の輩にして、人生の眞味を解せざるの徒なれば、兎

角華嚴淺間を慕ひ易きなり。大詩人ゲーテ曰はずや、「涙と共に己のパンを食はざるものは、辛苦の神妙なる力を知らず」と。辛苦の神妙なる力を知るは、即模すべき着實の人なり。

○小兒が禮する時、大人が之に對する感想態度如何。唯己より年至らざる小供として意に止めず、帽子をもぬがず、うなづくのみにて、速足にて行き過ぐ。思ふべし。可憐なる小兒の心中には、吾より年多き大人叔父さんとして敬ひ、果てはうや／＼しく禮するなり。そこに、一點の輕薄なし、邪氣なし、これを眞に禮するものと云ふべし。噫、大人よ、汝は小兒のいとしき心を讀まずや。

○人は、現在の瞬間に於て、恐懼と輕侮との分岐點に立てり。東すれば安全なり、西すれば失敗なり。シエキスピヤは「最も安全なる法は恐懼心にあり」と云へり。これを警戒服膺すべき羅針盤。

○社會の進歩は駸々として止むことなく、新陳の代謝、適否の淘汰、一盛一衰、一轉一化、斯くて生れて生きて死す。二十四元素に分散して宇宙と合し、又結合して、何等かの生物となつて發はれ、新しき歴史を此の地球上に繰り返す。物質は不滅なりと云ふを得べくば、自己は永劫に消えずと云ふを得べきか。

○車に乗る人、乗せる人、其の草鞋を作る人とは、社會の貴賤貧富の状態をうがち得て妙なる哉。人各々其の分に安せずんば不幸なり。向上發展は其の人の自由なれど、大海を手にて堰くの愚をなす可からず。

○人誰か罪なからんや、過なからんや、こゝに、悔改の必要を産む。陽明曰ふ、「悔悟はこれ病を去るの藥なり。之を改むるを以て貴となす。若し其の中に留滯せば、又藥に因つて病を發するなり」と。藥もしば／＼服用すれば停滯を來して、かへつて、之が爲めに癒ゆ可からざる病を發せん。良藥を早く服して健康に復し、而して、再び病に侵されざる様、健康を増進せざる可からず。故に罪過は悔いて而して改むるを必要とす。

○男子は男子らしからざる可からず。諺に、茄子と男とは黒い方が善いと云へり。白粉を顔に黠し、香水を頭に灑ぐ女性的の輩は唾すべきなり、色黒く、骨逞しく、ゴツ／＼として岩の如き男子を男子と稱す。

○武士道を武の専有物となすは謬見なり。地球のそれに於けるが如く、士農工商を貫ける一大機軸なり。而からば、その武士道とは何ぞ、松陰先生は説けり、眞文眞武を修め、心を正しくし、國家を治め、天下を平かにする、これ武士道なりと。

○「愛己即愛他てふ眞理を看破するの智慧と、この眞理を斷行するの愛とあらば、吾人は生涯に於て勝利者たる事を得」と、安部磯雄氏云へり。世界十五億の民、果して、幾何か、此の勝利者たるを得る。なせば成り、なさねば成らず、なる業をならずと捨つる人の果かなさ。互に此の嘆なきや否や。

○莊子曰く、「天地に大美あつて言はず。四時に明法ありて議せず。萬物に成理ありて説かず」と、彼の繪畫彫刻文學哲學は、皆、是れ、此の大自然と云へる無盡藏より流出せる産物なり。吾人は、宜しく、自然を最愛の友とすべきなり。

○萬里の波濤を越えて、世界の樂園たる我蜻蛉州に渡來し、子孫を繁殖して、年々凱旋する彼の燕を見よ。彼は三寸の鳥類、而かも此の勇あり、壯あり。堂々五尺の吾人は、益鳥として是を遇すれど、その奮闘の生涯に至りては、彼に學ばず、慨又嘆。

○抱負は人を作る。抱負小なれば、則小人となり。抱負大なれば則大人となる。諸友の識見と予の識見とを比すれば、猶月の光と日の光りとの如し、と自ら嘯き自ら重ぜしは那破翁にして、此の偉大なる抱負、よく彼をして、一躍帝冠を得しめ、震天動地の大事業をなさしめたり。

○世擧つて物質的文明の弊を嘆ず、そも物質的文明の弊何物ぞ。品性は、これ魔に對する唯一の利劍なり。彼の米國前大統領ルーズベルト氏曰く、「夫れ國民たる資格中、何物も品性より重要なるはなし、身體健全、固より重要ならざるに非ず。智識の訓練亦然り。然れども、個人の立場よりするも、國民の立場よりするも、此等を完備し、勇敢強健にして、善良なる男子を作るの要素、一切を具備するより善きはなく、而して我等一切の諸要素を總稱して品性とは呼ぶなり」と、反省すべき言なり。

○松陰先生、幕吏に護送せられて、泉岳寺前を過ぐる時、「かくすれば、かくなるものと知りながら、止むに止まれぬ大和魂」と詠めり、美しき丈夫の犠牲の魂、光を日月と争ひて、千歳のもと尙炳乎たり。

○同情に依りて、吾人は、吾人の存在を認む。人に同情心あるは、猶地球に引力あるが如し。人幸福の生涯を送りたりとすれば、そは圓滿なる同情心ありし故なり。新渡戸氏曰く、「よし間違うても宜い、欺かれても差がない、人の弱點を見て「あゝ、お氣の毒だ」と云ふ念を起す事に力めて居ると、同情の念が自然に湧いて來る」と、此のあゝお氣の毒てふ心の浮ぶは、既に同情心の成れるなり。

をりくのすさび

特別會員 高 木 瑞 枝

梅の花それとも見えず沫雪のふりかゝりけり春の寒さに

心までしみわたるかな霜雪を凌ぎて匂ふ梅の色香は

春來ぬとをちの高嶺は霞みけりこの谷かけは雪のふれるに
 芝浦の水夫の船歌長閑にて霞こめたり安房の山々
 春の日の暮るゝも知らず少女子か鞠歌うたひ土筆つむなり
 くれなゐの裳裾かへして少女等がみどりの野邊に葎つむなり
 皆人はかへりし後に月出ていと静けき花のかけかな
 音もなく降る春雨に山里の麥生の色を青く見えぬる
 さなきたに静けきものを山里の賤が伏屋に春雨の降る
 雨雲のたゞよふ空に蚊遣火の烟なひけり小山田の里
 蚊を追ふといふす烟の賤が家に心細くもたちわたるかな
 五月雨に琵琶の海面かさくれて見えずなりけり竹生島山
 五月雨に琵琶の湖水増して浦水を渡る船たにもなし
 おはしまによれる少女の袖かろくかへす夕の風の涼しさ
 五百重波越えて吹き来る浦風に夏をも知らず今日は暮しつ
 秋來よと待ちにしものを猶去らて残る暑さの堪へかたきかな
 軒つとふ風たになくて中々に夏にもまさる暑さなるかな
 置く露にたへかたけなり賤が家の庭もせに咲く秋萩の花
 啼く家鶏の聲にも散るか山里の庭に盛り白萩の花

八汐路の底より月のかゝやきて黄金の波の湧きかへるかな
 千町田のいなばの露のきらめきて高峯に昇る月のさやけさ
 いふせさの心やりにと登り來し岡にも秋の風の吹くかな
 朝露に濡れて岡邊を越え來れば衣手寒く秋風ぞ吹く
 風寒み秋や來ぬると打見れば雲井に雁ぞ鳴きて來にける
 秋風に飛び行く雲の絶え間より入日にほひて雁鳴わたる
 虫の音も秋の夜長をかこつらむ寢覺の床の明け難きかも
 きり／＼す枕のもとに鳴よりて秋の長夜ぞいとわびしき
 折り取らば散りもやすらむ白菊の花にきらめく玉の朝露
 鶉なく秋の野末に風吹きて小菊の花の露をこぼるゝ
 夕空の時雨をおくることからしにひとしきり散る寺のいてふ葉

○雜

釣舟のみたれて出つる夕なきに白帆動かぬ相島の岬
 島山はしほの烟にかきくれて白帆かすかに見えわたるなり
 あかねさす入日を洗ふ波間よりはつかに見ゆる帆かけ船かな
 春の野にあそぶ胡蝶のこゝちせり青海原に見ゆる白帆は
 語らはむ友もなき世の故郷に親のかたみの松をこそ見れ

年々に荒れまさり行くも松は常磐の色まさりけり
 亡き姉君の寫眞のうちに
 去年の春三人うつりしうつしるはあれども君の現身ぞなき
 一升谷にて夕立にあひて
 降らば降れ親を思ひの旅衣ぬるともいかてたち歸るべき
 降りそぐ雨ぞ中々こちよき木蔭だになき夏の旅路に
 父君の病とききて歸る時自轉車の上にて
 今日はいと車の遅き心地せり病の床に父のまたすに

讀松陰傳

特別會員 藤 井 百 輔

匹夫而正議動天下、身死而爲百世之儀表、人之於世、當無以尙焉、然而苟有名利之欲、死生之惑者、未可以望之也、超脫於名利之外、達觀於死生之間者而始可望之、離名利、齊死生、則非純忠至誠、一毫鄙吝之萌不存於心者、安能致之乎、洵能如斯、則其人死猶生、其骨朽而其正氣終不滅、可以能維持世道人心於千萬年矣、若夫賦命之脩短與身世之窮達、志士仁人所不關也、幕府之末造、政綱解紐、儉安之風靡上下、吏人不勤理、武夫不修武、是以一旦有海洋之警、四海鼎沸、上下束手、策無可出、邦家之運危於累卵、幸有祖宗之威靈護神州、豫降志士仁人於其間、明其目、聰其耳、大其聲、固其志、以爲天下之木鐸、以爲生民之指南、以令救

神州於陸沈、然而如吾松陰吉田先生則其最大者也矣、先生之學、去華務實、尊皇爲經、治民爲緯、不分文武爲二途、視之於原心於抄忽、較禮於寸分、一字之義、一章之旨、終生矻々尋之、而王霸之異同且不辨之徒、不啻明犀之於馬骨矣、先生三十而未有室、先生豈不思爲家者乎、心在國家、未暇於從私事耳、先生之東遊、偶觸國禁、先生豈不憚犯法者乎、志切忠君、以有不遑於顧他者耳、至如伏水要駕之策、下田脫國之舉、憂憤之極、出於萬不得已、乃見先生之所以先生也、先生平生好誦至誠而不動者未之有之一語、視其平生之言行、未有不發於一至誠者、至誠之心、行之以剛毅、故岸獄檻車不能傷、寒暑疾疫不能侵、其處死生之際所以特從容自如者、豈不之以乎、先生之言曰、斯心已與楠公諸人同此理、安得隨氣體而腐爛潰敗哉、必也使後之人亦觀乎余而興起、古曰、有德者必有言、先生而始可言之、銜學之徒不能也、在昔南宋之亡、有文信國、其忠義之氣、迨今照汗青、與先生甚相似也、然而信國死而宋祚不存、先生歿而皇威維揚、然則信國仁人之不幸者、而先生仁人之有幸者歟、雖然天於志士仁人、固不可有偏私、其意深遠雖有不易臆測者、抑亦不爲無故也、顧信國與先生其所戴者、德有厚薄以取之也、而先生育英之業亦爲無所關乎、仲淹溝道河汾、王魏房杜由以成材、先生說義村塾、至誠薰化、英才輩出、先生之一正氣磅礴而寓數多雋傑之心胸、一先生斃、而百先生繼興、於是其力之大、可謂有不可測者矣、夫王政維新之成、吾長防不落於天下之後、然而二州正氣之源、謂之發於村塾、孰言之誣哉、先生七生之說果不爽也、先生三十而殉國、纔達人生之半也已、而其所成就如斯、先生之大可以見、先生嘗戒其徒曰、少年之死可惜、則耄耋之死亦當惜、如是則何時能得效死以報國、是以門下亦皆於死生有所明焉、能翼贊維新之皇猷非偶然也、如先生忠誠之氣即信國所謂凜冽萬古存者、而足使天下後世聞其風者仰望而感奮、景慕而興起、嗚呼先生豈其死哉、先生豈其亡哉、



THE TRUE YAMATO BUSHI.

KUROKI UWEMURA. 5TH YEAR.

Japan is blessed with many noble warriors from ancient times.

Lieutenant-Colonel Yamataka, the Military Engineer to His Majesty the Emperor, surely was one of them.

He was named Jirō and was born in a small village in Nagato Province—my native place called Saami-mura.

His father was an itinerant dealer of whale and was such a great wine bibber as to be more of a toper than even *Hankai*, a Chinese hero of old, so that of course he was very poor.

His mother, holding him in her arms, experienced all kinds of hardship of life; the family were so poor that they could not afford to welcome their visitors, when they called on them once in a while.

When he was seventeen or eighteen years of age, he was employed as a servant in the village office and studied under great difficulties.

In the 24th year of Meiji, he entered *Kyōdōdan* and after graduating from there; he became a sergeant and in the 26th year having completed the course of the Military Academy, he rose to the rank of sub-lieutenant. After that he took part in the China-Japan War, the troubles in North China, and the Russo-Japanese War and distinguished himself on every occasion.

After the latest war he was decorated with the Third Class of the Golden Kite, and was promoted to Lieutenant Colonel; at last he had the honour to be received in audience by His Majesty the Emperor, but to our great regret suffering from

brain disease, he soon died.

* * * * *

A story about his courage which was once told by one of his subordinates runs as follows:—

“Our commander even under a galling fire was as collected as usual, and especially on the occasion of ‘charge’ he appeared at the head of his troop, as if a demon was raging; he had a peculiar ability of being honoured and beloved by his subordinates.”

I must add one more story. In his early days he was neither an infant genius nor a clever child; and then the so-called genius in my village who used to call this poor and ungainly boy “Jirō”! “Jirō” is now only a teacher of the primary school or a village official.

I have not room enough here to enumerate anecdotes about him during the period of his hard studies, although they are all full of interest and instruction for young people.

BUSHIDO.

By M. TANAKA. 5TH YEAR.

Many years ago there lived at Kumamoto, a samurai named Heinaï Murakami who was one of the best pupils of Motomenosuke Terao, a pupil of Musashi Miyamoto. Heinaï was well known among people for his being a capital hand of the Nitōryū—a school of fencing, of which Musashi was the originator. He had only one son, whom he would not let study fencing until the child grew up to be fifteen years old, and would not even allow him to touch a bamboo sword. Nothing could make the boy more sorrowful than this though he was so young. So, he asked his father one day to teach him fencing, but his father would not consent. At last, however, by his earnest and repeated entreaties, his father was moved and said, “If you undertake to go alone up the source of the River Kikuchi this night, I will grant your request from to-morrow.”

Now, the source of the river, being about twenty miles from Kumamoto, was a very lonely and dreadful place, and even in the day-time it was almost as dark as in the night time so that few persons passed along that way.

The father's proposal was really an unfeasible one for a lad of fifteen to undertake. But though he hesitated for a moment yet he determined to go, for if he should succeed in this, he would be able to obtain his wish. He was in high spirits.

Dressing himself hardly was he to go out with "Good-bye," wearing two swords, short and long, when his father who saw this suddenly snapped out, saying, "You foul-craven! Why do you wear the swords? You should go carrying no weapon."

Having no alternative he went out unarmed as he was desired, and returned home at about noon the following day, and stated in detail what he had seen at the source of the river, and it was all right.

and become one of the most powerful countries in the world. Therefore it is necessary not only for soldiers to cultivate this spirit, but also for all of us. If we all keep strictly to the principles of Bushido, we shall always be happy and peaceful and also successful in whatever business we do; and thus our country will make more and more progress.

What a blessing it is to have such a noble spirit as that of Bushido! We who were born as Japanese should do our best to be inspired by the spirit of Bushido still more. That is our duty.

THE SENSE OF SHAME.

K. TODA. 5TH YEAR.

Once Iemitsu, the 3rd Shogun of the Tokugawa Family noted for his uprightness, intelligence and martial spirits, said to a certain person, "If any other family should arise and overthrow my own, it

His father asked him, "What determination did you have when you started?" He replied, "I went out ready to lay down my life, if anything wrong happened. Heinaï who heard this, was very much pleased and allowed him to study fencing immediately.

This is a fine story about Bushido. If Heinaï had wished to make his son a good hand in the art, he would have taught him it from his earliest year. That's just like Heinaï, who had studied the art to the bottom. The boy was truly the son of Heinaï. His dauntless words that he replied to his father cannot easily be said, he had truly known the essence of fencing.

The chief object of the military arts is for the most part to drill the courage and not merely to become skillful in art. From this spirit Bushido springs. It is the soul of our country and the blood of our nation. It has made our country what it is, and has sent us victory after victory in any war

would be of course a great disgrace for me, but not for the Empire of Japan. If we should, however, let any foreign country pollute one inch of our territory, there is nothing more humiliating than this for our nation. In other words it would be most unfaithful to our Sovereign and most unfilial to our ancestors." We should not neglect to cultivate the sense of shame.

We, who are born in Japan, a sea-girt country, must always bear in mind that we are all the crew, as it were, of a great warship called Japan, and should guard it by might and main. If we should quarrel among ourselves and be laughed at by foreigners, it would be a great shame.

Join forces, study hard and be faithful to our noble and righteous Sovereign, the Emperor. Know what it is to be shameless! And shun it! Hate shame as we do a snake. He himself lost to shame is a man that dares to put his own parents to shame. To tell the truth he is a unfaithful son and indeed

it is not too much to call him a criminal. We should not only understand that our country is one of the most powerful states in the world, but is holy and sacred nation and that any reproach has never been brought upon her history.

Can it be possible for us to find such a state as Japan in the world? Just cast a glance at a few pages of our glorious history. The Empress Jingū, though of the softer sex, conquered Corea, and made the rulers promise to pay tribute of treasures and many other fine things to our country every year, even if the water of the Oryokko would flow back, or heaven and earth should be turned upside down. Even Jean d'Ark in France or Maria Theresa in Austria can not be said to be equal to our Imperial Heroine. How delightful it is to think of that the daring Tokimune defeated the Chinese fleet of one million in force to be buried in the waterly grave of the Genkai-sea and that Hideyoshi conquered all over Corea and then threatened the Empire of China

and that Nagamasa Yamada did much to the King of Siam and finally succeeded the throne and that Hamada Yabei showed the foreigners what is called the Japanese-spirit, grieving that his fellow-countrymen were subjected to the slights and insults of them.

It is such men that have made our country strong and powerful as it is. Like their offspring it is our duty be careful not to bring disgrace on our nation, but to bring our country foremost among the nations of the globe.

It is one of the most important duties for all us Japanese.

THE WRESTLING.

M. MORAL 5TH YEAR.

The wrestling is one of the most interesting games in Japan, and in its popularity and exciting nature, it can be compared with the Rugby games in America.

As to its real origin, we are entirely ignorant, but according to tradition, it is due to the event that some two thousand years ago; Nomino Sukune wrestled with Taemano Kehaya, an arrogant and pretended champion wrestler in those days.

The wrestlers are followed to the traditional rules and formalities. Their locks are kept long and dressed in the style of old fashion. When they appear on the arena, they are all naked except their loins. The super abundant muscle full of strength and vigor, inbrates when they tread on the ground. The children of abnormal size are picked out from all parts of the land and are trained as the wrestlers. This is the reason that foreigners often take them for a different race from ours.

The arena upon which the wrestlers contest, is a small elevated place, about nine feet in diameter, and two feet in height. It is made of sand encircled by straw bales and protected from the shining sun by a curtain which is held up four large posts.

The wrestlers are divided into two parties, that is, the East side and the West side. From each side one wrestler appears at a time, and they meet at the center of the ring, and greet each other except on politeness.

Then, as football players line up, facing each other, watching each other, await the signal of the umpire.

With the signal of the umpire, they spring up and tackled one another, with all their strength and power, however, not so roughly as in the Rugby game but according to the strict rules of the sport.

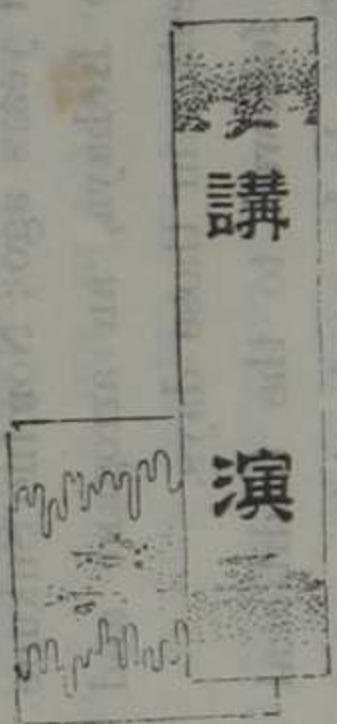
In wrestling there are forty eight different ways of throwing the antagonist down or pushing him out of the ring, that is, "twelve throws," "twelve lifts," "twelve twist," and "twelve throws over the back." The one who is compelled first to touch the ground with any part of his body, or to step out of the ring, is conquered.

During the contest the umpire in standing upon

the arena, with a fan peculiar to the game watches them eagerly, encouraging them with the loud and constant utterance "Hakki-yoi-yoiya, trata trata."

When the contest is decided, the umpire holds up his fan towards the side to which the winner belongs. If the victor is popular among people, the spectators are excited so violently that they arising from their seats, pronouncing his name loudly hail upon him hats, tabaco-pouches, etc. Whatever they have around them and thus expressing their enthusiasms, congratulates him in the fullest measure.

The finest and most popular wrestling matches



松陰先生事蹟

used to be held twice annually, that is, in January and May, at the Ekoin in Tokyo, till last year June when the Josetsukwan, a large building in which the wrestlers contest, was completed. Hitachiyama, Umegatani, Tsuchiyama and Komagadake are the most famous wrestlers at the present day among which Hitachiyama is especially well-known even to America for his enormous size and monstrous strength. The so-called "Judo" is quite another line of art and is considered to be more scientific. But the "Judo" is strictly prohibited to be used in the wrestlers' contest.

特別會員 安藤 紀

諸君も御承知の通り、松陰先生の事蹟に付ては、餘程云ふべき事が多いので、一朝一夕に盡すことは出来ぬから、今は其大略を御話する。先生の誕生せられたのは天保元年八月四日で、安政六年十月二十七日に、刑を受けて死なれたのであります。先生の生涯三十年間は、恰三等分せられた感がある。即十歳迄が家庭教育の時代で、十一歳から二十歳迄十年間が先生の社會教育時代であつて、此間はいつても長藩の中のみ居られた。終の十年間即三十歳迄が先生の天下に活動せられた時であります。さて、今から、先生の家庭教育について少し話ませう。先生の生れられたのは、東光寺の墓地から東南に當つて、團子岩といふ處がある。其處には、今も、椎の木の大さなのがあるが、其處が先生の生れられた處である。今の松陰神社から六七町もあらう。是は杉恬齋先生の家で、先生は恬齋の次男であつた。長男は梅太郎と云ふて、即今の杉民治翁であります。杉の家は至つて質素で、傍に、農業をも勤め、節儉力行、産を治める風であつた。是が杉家の富を作られた基であつたと思はれる。先生はかゝる家庭に成長せられたので、學問するにも座敷ばかりですと言ふ様な事はなく、本を読むにも、講釋を聞くにも、おとうさんが畑や山に出られるのについて行つて、仕事を手傳ひながら、講釋を聞いたり、休む間に、本を読んだりせられ、おとうさんも、餘程深切に手を入れて教育せられたのであります。おとうさんは、常々、日本國體の事を書いた本を暗誦したり、文政十年、將軍を太政大臣にするとの詔の下つた事などを云ふて聞かせて、將軍の盛なのにひきかへ、皇室のいたく衰微した事を慨かれた。先生の幼年時代の家庭教育は、かういふ風でありました。恬齋先生には、弟が二人あつて、吉田大助、玉木文之進と言ひました。吉田大助は、藩の兵學を掌つて居られたが、早く死なれたので、先生は、六歳で、吉田家を繼かれる事となつて、名を大次郎と改められました。大助先生は、中々氣魄ある

入て、王室を尊び、實用の學を勤むることに注意して居られた。吉田家は、山鹿流の兵法を傳へた家であるが、其系統を尋ねると、山鹿素行の子藤助高基の門人に、吉田友之丞といふ人があつた。是が吉田家の祖先で、毛利家の兵法を指南役の家柄となつたのである。松陰先生は、年が幼いが、吉田家を繼がれたからには、藩の兵學先生である故、家の學問をせねばならぬ。そこで、吉田家の免許を受けた弟子たちが、其後見をして居たのである十一歳の時、始めて、毛利敬親卿の前（對面の間）で、武教全書の講釋をせられた。先生の叔父さんであつた玉本文之進といふ先生も、中々えらい人であつて、松陰先生の教育には、非常に力を盡された。玉木の家も松本に在つたので、先生は毎日通ふて、教育を受けられた。此玉木先生も、吉田の兵學を傳へられた人で、先生の此時の進講の案も、此先生の手に成つたといふ事でもあります。君公は、其時二十二歳でありましたが、十一歳の兵學の先生から、講釋を聞かれた其場の模様が、今も、目の前に見る様に思ひやられる。是からは、毎年、兵學の進講をせられたのであります。其頃は、明倫館が、この堀内村に在つたが、先生は、九歳の時から、兵學の先生として出勤せられた。尤も、是には、後見があつて、其の補佐で、武教全書を講釋せられたのである。かくしながら、他の學問は、自分も諸生として勉強せられた。十一二歳の頃から、本當の先生として、獨立てやられた。十五歳の時、山田宇右衛門に就いて、教育を受けられた。此人が、其頃、江戸の御番手がすんで、萩へ歸つての話が、非常に、先生を激動せしめた。其話といふのは「江戸では、人間が時勢に注意して居る。外國人も來るかも知れぬ。學問をするには、實用を主とせねばならぬ。今までの様なことではつまらん。中々眠つては居られぬ。江戸に海國圖誌といふ世界の地圖があるから、取寄せて見たらよからう。」というやうな事や、又「山鹿流の兵法ばかりではつまらん。今の世は、何て

も通じて居らねばならぬ。」と云ふやうな事があつた。それで、翌年即十六歳からは、先生は、山田亦助について、長沼流の兵法を學び、又西洋の兵學をも研究せられた。右の山田宇右衛門と云ふ人は、先生を大成するに、非常に功があつた様ですが、先生ももとより天才があつたので、一を聞いて、十を知るといふ工合に、非常に學問が進んだのであります。先生十八歳の頃から、明倫館擴張の計畫が、藩に於て着手せられたから、明倫館の諸先生家に、其意見の御下問があつた。先生は、文武奨勵法について上書せられたが、其大意は、賞罰を嚴にすべしと云ふ事であつたが、是は餘程時弊に適中して居た事の様に思はれます。其から、二十歳の頃には、門人も多くなり、時勢も進んで來、幕府からは、外國に對し、海岸の防衛を嚴にせよとの命令を下したので、兵學者の責任は、愈重大を加へた。先生は、大津から馬關の海岸を巡見し、兵學を實地に研究し、學則を實地に應用せられた。是は二十歳の時で、其時、馬關で、硯を買はれたのが、今の松陰神社の御神體の一であります。其頃、明倫館には、文武に達した人が多かつた。文學の方では、山縣大華などが居り、武術の方にも、弓馬劍鎗其々専門の先生があつて、其名札が掛け並べてあつたが、先生は、其中で、一番年が若かつたので、異様に見え、「若先生」の評判が高くなりました。是が二十歳迄の經歷の大略であります。

二十一歳で、九州に遊ばれたが、是歳にも進講をせられて、其講義が、最君公を感動した。其題目は、武教全書守城篇の「籠城の大將心定め事」と云ふ箇條で、大將が籠城すれば、死を決して守れ。切腹して死ぬるまで守れ。決して、城を捨て、走る様な事があつてはならぬ。切腹して死ぬることが出來ねば、初から敵に降れ。外國に對しても、攻めて來たらば、之を追返し、一尺一寸の地をも取られてはならぬ。防ぎ切れぬ

ば、皆死ぬる覺悟でなければならぬ。」といふ様な事であつたので、君公は殊の外感心せられ、「普通の儒者と違ひ、流石に兵學者だけあつて、説が活々して居る。」といはれ、兵學諸流の中でも、吉田家のが一番優つて居ると云ふので、其からは、君公は、吉田家の門人の格になられた。是が松陰先生の出身上の注意點であります。さて、九州行は、先生が諸國遊歴の始である。其頃は、無暗に、他藩へは行かれぬ。今日外國へ行くよりも六ヶ敷かつた。其でも、先生の研究心は、中々屈せぬ。即人傑を訪ねて、其説を叩き、互に、意見を戦はして、長を採り短を補はれた。武者修行といふ事は、其頃も随分あつたが、先生の様に、天下の大勢を知らうとする様な人は少かつた。肥前平戸の葉山鎧軒は博學多識で、海邊の防禦など實用の學を説くと聞かれ、其人物を景慕するの餘に、人に頼んで、豫め紹介して置いて面會せられたが、平戸は、士でも、平民でも、風俗教育が面白いと思はれた。鎧軒はもう七十位の老人であるけれども、城へは馬に騎りて出て、上流の人でありながら、下々の士の如くして、少しも安逸に耽らず、身を勞して、十分に運動し舟をも操り、馬にも乗り、事あれば一軍でさる様にして居られた。先生は之が非常に氣に入つた。海邊にある人はかゝる事が必要である。我藩も海に接して居て、境遇が似て居るから、平戸の士風が好模範であると、後々も、此事に就いては、常に人に話して居られた。平戸には、又山鹿の家柄なる山鹿萬助と云ふ人が居たので、之をも訪ねて説を聞かれ、それより、熊本に入り、宮部鼎藏といふ人を訪はれた、其人は氣の利いた人で、之と交れば、事を成す助ともなると思はれ、以後は、交情深厚であつた。かくて、先生は藩に歸られてから、西游日記といふを書かれた。是が先生の著述の始である。二十二歳の時、忠正公に従うて、江戸に行かれた。是が先生江戸行きの始である。先生の目的は、學術研究に在つたので、佐久間象山、山鹿素水など云ふ人を訪

ね、入門して其説を叩かれ、又相模上總等の海岸を巡りて、海岸の防備を講究し、又東北地方を巡視し、露國との關係を調べ見んと、宮部鼎藏と約束せられた。然るに、是時、君公は已に御歸藩の後であつたから、先生は、江戸詰の役人に頼んで、許可を得んとせられたが、萩へ願出で、御許を受けよとの事であつた。先生の方では、左様すれば期日が後れる、それでは他藩の人との約束を破ることになり、長州人は信義を重ぜずといはれんも口惜しと、遂に許可を待たざることに決心せられ、十二月十五日、赤穂義士復讐の日を選び、後事を來原良藏といふ人に托して出立せられ、先、第一に、水戸藩に行かれた。そこで、種々の學者に接し、風俗を觀察せられた事は、後日先生の勤王主義を鼓舞した事少くなかつた事と思ふ。それから、會津を経、新潟に到り、佐渡の金坑を一覽し、羽後を通過し、青森の方に行き、陸中陸前を回り、仙臺へも立寄られた。再び會津水戸を経て、江戸に歸られたのが翌年の四月でありました。此旅行は、丁度寒中に當つたので、非常に難澁せられました。安藝五藏といふ人も一所であつたが、此人は、一所に在つたり、離れたりしたから、つまり、二人で雪中を辿られたのである。其間、先生の注意して研究せられたのは、古戰場、人情風俗、農商業の有様、諸藩の學校の制度などであつた。特に、佐渡では、順徳上皇の御陵に謁し、涙を揮ひて吊ひ奉られた事は、東北游日記の中に記されてある。此旅行は自己の勝手にしたので、覺悟の上、罪を待ち、謹慎して、萩に歸られた。同年十二月、藩より責あり、先生は、士籍を削られて浪人となり、知行を沒せられ、親戚の家に幽居を命ぜられた。先生は勿論死を覺悟して居られた位であるから、謹んで其罪に伏せられた。其時、名を寅次郎と改められた。先生は幼名を虎之助と云ひしが、吉田家相續の折、大次郎と改め、此で、又寅次郎と改めたのであります。二十四歳の時、忠正公の内意により、十年間の遊歴を願出よとの事で、先

生は、其通にせられ、直ぐ許されて、再び江戸に遊ばれた。嘉永六年正月に出立し、宮島に立寄り、四國に渡り、崇徳院の御陵を拜し、大阪に出て、大和を過りて、谷三山や森田節齋などを訪ひ、河内に行き、千早城址に登りて、古を忍び、伊勢大神に参拜し、道を東山道に取りて、江戸に出てられた。出立より着まで、四ヶ月を途中に費して、各地を視察せられたのである。江戸では、鳥山新三郎の家に泊つて居られた。間もなく、米船が、浦賀に來たとの報知があつたので、讀みかけた本を投じて、浦賀に到られた。浦賀で實地觀察の上歸つて、意見書を君公に上られた。其大意は、「今、外國人は、通商を乞ひに來た。若しも、事がよく運ばねば、如何なる事を仕出さんも測られず。て、幕府は、來年來いといふて歸した。若し來年來て、事が巧く行かぬ時は、唯は已むまい。日本國民は、一致、事に當る覺悟がなければならぬ。故に、廣く、他藩と交通し、特に、熊本藩と親交し、又役人等も、廣く、天下の士と交りて、天下の事情を知らねばならぬ。外國に對するには、外國の事情を知ることが肝要である。」といふのであつた。佐久間象山も、「人は、過があつても之を償ふだけの功を建てればよし。足下も、先般脱藩の過失を償ふ爲に、大功を建てよ」と忠告せられた。そこで、先生は、愈々、一度、海外に航して、其事情を探らうとの思を起された。其時、長崎に、露西亞の船が來たので、先生は、すぐ、長崎に向はれた。象山先生が、之子有靈骨の詩を作つて送られたのは是時である。其途中に、京都に立寄りて、禁闕を拜し、有名な山河襟帯自然城云々の詩を作られた。さて、九州に着いて見ると、露船はもう出た。そこで、九州を遊歴し、熊本の人にて有名なる横井小楠に面會し、色々意見を叩かれた。其時、先生は二十四歳、小楠は四十五歳であつた。それより、宮部と共に、萩に歸り、再び上京せられた。其途中、小楠に、書を與へて、「方今、天下の人心一致せず、吾藩も亦此弊あり。願くは、

天下の事情を説きて、一致の必要なるを知らせて下さい。又長州の士、多く江戸に在る故、君も、江戸に出て、彼等を教へて下さい」との意を述べられた。先生は、天下の人心の一致、特に藩論の一致といふことに、非常に、心を勞して居られた。二十五歳の時には、江戸に居られたが、正月早々、亞米利加船が浦賀に來て、去年の回答を求めた。先生は、今度こそは、此船に乗りて、外國に行かうと決心せられ、金子重之助といふ人と、窃に計畫を回らされた。金子といふ人は、澁木村の生れて、澁木松太郎といふた事もあつた。身はもととり賤いものであつた。此時は、江戸に出て居つた。年は二十四で、學問といふ程の事はなかつたらしいが、先生の門生の様になつて居り、先生も親切に教導せられた人である。さて、二人で決心はせられたが、人に漏らすべき事でないから、兄の杉梅太郎氏や鎌倉の叔父竹隱にも、餘所ながら暇乞をして出立つた。其時、會心の友達等と別宴を開いたが、中には、驚いて止めるものもあつた。宮部鼎藏などは大賛成の方であつた。三月五日に、江戸を出て、下田に趣かれたが、好機會を得る事が中々容易でない、時には、夜、濱邊をうろつく中に、犬に吠へられて非常に困つて、「此では、盗人も容易には出來ぬのう。」などと、戯話せられた事もあつた。こんな有様で、二十五六日も立つた。此時の様子は、下田の宿屋の主人某の子岡崎宗吉が、人に話したことが、徳富猪一郎のかゝれた松陰傳に載つて居るから、一寸要點を摘んで見ませう。「自分が家は岡方屋と申候。安政元年の春暮れなんとする頃、二人の武士入來り候。下田見物の爲罷越したと申候。ある日、外より歸りがけに、瘡形の方の小男、自分の父に、餘り景色が面白さに、城山に登りたりと申候。右の瘡形の小男と申すは、滿面、薄き痘痕ばら／＼と點じ、目は細く光りて、眈はさり／＼と上に釣り、鼻梁隆起して、何となく凸様顔面をなし候、兩頬は下殺し、頤に、ちり／＼したる薄き蒼髯亂れ生じ、髪は大

東の野郎に結び申候。序ながら、その來泊したる當時の風俗を申せば、木綿藍縞の袴に小倉帯を締め、無地木綿のぶつ割羽織を着し、鼠小紋の半股引に脚絆を當て、前後小さ小包物を負ひ居候。」とあります。是が、後に、先生等二人であつた事がわかつた。外國船に乗る陳情書は漢文で書かれた。其は、日本語でいふよりは、軍艦の中には支那人も雇はれて居るから、漢文の方が善からうといふ考からであります。其文中には、先生を爪中萬二、金子を市木公太としてある。是はもし事が敗れた時に、本名が表はれては面倒だとの考からであつた。東北遊の時には、松野他三郎と云はれた、是が二度目の變名である。爪中萬二は、爪の中に己を書いた先生の紋に因んだもの、市木は、金子の生地が澁木であり、澁木は柿であるといふより、柿の俗字柿を分ちて市木とし、松太郎といふ名を匿して公太としたのである。投艦の時の模様は、「二十七日の記」といふのがあつて、之に詳に書いてあるから、一寸、其要を摘んで讀みます。「三月二十七日夕方、(安政元年) 柿崎を巡見するに、辨天社の下に舟二隻浮べり。是究竟なりと大に喜び、夜五つ過ぎ辨天社下に到る。汐退きて、漁舟二隻とも砂上にあり。故に辨天社中に入り安寝す。八つ時社を出て、舟の所へ往く。汐満ちて舟は浮べり。因て押出さんとて舟に上る。然るに櫓杭なし。因て櫓を頓鼻禪にて縛り付け押出す。禪絶ゆ。帯を解きて、櫓を縛り、又押行く。岸を離るゝこと一町許、ミシ、ツビ艦に押付く。是迄舟幾度か廻りくゝて行く、腕脱せんと欲す。又一町にしてポーハタン船の外面に押付く。櫓自由ならず、船の梯子段の下に我舟入り、浪に因て浮沈す。浮ぶ毎に、梯子段に激すること甚し。夷人驚怒り、木棒を携へ我舟を衝出す。衝出されてはたまらずと、梯子段へ飛渡り、澁生に、櫓をとれと云ふ。夷人又我舟をつき退けむとす、澁生たまりかね、櫓を捨て、飛び渡る。夷人遂に我舟をつきのく。乗移る際少し狼狽す、故に舟を失ふ。其事の破れの本を尋

ぬれば、櫓杭なき計にしてかくなり行けり云々。」米艦長も、其志を賞めたが、彼地へつれて歸ることは出来ぬ。すぐ歸れと云ふ。歸るには舟はなし、事の由を告げて、ボートを出してもらひ、尙事の發覺を恐れて、流された小舟を捜し、其中の荷物をとることになつて、ボートは卸された。然るに、其水夫等は、直ちに柿崎に漕付けてしまつた。そこで、其流れた舟は、翌朝、濱に打上げられ、荷物は、漁夫が拾うて、土地の役所に届出た。其爲、事が發覺して、先生等は、取敢ず下田の牢へ入れられました。先生は、此牢にある間にも、本を讀み、忠臣孝子の話などを、牢番等にして聞かせられた。役人ども餘程感心したといふ事であります。やがて江戸に送られたが、其途に、泉岳寺の前を通つて、義士の身上に引きくらべて、述懐の歌一首を詠まれた。それが有名な、

かくすればかくなるものと知りながらやむにやまれぬ大和魂

といふのである。かくて、先生は、江戸の獄に入り、同年十月に、萩に護送せられ、野山の獄に入れられ、佐久間象山も、行李の中から發見せられた送別の詩の爲に、共謀者と認められ、幽囚の身とられました。野山の獄といふは常念寺の近處であつて、元、野山某の宅の跡であるから呼ばれた名である。先生は、獄中に在り、謹慎を表し、書を読み文を作り、熱心に學問を研究せられた。父恬齋先生も、我が子は、國の爲に盡さんとして、法に觸れたので、普通の罪人とは違ふといふので、深く尤むることもなく、常に、筆墨書籍等を送つて慰められ、又兄梅太郎氏も折々見舞はれて、深切に慰諭せられた。尤も、先生兄弟は、小さい罪から餘程仲が善く、一つ膳でなければ飯も食はぬと云ふ程であつた。書翰の往復は勝手に出來よつたから、互に意見を交換せられた事は常であつた。又一妹へも、度々獄中より教訓の言を送られました。諸君の讀ま

る、漢文教科書の中に在る士則七則と云ふのは、其頃、玉木氏の子息が元服せられたときに作つて送られたものである。又二十一回猛士の説を作られた。猛士とは、自分の名が寅であるから。虎の猛を學ばねばならぬとの意で付けられ、二十一回とは、杉といふ字は木偏の十八と傍の三畫とから出来て居つて合すれば二十一となり、又吉田といふ字は吉の上が十一で田の中が十である、之を合すれば二十一となり、吉字の下の口を田字の周圍の中に置けば回字となるといふのである。それで自分は二十一回の猛氣を振はねばならぬ。是迄三回だけは振つた。其一是君公に建白した事、其二是東北遊、其三是下田事件であつたが、猶振はざるもの十八回あり。大に振起せねばならぬといふのが其主意であつた。此等の話は、今の薄志弱行なる若き人々には良き興奮劑であると思ふ。先生は獄中に居られても、殆ど自由の身の如く、種々の恩典が得られたので、時には、役人等までが、弟子となつて、講義を聴いた事などあつた。金子といふ人も獄中に在つたが、江戸より戻還の途中、今ていへば赤痢の様な病氣が付き、其がなほらんで、遂に死なれた、悲むべき事である。周防國遠崎妙圓寺の住職月性法師は慷慨家で、勤王の志厚く、夙に討幕論を唱へたが、先生は書翰を往復して、之を駁せられたこともありす。二十六歳の十二月（安政二年）に、出獄を許され、杉氏に幽閉せらるゝ事となつた。先生の名聲益々揚つて來たので、其説を聞かんことを願ふもの次第に多くなつたけれども、親戚の外は出入することが出来なかつたから、唯手紙の取遣だけをせられた。二十七歳の七月（安政三年）に、山鹿流の兵學を教授したいと云ふ事を願ひて、許されたので、公然生徒が集る様になつた。其重なるものは高杉晋作久坂玄瑞吉田榮太郎等で、先生は、杉家の座敷で、四五人宛教授して居られた。佐久間象山といふ先生は、極めて厳しい人で、先生の初めて行かれた時には、「足下の詩文を學びに來たか、經書を學びに

來たか、苟も、經書を學ばんとならば、子弟の禮を執れ。」といはれた。そこで、先生は社袴を着けて行つて、弟子入をせられたといふ事であるが、先生は之と變り、弟子になりたいといふ人があれば、「教へるといふやうな事は出来ぬが、まあお互に研究しよう。」と云ふ様な風で、世人も、あの様な人の言論を聞けば、爲になることもあらう。せめては、顔だけでも見て來うと云ふ位であつたが、中には、行つては見たいが、先生は禁錮の身であるので、自分までも、嫌疑を受くる様の事が有りはすまいか。」との懸念から行き得なかつたものもあつた。しかし有志の士は大抵面會入門した。先生は、兵學を教ふる旁、歴史地理算術等にも注意せむことを勧め、珠算の乗除九々なども、表に作つて示したりせられて、他の先生とは、教法が大に違つて居た。又常に、生徒に向つて、日蓮上人や弘法大師などの苦心談を述べられて、「大業をなさんとする者は、常に、身を辛苦艱難に處すべきである。」と説かれた。「すべて、先生の教授は、誠心誠意が見えて、遂に一度も生徒を叱つた事などはなかつた。」とは、品川子爵の話である。一寸想像すると、先生は餘程過激であつたらうと思はれるが、實はさうでない。門生と火鉢を圍んで問答をしたり、疑問の解決を與へたりして、夜が更ければ、之をとめて、夜もすがら語明した事もあるさうだ。又、先生は、晝は、杉家の畑へ出て、草もとり、又、米もつき、生徒等も、之を助けつゝ、學問を習つて居た。左傳八家文の様なもの、ダイガラの上で講釋するのが常で、草をとつゝ、古今の歴史を談ぜらるゝこともあつた。段々弟子が増して來て、杉の座敷が狭いから、隣の佐々木家の解殘しの八疊の家を取り入れた。是が松下村塾である。松下村塾といふ名は、元玉木先生が其塾に付けられた名で、玉木先生が役目に就かれて後、先生の外叔久保先生が其名を用ゐて、手習場を開かれ、今、又、先生が其名を用ゐられたのです。九月（安政三年）に、松下村塾の記が出来た。

其には、久保先生が主任の様に書いてあるが、實は先生が其頃主任であつた。翌年（安政四年）又家が狭くなつたので、十疊半の建増をせられた。之は、先生と諸生との協同努力で出来たと云ひます。其時、品川子爵は壁を塗り、先生は、下から土をあげる、品川さんが受けそこねて、先生の顔へべたりと落ちたと云ふ様な話がある。其頃、明倫館の生徒等も、時節の進歩につれ、讀書の側に、時事問題をも論じ、或時「今の諸侯は朝廷の臣かはた幕府の臣か」といふ題で、討論があつたが、結局がつかなくつたといふ話を、中谷正亮と云ふ人が來て話した。然るに、先生は、諸侯が朝廷の臣たるは知れたこと、なぜ、其折論が極らなかつたかと訝られ、其頃書かれた講孟簡記と云ふ本の中に、其等の意見をも小少書いて、當時の大先生家の中にも、毛利家は幕臣で王臣にあらずといふ様な者の有つたのを駁せられた。是等でも、教育の仕方が、松下村塾と明倫館とは大に違つて居つた事がわかる。先生は、誰でも、其行の善き者は引入れて勞り慰められた。川尻村の宮番の妻登波といふ女が仇討をしたので、其頃、世間に評判が高かつた。其が、夫の墓参りに石州へ行く途中、松本を通つた時、先生は松下村塾に引きとめ、よく待遇し、一夜泊めて、種々の話を聞かれた。宮番といへば、殆ど人の齒せざる卑賤の者であつたのを、先生の如き士分の人が、かく優遇せらるゝなどは、當時に在りては、實に破格の極で、是でも先生の心事の一斑を察する事が出来る。安政五年、先生二十九歳の頃も、矢張松下村塾で、門人を教へて居られた。さて、吾藩では、忠正公が明君であり、當職即ち一藩の總裁とも云ふべき職に益田彈正が居られた。此人は、福原國司と併せて三大夫と呼ばれた一人で、京都變動の後に死なれた。先生よりは四歳程年下で、始めは、門人でありました。其時、先生門下の兵學生をつれて、羽賀臺に行き、自ら大將となつて、演習をやつたこともある。それで先生に取つては、萬事都合がよかつた、

又、其下に、周布政之助、前田孫右衛門などいふ人があつて、弊政を改革することに務めた。此人々は、元、先生と交際が有つたので、多少、時勢の問題に付ては、意見の合はぬ所もあつたらうけれども、先生の言論は、よく君公に達しました。其頃、丁度、外國の船が來て、切りに幕府に開港を迫る。幕府は困つて、其可否を朝廷へ伺ふ。朝廷よりは、幕府に於て、諸大名の意見を聞いて答をせよとの勅命があつた。それで、幕府から、毛利家へも意見を奉れとの命令があつたので、松陰先生も意見書を毛利家へ出されました。同じ尊皇攘夷を稱へた者でも、其考は色々であつたが、先生の考は、積極的に、彼國に押掛けて行つて貿易をすべきである。日本人が、海事になれる様にし、利益を彼等に専占せられぬ様にせねばならぬといふので、普通の攘夷論者とは餘程違つて居つた。幕府と外國との事も愈々進んで來て、遂に假條約を結んだ。攘夷論者は、甚だ不平で有つた。先生も幕府とは考が違つて居たから、「吾々が幕府を諫めて、幕府が之を聽かねば、朝廷に願つて、一致して自由行動を取らう。」と決心せられた。其頃、京都に、三位大原重徳卿といふ慷慨家があつたが、先生は、朝廷との聯絡を保つは、此人に依るを良策となすとの考を懷かれた所へ、中谷久坂の二人が三位に謁した時、三位が、「諸藩中に於て助になる大名があれば、其人物と一所に事をしよう。」と話されたといふので、二人は、早速、先生に報じた。先生は大喜びで、時世論と云ふを書いて送つて、三位を招き、提挈して王事に勤めんとせられたのを、周布政之助が聞込み、「勤王の事については毛利公の處置に任せて置き、君達はまあ手を出すな。」といつて止めたので、三位招寄せの件は破れた。又、其頃、大老井伊直弼は、獨斷にて、假條約を結び盛に反對論者を奨励したので、幕府に反對の尾水越薩の四藩が相謀つて、大老を暗殺せんとするといふ事を、永井雅樂から間接に聞かれて、之は面白い事になつた。四藩に先を越されては面

目ないから、我長藩は、別に事をなさん。それには、彼の井伊大老と共謀の間部詮勝を斬つて仕舞ふと謀られ、門人十七人血判書を作り、益田の所へ届け、政府の許否に拘らず脱走せんと企てられた。實に、其頃、國家と苦樂を共にせうと云ふ人は先生一人で、他は、大抵、先生の説を聞いて奮起したのであつた。政府は之を聞いて、是一浪人の妄論に過ぎずとして斥けたが、先生の方では、政府の人たちは實に没分曉の俗物ばかりであると思はれた。兎に角、先生の計畫は敗れた。當時、先生の議論は是認せられても、それを實現せらるゝ事は實に稀であつた。それは、つまり、例の「今の諸侯は王臣にあらず」の論にまどへる所謂俗論黨の勢力が盛であつたからであります。前田孫右衛門は、政府にあつても、最も先生の論に服し、其人を慕ひ、其行を快しとして居つたが、周布政之助は、稍々先生と政見を異にし、君公の仰であると思ふので、「長藩は、別に幕府に願ひて、或事をなす故、汝は暫くひかへよ。」と言送つた。是は眞實ではあるまいと云ふ事は知れて居るやうでも、何ともしやうがなかつた。其後、周布は建議をして、「吉田松陰は學問が純粹でない、彼を野山の獄に下すがよい。」と云つた。玉木文之進は、大に先生の爲に辯じて、遂に、獄に下すことだけは止められた。玉木翁は、又、先生に、當分は謹慎する様にと忠告せられ、先生は、家に嚴囚となりて謹慎せられた。この様な點から考へると、先生は随分亂暴な事をする人の様であるが、決してさうでない。弟子等に對しても、深切に、亂暴を戒められた。或時、一門人が、江戸で、犬に吠えつかれ、刀を抜て切殺したと云ふ事を聞かれて、叱りはせぬが、大に氣を落されたと思ふ事あり。又、一人の生徒が、或送別會で、酒狂に乗じて、刀を抜き疊を切つたと聞きて、「正義に依りて、勇を振ひ、事ある時に當りては役に立つ様にせよ、匹夫の勇を慎め。」と言はれました。是でも、先生が亂暴を好む人でないことがわかる。十二月（安政五

年）に、政府は愈々先生を野山獄に下すことになつた。其命令書には、只「御聞込の筋有之候につき、従前の通借牢願出候様仰せ付られ候。」とかいふ文言であつた。先生も大に憤慨し、生徒等も非常に怒り藩吏の家に於て、罪名を聞質しなどしたが効はなかつた。只幾分か先生の心を喜ばしめたに止つた。同月二十六日に牢に行かれたが、其道にて、生徒の、先生と同謀の罪によつて謹慎に處せられた者を訪うて、之を慰めさせた。先生が三十歳（安政六年）の三月には、忠正公が參勤交代で江戸に行かれる事になつて居りました。先生は、「公を江戸に出せば、井伊大老は、公を説きて味方に入れんとするに違ない。之に従うときは、色々の注文をするのであらう、従はずば、妨害をするであらう。是は、君を道に待受けて、勤王に説付けるに越した事はあるまい。」と考へつかれて、此要駕の事を果すべき人物を求められた。入江杉藏は此舉を賛し、自ら行く考であつたが、老母があつて出ることが出来ぬ。それで、弟の野村和作（子爵野村靖）が行くことになつたが、途中で政府の手に捕へられ、萩の牢に入れられ、先生の要駕策も失敗に歸しました。木戸孝允の如きも、先生の過劇論が、累を藩政に及ぼさんことを恐れて、其氣を抑へる爲に、他人と手紙の取遣を止めることを、先生に勧められた。幕府では、其頃、反對黨を奨励する爲に、諸藩の志士を捕へて、盛に牢に入れた、所謂安政の獄である。梅田源次郎（雲濱）を捕へて、吉田寅次郎も其同謀者であるに違ひないといふので、江戸に送る様にと、藩に命令した。同年（安政六年）五月二十五日に、萩を出發せられたが、是が萩の見收めでありました。先生も略々之を覺られて、涙松の所で、萩を見返り、思ひ胸に迫つて、かへらじと思ひさだめし旅なればひとしほぬる、涙松かなの歌を詠せられた。先生は、江戸に行つたら、幕府に至誠を以て説き、忠告しやうと決心せられました。彼

の入江は、獄中より、死の一字を書きて送りました所、先生は、至誠を以て通ずべしとて、「至誠而不動者未之有」の古語を書き遣されました。しかし、先生も是が永訣になるかも知れぬと思はれて、色々詩や手紙などをのこされた。愈々江戸で「御きはめ」に遇はれ、梅田雲濱と如何なる関係があつたかと問はれたが、先生は、彼とは何の關係もなかつた事を述べ、至誠を以て幕府を警醒せんが爲に、間部要撃の企を述べられた。陳述途中で、幕府は此事件を知つて居なかつたのを氣づかれたが、今となつては致方なしと、遂に、皆云つて仕舞はれた。役人どもは大に驚き、「覺悟をせよ」といひ渡した、之が先生の罪案となりました。而も、先生の心事の正大なるは、此死生の際に處しても、猶、國家將來の事について、志士と文通をして居られました。其意見は、「日本國民の一致をはかるべし。其には、先、教育を盛にし、京都に大學を建て、貴賤の別なく、大に志士を修養すべし。」又、「天皇を中心とし、日本の學風を振起すべし」との事であつた。十月二十日に至りて、罪案の定りたるを知り、死を決せられました。それで、杉の父兄や母妹、玉木の叔父等に、別の手紙を送られた。其主意は、「平生の學問が淺薄で、至誠天地を動かすに至らず、今、死なねばならぬ事になつたのは、御心をいためる事でありませうが、去年、血盟の時書置きました書を御覽になれば、其時、既に死を決して居たのであるから、今更に御悲にも及びますまいから、何卒御力落しのない様に願ひます。今、幕府は、私の言ふことを採用はいたさねど、上には聖天子居まし、下には頼みになる人傑も多く居るから、國家の事については、御心配は御無用である。又、私死後には、二十年來用ゐた赤間關の硯と、去年の書置の漢文とを神躰として下さい。」といふ意で、其に、次の和歌一首を添へられた。

親思ふ心にまさる親心けふのおとづれなにとさくらむ

二十六日には、留魂録を書きて、去年以來の志を記し、其始に、

身はたとひむさしの野邊にくちぬともとゞめをかまし大和たましひ

の和歌を書きつけられました。此書はちやうど其日の夕方に出来上りました。二十七日、評定所にて、死罪の申渡を受けられた。始の罪案には流罪とあつたのを、井伊大老が死の字にかきかへたさうであります。宣告がすんで、先生は獄にかへり、辭世の詩歌を吟誦し、同獄人に訣を告げ、其日午前十時頃に、小塚原頭の露と消えはてられました。先生の遺骸は、木戸孝允伊藤博文飯田正伯尾寺新之允の諸氏が種々心配して、之を葬りました。忠正公も、訃を聞いて大に愁傷せられ、内々使を立て、其墓所に焼香せしめられたと申すこととであります。文久二年に、他の志士と共に追赦せられ、公然、若林村に改葬し、明治十五年に、松陰神社が出来、二十五年には、正四位の追贈がありました。是で先生の生涯の御話は大躰すみしました。先生の言行を考へて見ると、三大徳格があります。其一は、講學實用を主とす。二は、抱負を大にして氣を養ふ。三は、身命を賭して事に當るといふ事でありませう。先生の行は花々しい事ばかりで、而も、其が一度しくじれば命はないと云ふ様なことばかりで、常に眞劍勝負をやる氣で事をせられたのであります。苟も先生を知つて居るものは、右の三大徳格を認めるであります。殊に此徳格は、諸君が、將來事に當る上に於て、大に模範となるべき事でありませう。此場に在る人々が、此三大徳格を以て、將來世に立つたならば、國家の爲、幾千萬の兵、幾億萬の富よりもまさるべきは疑のない事であります。(Y、N、生外數名)

學生諸子に告ぐ

代議士 山根正次

諸子は將來國家有爲の人物とならんがため、學を修めつゝあるを以て、専心一意勉強せざる可からず。此の講堂に掛けらる額の中に、博學之の語があるが、是は、博く書物を讀めとの意なり。然るに、此の圖書館に於ける閱覽人數は一日平均四十人にて、内、先生二十、其の他を生徒とす。多數なる生徒と少數なる先生との比較上、生徒の甚だ僅少ななるを疑ふ。これ或は課業外に餘暇なきにも由るならむも、諸君はつとめて、此の貴重なる圖書館を利用して、博く讀まれんことを望む。近來の學生は、徒に、過大の希望を抱き、その本を忘れて、末に走る傾向あるは慎む可きことにて、宜しく日々の學業を實用的に學ばざる可からず。米國などにては、堂々たる學生すら、自ら商ひ自ら耕して、習得せる學理を實地に應用しつゝあるは最も注意す可き事なり。獨國の英國に對する競争の聲を聞くに、英國が一人一日の勞働時間八時間なるに對し、獨國人は十時間働きて、彼より二時間を利す可しと云へり。思ふに、此の努力、數年ならずして、その國力よく英國を凌駕するや必せり。吾五千萬の國民は、日露戦争の結果、一人五十圓といふ輕からざる負擔を果たさざる可からず。故に、獨人十時間働かば、吾は十二時間を働くの大覺悟なかる可からず。私は、日露戦争の際、滿韓の野に、吾忠勇なる戰士を慰問せしが、その夜を日に繼ぎて惡戰苦闘せる狀は、到底内地人の想到し得ざるところ、而して、戰闘員は勿論、負傷兵の慘狀に至りては、實に名狀すべからず。此時氏は、數葉の負傷兵の寫眞を示さるゝ又内地に於ける吾人は、非常なる苦心を以て、之が後援を全うせり。此の時の辛苦艱難は、諸君今尚ほ決して忘れざる可し。勝つて兎の緒を締むるは、戰勝國民の最大要務にて、諸君は、他日

國家の干城となる可き身なれば、將來に於ける帝國の隆盛は諸君の双肩に在り。常に戦争當時の心掛を以て、奮勵努力せざる可からず。嘗て佛國の某博士が、吾が國が、近々四十年にて、未曾有の發達をなし、且つ、有史以來の大戦役に連戦連勝せる原因を講究せんとして來朝し、所感を陳べて曰く、日本の今日あるは、一つに教育勅語に因す。此の勅語は、すべての宗教を抑壓し得る力を有し、未だ他に斯の如きを見ず。實に羨望に堪へずと。思ふに、我國の武士道は、これに依つて維持せらるゝものと云ふを憚らず。諸君は此の勅語を服膺して、より實踐躬行せざる可からず。武士道と云へば、乃木大將を聯想するものなるが、大將は智あり、仁あり、勇ある人にして、眞に武士道の權化なり。營中にあるや、士卒と起臥を共にし、食を同うし、又負傷兵に對する同情の厚き、誠に崇敬措く能はざるの人なり。諸君は此の偉人の人格を摸すべきなり。又先年、所用ありて、會津に赴きし際、白虎隊の墓を訪れ、往時を追回して感慨無量なりき。彼等は皆十四五の年少氣鋭の徒、忠義の爲に、よく力戰して、鶴城城頭焰烟の昇るを見て、遂に一同同じ枕に切腹して死せり、その行爲、その精神は、實に、讚嘆す可く、(此の時白虎隊に關する寫眞を數葉本校に寄附せらるゝ)今日青年の志氣漸く懦弱に流れんとするに當り、大いに回想反省すべきものなり。話は多岐に涉りたれど、要するに、諸君は日露戦争當時の精神を忘るゝことなく、よく勉め、よく勵み、よく修め、よく養ひ、以て國運を隆盛ならしむる所以を謀らざる可からず。(M、T、生筆記)

會報

(自明治四十一年九月至明治四十二年八月)

劍道部記事

○我劍道部は、明治四十二年一月十二日より、同年二月一日まで三週間、例年の如く寒稽古を行ふ。昨年比して、寒氣殊に烈しかりしも、部員の元氣は却つて爲に鼓舞せられ、寒威凛々として、手を呵すれども、温を取る能はざるの日に能く皆勤せしもの實に二十九名、未曾有の多數を出せるのみならず、一年生にして皆勤せるもの三名を見るに及べり。吾輩は、今後も常に此の如くならむ事を切望するものなり。

○二月五日、部員進級試合を舉行す。中島先生の審判の下に、勇壯活潑なる三十餘組の試合は行はれ、勝は紅軍に歸しぬ。終りに寒稽古皆勤者に賞状を授與せられ、猶羽石會長の訓話、中島先生の批評等ありて散會せり。(勝負附は略す) 皆勤者氏名左の如し、

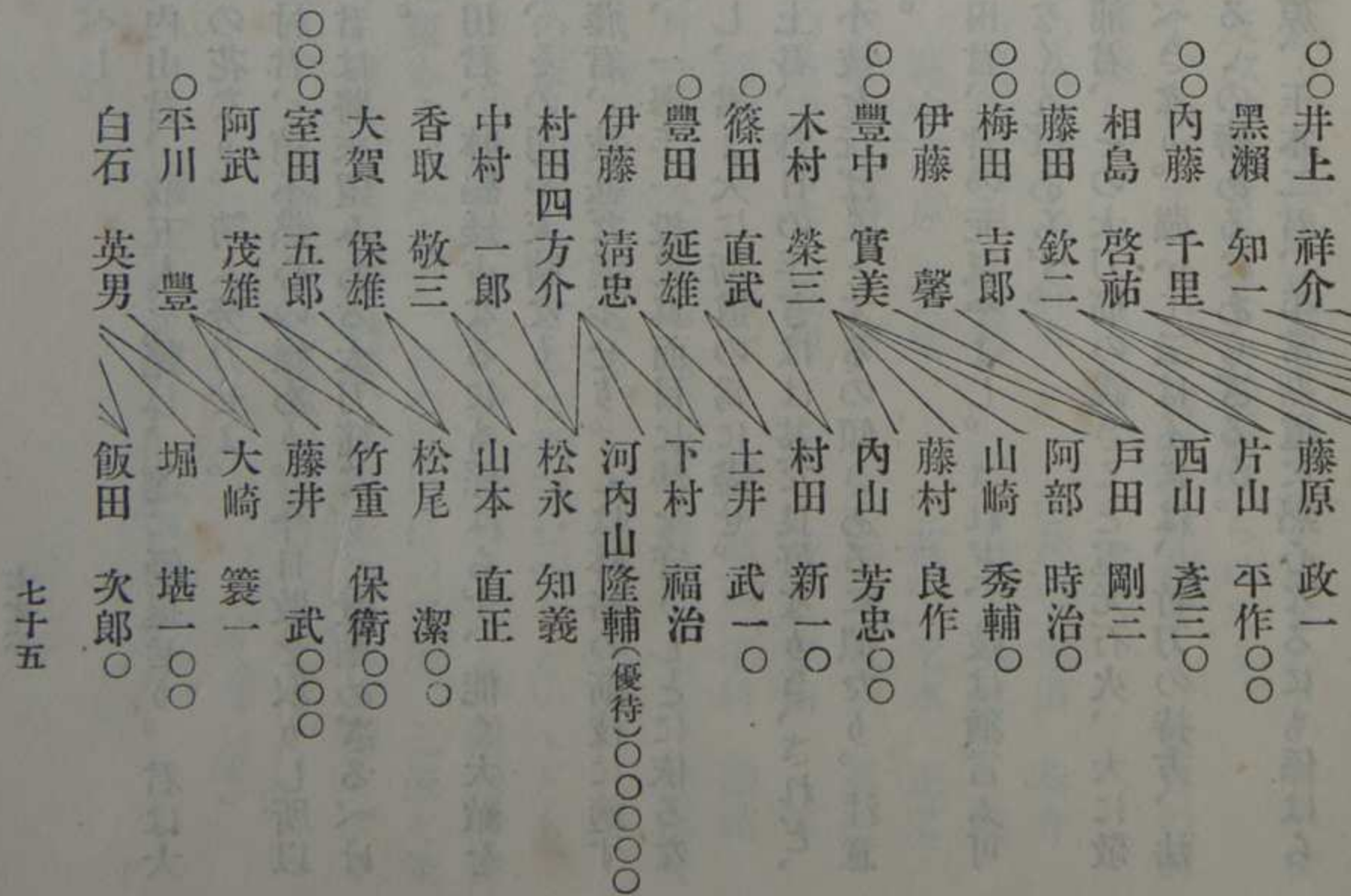
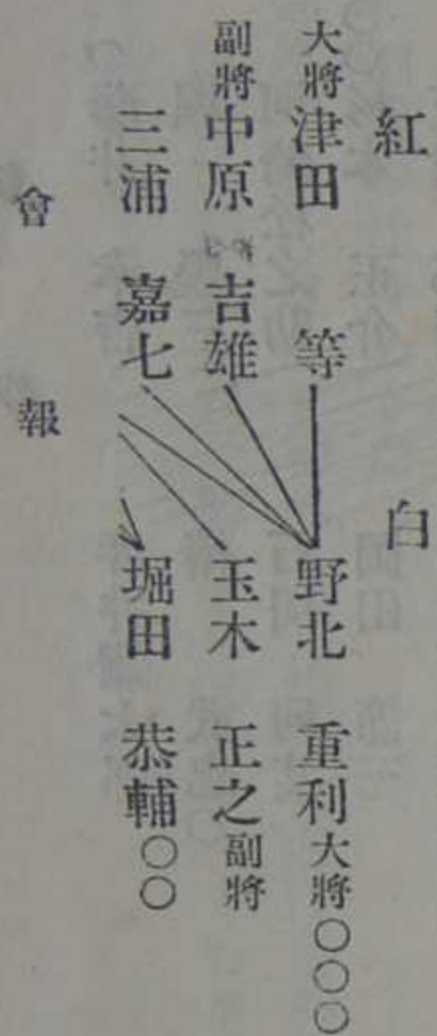
- 岩崎 吾一、井上 祥介、伊藤 清忠、石田 四月、波佐間 久、西山 彦三、堀田 恭輔、豊田 延雄、戸倉 吉郎、片山 平作、玉木 正之、田中 貢、竹重 保衛、津田 等、塚本 清一、中原 吉雄、内藤 千里、中村 一郎、村田四方介、梅田 吉郎、野北 重利、山本 直正、松尾 潔、藤原 政一、藤村 良作、阿部 時治、阿座上久義、下村 福治、篠田 直武、以上 (イロハ順)
- 四月中旬、本學年間の劍道部委員を改選す。當選者左の如し。
- 田中 貢、野北 重利、玉木 正之、中原 吉雄、津田 等、
- 五月二日、椿八幡社の一千年祭に會し、有志相謀りて、奉納擊劍會を開き、警察署、大井村、萩町、椿西村、椿東村、明木村、及び各地方の劍士を集めて、社内にて、大會を開く、本部にも請待を受けられたる左の諸氏を選抜して出演せしむ。
- 津田 等、野北 重利、玉木 正之、田中 貢、中原 吉雄、三浦 嘉七、堀田 恭輔、藤原 政一、井上 祥介、片山 平作、黒瀬 知一、内藤 千里、

以上の勇士は、多く警察署員と組合しが、其の成績甚だ善く、本部の威名、是に於て、一層各地に轟きぬ。

○五月三十一日、大日本武徳會山口支部劍道教師二宮久氏來校せられ、放課後、部員一同を道場に集めて講話あり、又左の八氏の演技を觀らる。

野北 重利、田中 貢、津田 等、三浦 嘉七、玉木 正之、中原 吉雄、堀田 恭輔、井上 祥介、先生曰く、「竹刀の持ち方に今一層注意せられたし」と、先生は、又劍道を武士道の精華なる所以を説かれき。

○六月廿九日、劍道春季大會を開く。中島先生の審判の下に、壯快なる三十餘組の試合は行はれぬ。會長初め諸先生其他の臨場者頗多く、且つ、試合皆花々しく、爲に、大に、斯道の光彩を増すを覺えたり。勝負左の如し。



○藤井 幸吉 坪井彌太郎
堀 豐三 椿 武忠
河崎松之助 石川 何某
○杉本 正介 岡田 節三
三輪 邦廣 原田 景三
○草刈 清 内田 耕作
○藤山 次郎
○村田 義嗣
○戸倉 吉郎

仕合終つて、村上會長の訓話あり。要は、劍道は武士道の精たり華たるを以て、誠心誠意斯道を精勵すべし。竹刀は斯道の修業者にとりては魂と言ふべければ、貴重すべしといふにありき。當日演武諸君の技倆につきて、聊感ずる所を述べしめよ。

三輪君は不運にして敗を取りたれど、君の働作たるや敏活にして、能く要にかなへり、猶一層の精勵を望む。

松尾君は、二年級中に在りて、稍頭角を現すもの、太刀筋頗要領あり。將來の發達は、君の勉否如何に

ず、當日は意氣甚だ振はざりしは憾むべし。願くば、猶一層の勉勵ありて、斯道に盡されんことを。

野北君、技躰共に發達せるは、人意を強からしむるものあり。

津田君、技術の進歩歎賞の外なし。されど、元氣に溢れて、沈着を缺くの嫌あり。一考を煩さざるを得ず。

○七月十六日、我が劍道部長中島先生、熊本縣鹿本中學校に轉任せらるゝを以て、部員一同、紀念として撮影せり。

○七月十八日午前五時、我劍柔道部選手十四名は、石光憲式、吉岡良平の兩君と共に、金谷を出發し、道中無事にて、午後五時、山口上立小路香川旅館に到着しぬ。遠路を跋涉せしにも係はらず、元氣頗る旺盛なり。十九日は全日休養し、二十日午前七時より、山口中學校の道場に集合す。午前は柔道にして、午後には劍道の仕合ありたり。

渡邊知事、日比會長を初め各學校の劍道指南列座の中に、競技は初まりぬ。勝負とりなりしも、いづれも皆興ありき。

在るべし。

河内山君、敵五人を斃し、遂に優退せり。君は大會中の花なり。請ふ努力せよ。

木村君、稍不熱心の嫌あり。今日敗を取りし所以か。君は將來望みある太刀筋なり。豈勉めざるべけんや。

梅田君、躰軀矮少なるにも係はらず、能く大敵を倒す、その勇や天晴なり。

内藤君、技甚だ進歩せり。これは躰格の斯技に適すると、一舉手一投足眞面目に法を守りしとに依るなるべし、君よ大に斯道の爲に盡せ。

井上君、當日の手ぎは甚だ良好なりき、されど、稍々小技を玩ばんとするの傾きあるに似たり。注意せよ。

堀田君、君の元氣やよし。されど、技は猶言ふ可き者なくんばあらず。

三浦君、その太刀筋の鋭きこと電光石火、大に敬服すべきなり。強いて云はんには、竹刀の持方、法を外るゝの癖あるにあらざるか。

中原、玉木二君、平常斯道に熱心なるにも係はら

競技終り、中學校の食堂に於て茶話會あり、各學校選手及び知事會長以下皆列席せられたり。かくて、翌二十一日、一同無事歸萩せり、當日の勝負左の如し。

○萩中 井上 祥介	○萩中 堀田 恭介
○國學 白上 晴壽	○山中 平田 饒
萩中 中原 吉雄	○萩中 玉木 正之
○師範 小野 擴	○鴻中 荒川 貞一
○萩中 野北 重利	萩中 津田 禎 等
鴻中 北 彌一	○高商 橋村 禎祐

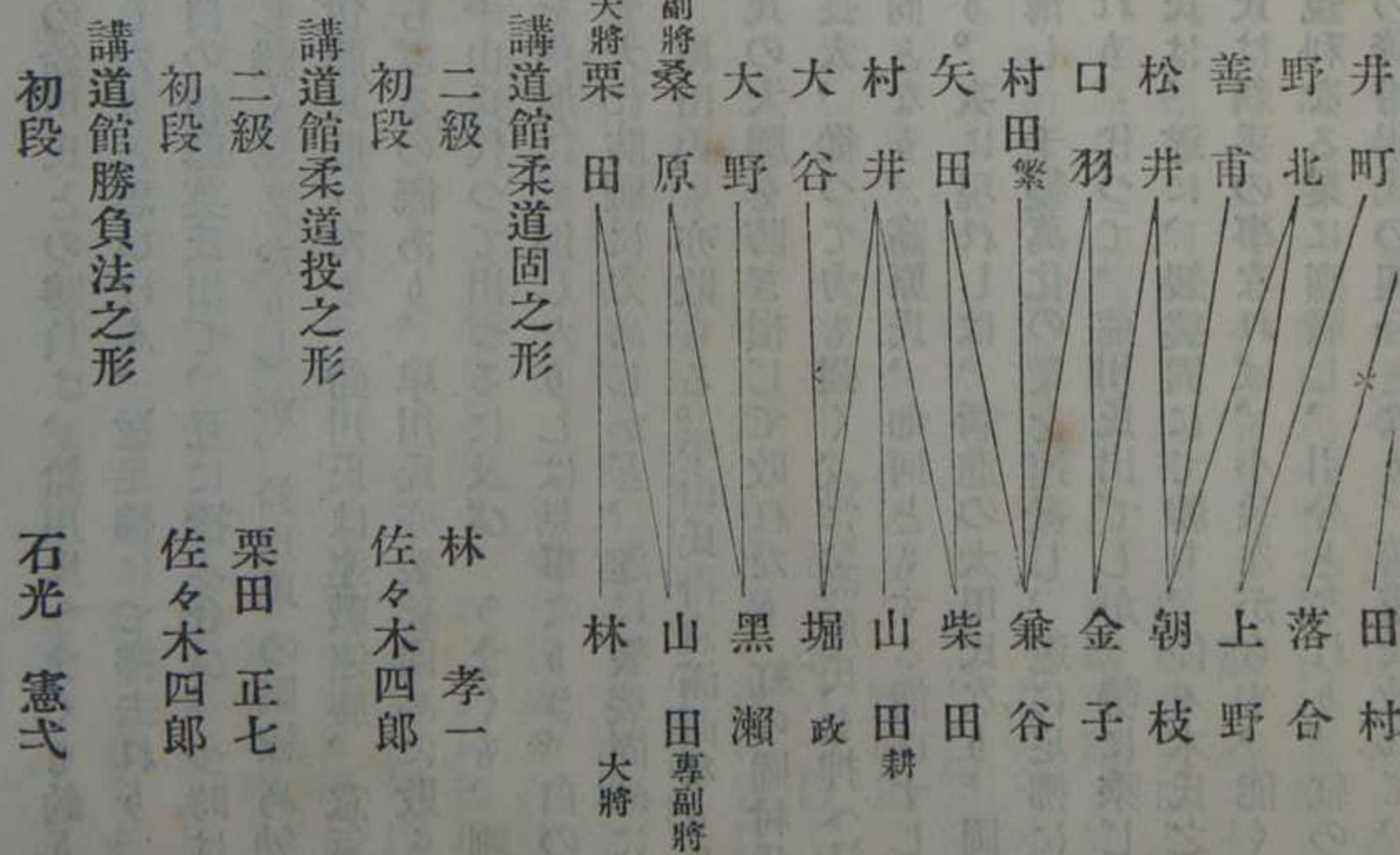
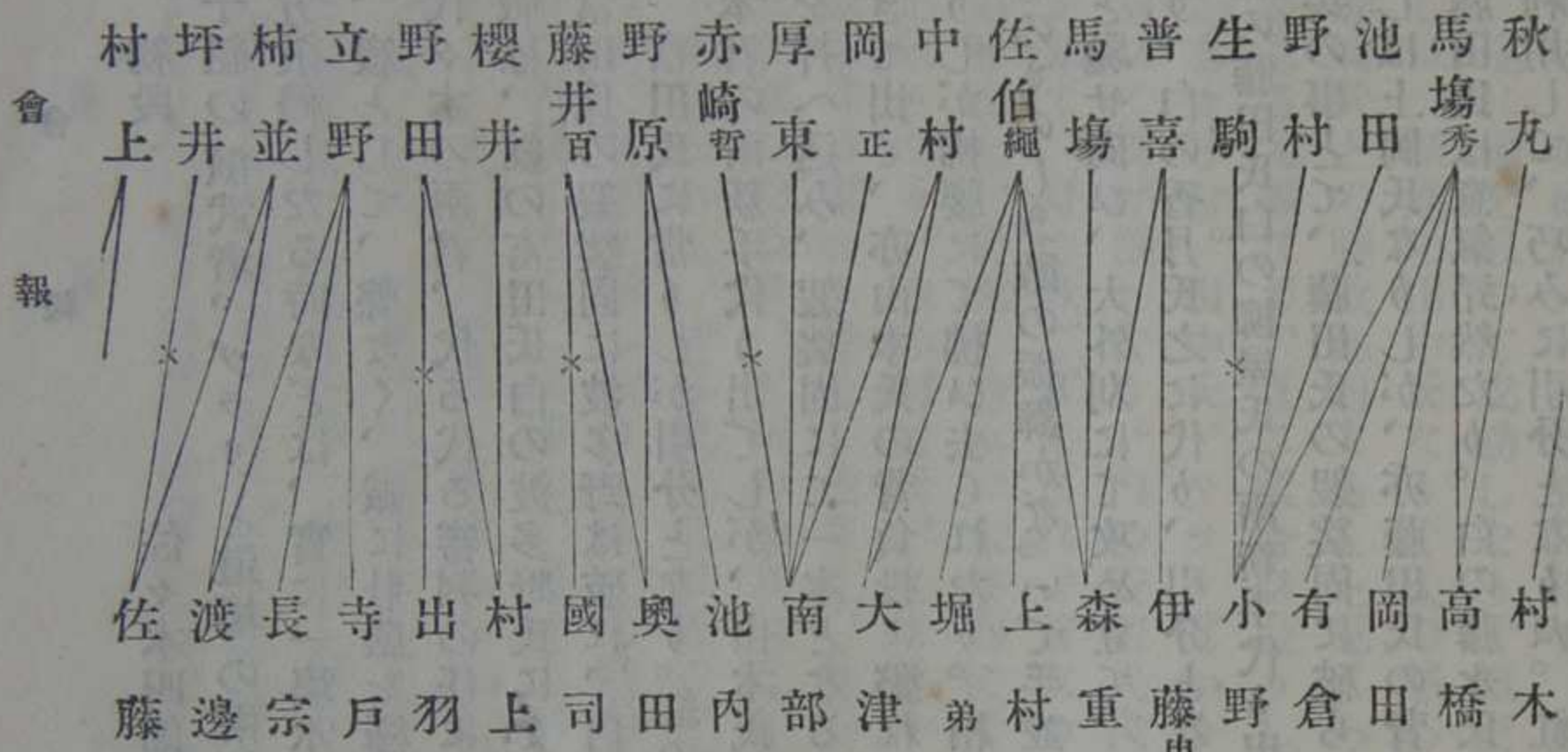
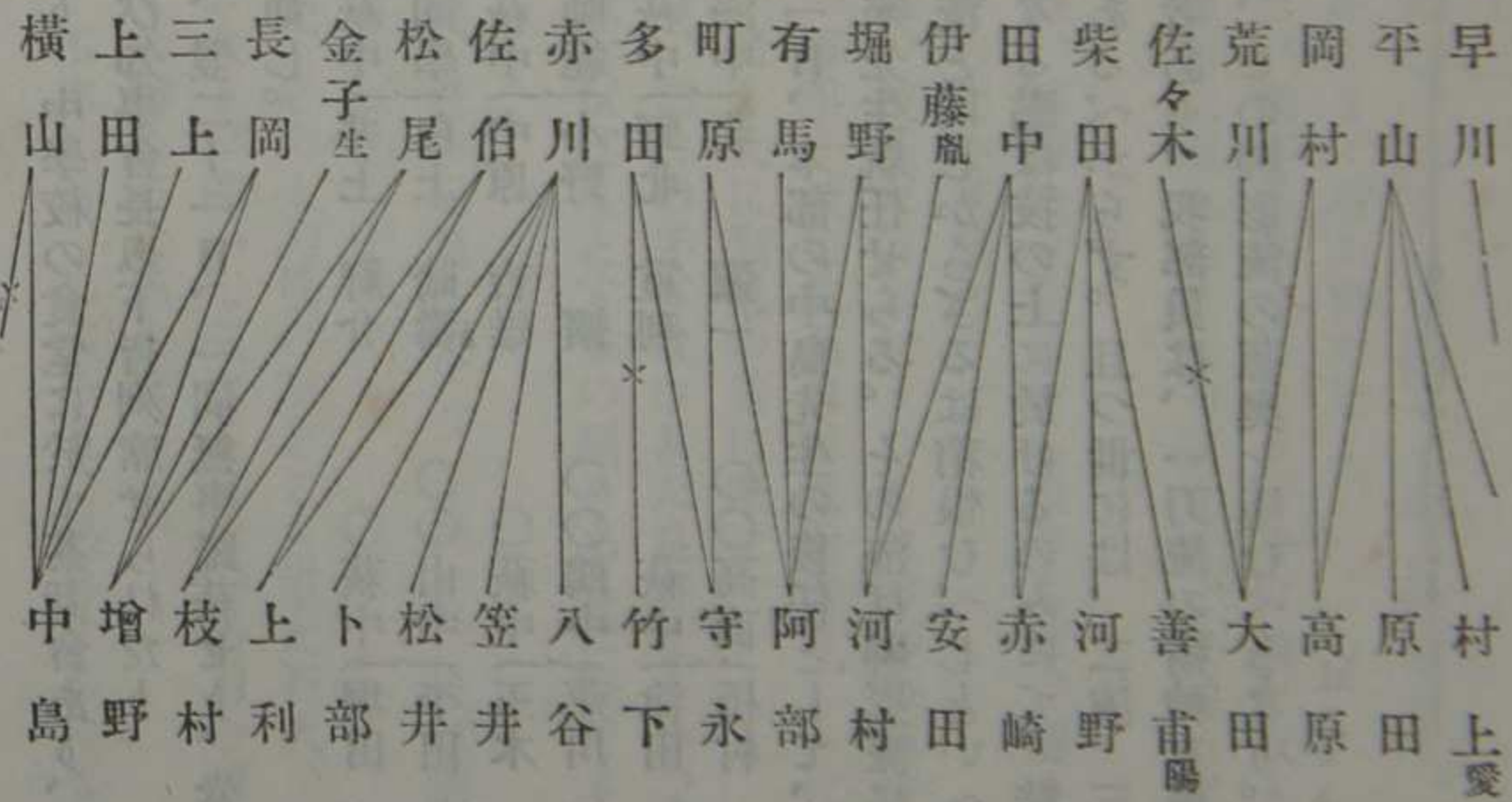
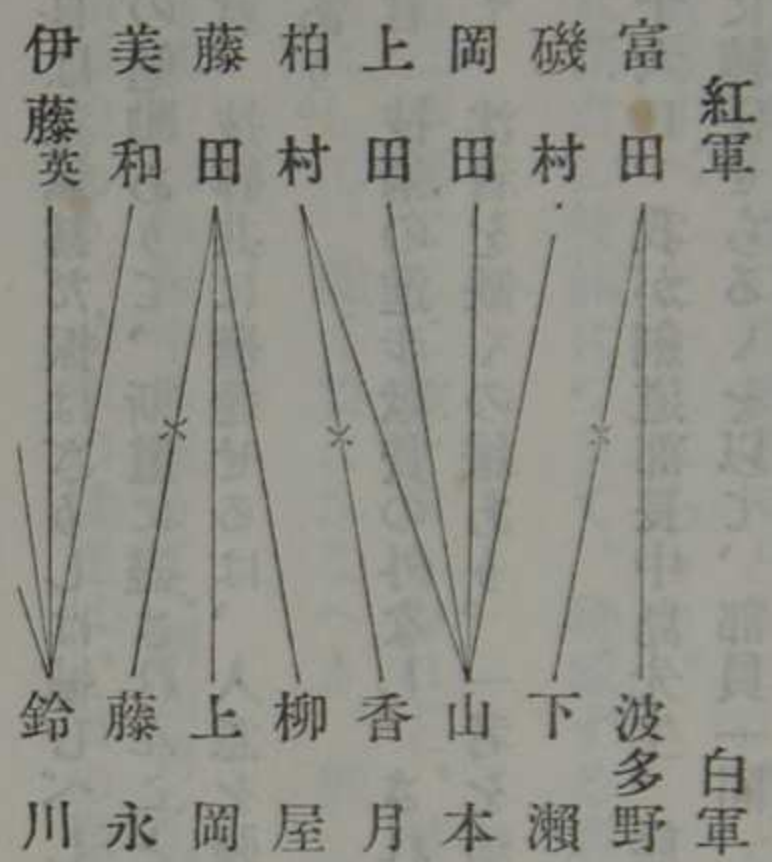
○九月一日、本部の中島先生の後任として、警察署の吉川來先生就任せらる。その流は神影流にして、以前の流と同じからざるは稍恨むべしといへども、その異なる點は技の上に於けるのみにて、精神修養に二様あるべからず。且つ世には、二流、三流を兼修せる者あり、我部員は、一刀流の精神を棄てざると共に、この神影流の蘊奥を極むべきなり。

(M, T, 生)

柔道部記事

○四十二年七月三日、柔道春季大會を舉行す。
 本年は、例年より少しく時期遅れ、従つて、暑さも酷しかりしが、部員はひるむ様もなく、日頃鍛へし腕の力を試さんと勇みあひしど、げに壯快なりける。

此の日、午後一時半より、道場には、村上會長を初めとし諸先生、來賓及び生徒等轟々とおつめかけ、立錐の餘地もなく、頗る盛大の狀を呈したり。
 當日の番組試合の様様左の如し。



紅白六十組の演武者、ヅラリと道場の兩側に居並び、双方敬禮したる時などは、實に一場水を撒きたる如く、寂として、聲なく、誠に壯嚴を極めたり。石光、代々木の兩君、代る代る審判の任に當らる。此日の戦は、紅の富田氏白の波多野氏によりて開れり。富田氏の袈裟固に波多野は破れ、白の下瀬氏代つて、富田氏に當りしが引分となり。紅の磯村君、白の山本君の兩新手代り出でしが、山本氏難なく、磯村氏を押へ込み、袈裟固にて一本となる。紅の岡田氏繼ぎて出で、亦山本氏の背負投に斃れ、上田氏之に代りしが拂腰にて拂ひ去られたり。柏村氏之を見て、ものものしき敵の振舞かな。いで手並を見せて呉れむと馳せ向ひ、大外刈にて攻め立て、遂に功を奏したり。白の香月氏之に代り、引分となる。是に於て、紅の藤田氏白の柳屋氏の兩新手代り出づ。柳屋氏は小兵の事とて、藤田氏の袈裟固に破らる。代つて出でしは上岡氏なりしが、亦藤田氏の背負投に破られ、藤田氏は意氣昂然たり。白の藤永氏は、其力あるを利用して、巧みに引分となりぬ。紅の美和氏

と白の鈴川氏との勝負は、鈴川氏うまくも釣り込み機熟したりと思ひけん。送足拂にて拂去れり。代つて、白の伊藤英氏出で、互に揉み合ひ。少時は、勝負決し難く見えたりしが、鈴川氏の胴絞め効を奏し。伊藤氏敗れたり。鈴川氏は連戦連勝、意氣當るべからざるの概あり。早川氏亦袈裟固めに敗らる。紅の平山氏代つて出づるに及び、うまくも、剛敵鈴川氏を内股にて倒したりしは見事なりき。白の村上氏出で大に防戦に力めしかど、遂に袈裟固めに破られ、原田氏も亦敗らる。平山氏得意満面なりしが、高原氏の大腰を防ぎ損じて敗れたり。紅の岡村氏は、體軀長大、従つて力も強く、急に高原氏を押へ込み、袈裟固となり。高原氏、如何ともする能はずして退場せり。次に現れしは、新進の大田氏なり。岡村氏に肉薄し、千變萬化の業を連發し、遂に足拂にて一本取れり。代つて、荒川氏出でしが、勢に乗じたる大田氏は、遂に、袈裟固にて勝ち、佐々木氏之に代る。氏は新手の事なれば、小兵ながらも、能く大田氏の鋭利なる業に應戦し、引分となれり。紅の柴田氏白の善甫陽氏の組合となり。善甫氏敗れて、白の

河野氏代る。亦破れて、赤崎次氏出づ、對戦良々久うして、遂に縮を以つて成功したり。柴田氏に代つて出でしは、新進の田中氏なり。氏の熱心なる稽古ぶり。赤崎氏との勝敗如何ならんと見てありしに、双方共盛なる元氣にて、互に揉合ひたりしが、如何なる隙かありけむ。田中氏、ヤットばかりに、赤崎氏を背負ひて投げ倒したり。白の安田氏代る、田中氏、之を見て、好き敵ござんなれ、首取つて、天晴れの功名せんと、勢鋭く進み、大外刈にて難なく、安田氏を敗りたり。白の河村氏、之れにかはり、田中氏の敏活なる業にも恐るゝ色なく、堂々と攻め立て、機先を制したるは、天晴の働き振なり。流石の田中氏も遂に敗れて、伊藤胤氏之に代る、河村氏勝つて誇らず、又敵を制したりしは、天晴の功名なりき。堀野氏微笑を含んで出陣し、河村氏例ひ鬼神を欺く勇ありとも、何の恐るゝ事かあらんと。無二無三に攻め立つるを、河村氏は從容として受流し、かども、遂に數多のいた手に堪へ兼ねて敗れたり。河村氏に代りしは、阿部氏なり。元氣旺盛、河村氏の仇討取らんと、捕り口早く肉薄して戦ふ内、力を

込めて、堀野氏をチ伏せて、志を達しぬ。有馬氏代りて、戦ふ中に、阿部氏の脊負投に、美事に敗られたり。町原氏ヒラリと立ち上り、腰を落ち付け、阿部氏と組む。阿部氏又もや、美事に脊負はんとせしを、町原氏返し業を取りしは、天晴天晴、守永氏代る、町原氏は、體軀偉大の士、守永氏の小兵に比すべくもあらず。體格に於ては、餘程の相違あり、然れども、守永氏の進退巧みにして、町原氏、容易に技を施し得ず、双方共ドット倒れ組んづほぐれつ挑む態、實に壯絶なりしが、守永氏、遂に袈裟固にて勝てり。紅の多田氏は、守永氏何事かあらむ。我引組んで、手並の程思ひ知らせんと、守永氏を手元近く引寄せ、釣り込みて、天晴背負投成功せり。竹下氏代りて出で、激戦火を散せしが、共に疲れて、遂に引分となれり。次は、名に負ふ紅の赤川氏、白の八谷氏なり。赤川氏は日頃の勇氣更に百倍し、得意の巻込を以て、敵に肉薄し、其の業の美事さ觀る人を驚かしめたり。八谷氏の常に守勢を取りしは、修業日尙淺きが爲ならん。赤川氏は益々攻勢を取り、遂に身を捨て、飛び込み、捲込功を奏したり。笠井氏

も、赤川氏得意の捲込みに捲込まれ、次いで松井氏出て、獅子奮迅の勢を以て挑戦し、連發射撃したれども効なし、赤川氏、此の時、得たりと敵の掛けたる業を防ぎ、直に返し業を取り成功す。次いで出てしは小兵ながらも、人に知られたる卜部氏なり。日頃の稽古頗る熱心にして、時々大兵を倒すの晴業あり。此度こそは、我、敵の首取つて天晴の功名せむと勢鋭く攻寄せしが、赤川氏油断なく、巧に應戦し、卜部氏は得意の背負投、赤川氏は得意の捲込にて、互に突撃を試みしが、如何にしけん。卜部氏は、赤川氏の不意の大外刈に刈り込まれて退く。上利氏卜部氏に代る。赤川氏の破竹の勢に、上利氏は、守勢を取る。赤川氏も非常に疲れたりと見えて、今は有効の業なく、腰定まらず。上利氏得たりと押へ込みて勝つ。佐伯氏对上利氏の戦は双方有効の業なく、佐伯氏袈裟固にて遂に勝つ、枝村氏躰軀力量迥に佐伯氏に及ばざりしが、謀略圖に當り、締業功を奏したるは務めたるものと言ふべし。松尾氏、枝村氏の躰軀小なるに附け込み、忽ち袈裟固に固めこむ。枝村氏能く力戦しけれども力敵する能はずして敗る。増

野氏代り、得意の大外刈を以て、美事に刈る。金子生氏亦美事に刈り去らる。長岡氏出て、力量あるを幸ひ、増野氏を袈裟に固め込みて、意外の功を奏す。白の中島氏長岡氏双方互角の力量なりしが、中島氏の浮腰成功して勝つ。紅の三上氏、又もや中島氏の大腰に釣り込まれて敗れ、上田氏も跳腰に掛りて敗れ、中島氏意外の好成绩を占む。紅の横山氏代る。中島氏も前三氏との奮戦に、非常なる疲勞を感じしならん。もろくも、横山氏の無鐵砲なる跳腰にて跳ね飛ばされて退く。村木氏代つて、横山氏と組む。村木氏は老練にはあらざれども、いさゝかの修養あり。横山氏は新進の人、加ふるに無鐵砲の業あり。村木氏は、此の無鐵砲の業に恐をなし、頗る苦戦したりしが遂に引分となりたり。紅の秋丸氏と白の高橋氏と代りて對戦し、双方時々危うき所ありたれども、如何せん、掛くる業の銳利ならざるが爲に極らず。兎角する間に、双方ドット倒れ締めつ締められつせしが、高橋氏の捕る襟充分極りて勝つ。紅の馬場氏得意の大腰を以て攻寄せ、高橋防戦大いに力めしかど、遂に破れたり。岡田氏も、馬場氏の鋭き

大腰を防ぎ損じて、亦討たれたり。馬場氏既に強敵二人を斃し、勢に乗じて、白の有倉氏に肉薄し、例の大腰の連發を試みしが更に効果なし。是に於て、大に作戦計畫を變へ、押込に出づ。有倉氏も頗る努めしが、遂に馬場氏の襟締極りて破れたり。白の小野氏、味方數氏の仇討ち取らんと、奮進一番、馬場氏に當り、頻りに、袖投げを掛けしが、馬場氏前の激戦に疲れたりけん。掛くる業更に効なし。双方奮闘數刻に涉り。小野氏遂に袖投げを以て効を奏す。紅の池田氏、小野氏と組む。池田氏は新進の熱心家、此日こそは天晴れ功名せんと勇み立ち、輕快なる取り口にて、進退に一々法度あり。而して、立業に於ては、頗る進歩せしかば、小野氏も悔り難しと思ひけん、防戦頻りに努めしが、運つたなくも、首締にて敗れ、小野氏益々優勢なり。紅の野村氏、又躰落しに破られ、生駒氏代りて戦ふ。生駒氏始めより守勢に出たれば、又如何ともする事能はず。遂に引分となれり。次に現れしは躰軀偉大を以て名高き紅の普喜氏なり。白の伊藤氏とは躰軀に於ては餘程の相違あり、伊藤氏餘程苦心せしも効果なく、普喜

氏の大外刈に刈り取らる。白の森重氏突進一番、先づ試みたる釣込足成功し、普喜氏恨を吞んで退場す。紅の馬場氏相變らず盛なる元氣にて、森重氏を猛烈に攻め立つ。森重氏、馬場氏を手元近く引寄せ、力を込めて打ち掛けし躰落美事に成功したり。紅の佐伯氏代る。氏は小兵にこそあれ、中々の晴業士なれば、森重氏の掛けたる躰落、忽ち返しを取つて勝となる。次は白の上村氏なり。双方互角の腕前にて、互に揉合ひしが、佐伯氏、遂に上村氏を組み敷き、袈裟固にて勝ちたり。熱心家堀氏如何にしけん、忽ち亦佐伯氏の脊負投を防ぎ兼ねて倒れたり。大津氏は、我味方を倒し、剛の者、此度こそは、我が手に掛けて美事投げんと掛けし内股果して功を奏せり。中村氏代り出て、兩雄互に勇を鼓し、稍暫く奮闘し、何れも疲れ、遂に倒れ、揉み合ふ内、中村氏腕關節を美事に取れり。南部氏は稽古不十分なる爲め、元氣盛んなる中村氏に取らるゝならむと窺かに危みしが、其の實は大に力量あり。二度まで中村氏を捻り倒したり。中村氏も必死に戦ひしが、遂に南部氏獨得の釣込足にて敗られたり。次で、紅の岡正氏出づ。

岡氏無駄業を掛けし爲め、南部氏返し業を取り勝となる。續いて、厚東氏出て、同じく返し業にて破られ、赤崎氏代る。氏は前三氏に顧る所ありて、大に注意と力量とによりて、南部氏の疲勞に乗ぜんとせしが、有功なる業なきため引分。次は紅の野原氏と白の池内氏なり。奮闘數分、野原氏甘くも釣り込み、大腰を以て撃退したり。奥田氏は、野原氏の大腰を受け流し、返し業を以て成功す。紅の藤井氏、袈裟固にて、奥田氏を敗る、國司氏これに代りて、藤井氏に當る、奮闘激戦稍久しかりしかども、勝敗分たずして分となりぬ。代つて紅の櫻井氏と白の村上氏と現れ、袈裟固にて村上氏の勝となり。野田氏代る、野田氏力量あり、村上氏稍度を失ふ。野田氏早くも之を見て取り、疾風の如き大外刈にて、村上氏を倒したり。出羽氏出て、盛に突撃せしかども、野田氏獯猛に應戦し、引分となりしは遺憾なり。紅の立野氏と白の寺戸氏とは、立野氏が日頃鍛練の内股に掛り、寺戸氏憾を吞んで退く。長宗氏は、今日こそは、我が腕前を試みんとて、再三脊負投を施して、大に敵を惱まし、が、立野氏の返業に破らる。渡邊

氏は時々奇抜なる業を以て、敵を斃す事あるを以つて、立野氏はいさゝか恐懼の色見え、注意して力戦したりしが、渡邊氏も機を見て、大腰にて、ドットばかりに投げ去れり。紅の柿並氏、得意の左脊負投を以て、奮闘頗る努め、美事に功を奏し、佐藤氏、獯猛なる巻込を以て、難なく柿並氏を斃す。紅の坪井氏代つて佐藤氏に當る。双方只小ぜり合ひに止まり、勝負一向決せずして、遂に引分となりしは、平凡なりき。次は紅の村橋氏と白の田村氏にて、田村氏の餘りに勇みたるため、足にすきあり。村橋氏の足掃に掃ひ去られたり。續いて、白の落合健氏出て、奮戦よく勉めしが、激戦の後引分となれり。紅の井町氏對白の上野氏は、井町氏に油断ありけん。上野氏の冒險なる巻込にて美事に破られたり。次ぎて紅の野北氏出場、氏は近時より柔道に熱心し、進歩早く、又大なる力量あり。劍道は、全校屈指の使手にて屢々千軍萬馬の間を奔走し、功名手柄數多ある強者なり。上野氏は、何の之しきの敵にと、少しもひるむ色なく、從容として戦ひしが、力量に相違ありしか、又は拙かりしか、遂に組み敷かれて敗れたり。

朝枝氏は小兵ながら、老練にして能く敵をあやつり、内股にて野北氏を撃退せり。善甫氏朝枝氏と戦ふ。双方敏活に、よく攻めよく防ぎしが、又もや、朝枝氏の勝利となる。紅の松井氏代り戦ふ。朝枝氏、急激なる跳腰を受け損じて敗れ、金子氏代る。小兵ながら能く戦ひ、合せ業を以て、松井氏を破る。次に現れしは紅の口羽氏なり。氏は躰軀偉大の士にて力量にも富む。一方は小兵故、掛けたる業、美事に返しを取られて破らる。兼谷氏出て、口羽氏を引き寄せ。難なく釣り込み、内股を以て之を破り、又合せ業を以つて村田氏を敗れり。紅の矢田氏、遂に押へ込みにて兼谷氏を破る。白の柴田氏頗る力戦し、矢田氏うけ太刀となり、遂に破らる。代つて出でしは紅の村井氏なり。氏は四級の老練家なるが、一時病痾のため、稽古を中止せしかば、いさゝか、不安の念ありしが、實際は大に然らざるものあり、難なく柴田氏を捕虜とせしは、腕關節極まりたる者なり。次に山田耕作氏も亦襟首を締められて破らる。堀政氏代つて出づ、氏は新進の勇士にして熱心なる若者なり。村井氏とくむや、氏は、大に敵をなぶらんと

し、村井氏も必死となりて肉薄せしが、堀氏跳巻を以つて、美事に巻込みたり。大谷氏は、堀氏の腕前侮り難きを見て取り、守勢的に盡力せしものなれば、堀氏の業も施す所なく、遺憾にも、引分となる。紅の大野氏は、白の黒瀬氏と取り組み、双方元氣によく攻めよく防ぎしが、黒瀬氏の早業に及びかねたる大野氏は、恨を吞んで退く。次は紅の副將桑原將軍なり。獯猛なる巻込如何なる功を奏すべきか見物なり。兩勇烈しく働き、稍暫くして、双方ドット一時に倒れ、組つ組まれつ揉合ふ内、黒瀬氏襟首締りて破らる。代つて出陣せしは、白軍の副將山田氏なり。副將と副將との對陣なれば、勝負いかにと見てありしに、双方苦戦一方ならず。桑原氏自慢の巻込みを掛けしが功なく、山田氏に押へられ、遂に袈裟固にて敗られたり。是に於て、山田氏は紅軍の大將栗田氏の壘にせまり。栗田將軍愈自から出陣したり。山田氏は、今日第一の功名せんと、全力を奮つて突進す。栗田氏軽く之を受け流し、茲に奮戦火花を散す事數刻、栗田氏素早く突込む内股を、山田氏受損じて敗れ、白軍の大將林氏遂に陣頭に現れ

たり。紅軍勝つか、白軍勝つか、兩軍の運命此の一戦にあり。斯く、一軍の重任、懸りて、双肩にあるを思へば、兩將共に軽々しく進退すべからず、暫が程は互に睨み合ひたりしが、かくては果てじと、機を窺ひ切り結びたり。時に満場水をまさたるが如く、萬籟寂として聲なし。栗田氏得意の内股を以つて攻むれば、林氏足業を以つて之を返さんとし、栗田氏大外刈を以て破らんとすれば、林氏返を以て之に應じ、双方共に流汗淋漓として争ふ様は、龍虎の相搏つ状も嘗ならず。實に觀者をして骨鳴り、肉動くの感あらしめたり。戦ふ事數刻、栗田氏の疲勞を窺ひ、林氏忽ち身を堵して飛び込み、相組みて揉合しが遂に襟首極まりて、勝は白軍に歸したり。紅白勝負終りて、講道館柔道固之形、投之形及び勝負法の形等あり。續いて村上會長の武士道に關する講話ありて、大會無事に終を告げたり、(S、S、生)

野球部記事

○近時、野球術は、長足の進歩を爲し、青年社會の理想的運動とはなりぬ。當校野球部も此の風潮の支

配に漏れずして、一昨年の野球聯合大會の刺戟、及親切なる山口高商學生土屋兄の來萩を期として催せる猛烈なる夏季練習等によりて、漸く、今日の發達の端をなし、年來寂寞たりし「グラウンド」も今や、朝夕絶間なく「ボール」の飛交するを見るに至れり。さればこそ、漸く萩中野球團の存在を認めらるゝに至りしなむ。

○明治四十一年十月三十一日午後二時三十分、松村、中西、兩君の審判にて、第一回秋季大會を開始し、壯快なるゲームの中に、赤組の勝利を以て閉會せり。當「ゲーム」に於ける「メンバー」及成績左の如し

白	林山伊村玉中柴立井	2.	0.	3.	44.	3.
田	佐上木村田野上	死	四	三	打	安
P. C.	S.S. I.B. II.B. III.B. L.F. C.F. R.F.	球	振	數	球	點

赤	村岡金佐落黒松永中	1.	6.	5.	33.	5.
田	子木合瀬野松村	打	死	四	三	打
P. C.	S.S. I.B. II.B. III.B. L.F. C.F. R.F.	球	振	數	球	點

○十一月二日放課後、林、松村、兩君の審判のもと

に、第二回秋季大會を開始したるが、年少氣鋭の勇士の闘技にて、頗目覺しく、誠に末頼もしく見えし。赤組の勝にて午後五時閉會す。その「メンバー」及成績左の如し。

白	石井ト八柿榎佐原青	2.	5.	7.	47.	4.
津	町部谷並本伯田木	死	四	三	打	安
P. C.	S.S. I.B. II.B. III.B. L.F. C.F. R.F.	球	振	數	球	點

赤	渡桑秋伊三有藤藤池	0.	7.	5.	43.	3.
邊	原九藤宅近田井内	津	石	振	數	球
P. C.	S.S. I.B. II.B. III.B. L.F. C.F. R.F.	球	振	數	球	點

○明治四十二年五月五日、林、松村兩君の審判にて、一年對二年の對級「フラッグマッチ」を舉行す。競技者は勿論、應援者も對級「マッチ」の事として、共に非常に慎重の態度を以てし、互にあらむ限りの秘術を盡し、電光石火の間に奮闘力戦せしが、あはれ、二年の選手も、新進の一年の勇士に敵し難くして、「フラッグ」は遂に、一年の有たらしめざるを得ざりき。此の「マッチ」に於ける「メンバー」及成績次の如し。

赤	長佐村八原ト高横三	39.	0.	4.	6.	5.
岡	伯上谷田部原山輪	打	死	四	三	打
P. C.	S.S. I.B. II.B. III.B. L.F. C.F. R.F.	球	振	數	球	點

白	三岡河數阿石山中後	38.	0.	4.	4.	10A.
宅	村野藤武津田島藤	岡	長	振	數	球
P. C.	S.S. I.B. II.B. III.B. L.F. C.F. R.F.	球	振	數	球	點

○五月十一日、林、松村兩君の審判にて、一年對三年の對級「フラッグマッチ」を舉行す。二年を難なく打ち破りたる新進の一年軍は、茲に其の鋭鋒を向けて、三年級の堅壘を衝かむとせしが、流石は老巧なる三年軍、其の手は食はず、忽にして一年軍を打ち破れり。其の「メンバー」及成績左の如し。

赤	邊井伊村立井中守秋	48.	0.	3.	4.	4.
邊	町佐上野上村重丸	打	死	四	三	打
P. C.	S.S. I.B. II.B. III.B. L.F. C.F. R.F.	球	振	數	球	點

一年

數岡阿河三石山中後

邊渡

白 藤村武野宅津田島藤 33. 0. 3. 10. 2. 4.

○五月十日、佐々木、林兩君の審判の下に、四年對三年の對級「フラッグマッチ」開かれたり。一年より「フラッグ」を奪ひし三年級選手は、續いて四年を打ち破り、「フラッグ」を占有せむと敦圍さしが、四年のP、C、の「バッテリ」には堪え得ず、遂に敗北に歸し、折角の「フラッグ」を、四年に奪はれたり。當「マッチ」の「メンバー」及成績次の如し。

赤 松山藤齋野松柴大山

(年四) 村田村藤田崎田野崎 36. 1. 0. 3. (渡) 2. 6.

P. C. S.S. I.B. II.B. III.B. L.F. C.F. R.F. 打死四三安得

白 渡井伊村井立中守黒

(年三) 邊町佐上上野村重瀬 34. 1. 5. 5. (松) 1. 0.

○五月二十九日午後二時四十五分、田中戸塚兩先生の審判の下に、四年對五年の對級「フラッグマッチ」を開催したり。兩軍互に秘術を盡し、その技倆神出

鬼没誠に端睨すべからざるものありしが、如何せむ、さしもの猛投手林君も、敵の投手には辟易し、あはれ月桂冠は四年の手に歸しぬ。此日、四年選手一同は、優勝紀念の撮影をなせり、「メンバー」及び成績左の如し。

赤 林落厚玉佐榎石田齋

(年五) 合東木木本津邊藤 33. 2. 0. 13. 2. 3. (松)

P. C. S.S. I.B. II.B. III.B. L.F. C.F. R.F. 打死四三安得

白 松山藤齋野松柴大山

(年四) 村田村藤田崎田野崎 38. 0. 0. 15. (林) 4. 6.

○七月一日午後一時、伊佐、井町兩君の審判の下に、第一回聯合仕合を開催し、白軍の勝ちにて修了せり。「メンバー」及び成績左の如し。

赤 三佐原河野石西美石

宅伯田野村津田輪田 27. 0. 0. 5. (阿) 0. 3.

P. C. S.S. I.B. II.B. III.B. L.F. C.F. R.F. 打死四三

白 阿岡ト八三岡中河後

(三)

武村部谷上田島野藤 33. 0. 2. 6. 1. 7.

○七月一日午後三時、林、松村兩君の審判の下に、第二回聯合仕合を舉行し同四時三十五分白軍の勝にて修了せり。「メンバー」及成績次の如し。

白 數野上栗池三厚佐上

藤田利田内浦東藤領 33. 1. 0. 8. (野) 1. 6.

P. C. S.S. I.B. II.B. III.B. L.F. C.F. R.F. 打死四三安得

赤 野横藤赤善朝藤松河

田山井崎甫枝田野村 30. 0. 7. 9. (數) 1. 5.

○七月二日午後一時十五分、村田君の審判の下に、第三回聯合仕合を舉行し、同二時四十九分、白軍の勝にて修了す。「プレイヤー」及成績左の如し。

赤 石豊工田木善阿黒笹

津中藤邊村甫上瀬村 30. 2. 3. 5. (渡) 2. 3.

P. C. S.S. I.B. II.B. III.B. L.F. C.F. R.F. 打死四三安得

○七月二日、村田君の審判にて、午後三時、第四回聯合仕合開催、同五時、白軍の勝にて修了す。「プレイヤー」及成績左の如し。

白 厚落松玉林松守大齋

東合崎木 村重野藤 44. 2. 0. 3. (中) 2. 7.

P. C. S.S. I.B. II.B. III.B. L.F. C.F. R.F. 打死四三安得

赤 中井伊村佐榎立阿齋

村町佐上木本野上藤 36. 1. 2. 1. (厚) 4. 2.

右四組の聯合仕合に於ての優勝者に、賞牌を授與せらる。尚ほ以上數種の仕合の他に、二三の小ゲームはありたれども、紙數の都合上之を略す、諸君之を諒せよ。

評に曰く。吾人は、部員の大部分、野球ルールを詳にせざるを憾む。こは頗る不利益にして、双方のエラーを知り、又、計略上甚必要缺く可からざる事に

屬す。而して又、一般に、モーションの鈍なるが故に、機を失する事多きは、最も注意を要するところなり。抑も敏捷なる動作を練習するは、野球の目的の一也。次に自が巧者を以て任ずるは最も悲しむべきことにして、かゝる精神の存在する間は、決して技倆の進歩するものにあらず、慎むべき事なり。

抑も運動の目的は、健全なる精神を養成するに在り。各種の運動は、何れも、夫々特徴を有すれども、就中我野球術は最も高尚にして、此の目的によく適するものなり。然れども、世々々其真相を詳にせずして、徒にその樂を喋々するあり。蓋しこれ思慮淺薄の輩の言なれば敢て是に耳を傾くるの要なし。協同團結の精神を養ひ、快活健全なる精神を宿らしめむと欲する者、須くかの俗論を排して斯道に頼るべきのみ。(K、H、生)

○秋季野球部大會、明治四十一年十月三十一日、野球部大會は開かれぬ。その陣形左の如し。

紅軍	白軍
投手 村田 三介	林 孝一
捕手 岡 良之	山田 專一

き、見事一壘を奪ひ、村上君、右野手に、球を飛ばせて進みしが、柴田君、三壘に進む能はずして斃れぬ。立野君、左野手方面に、球を飛ばせ、村上君本壘に入りたれど、中村君三度振りに敗れ、三勇士は、各壘上の露と消えぬ。次に、紅軍は、岡君に續きて、金子君一壘に死し、村田君飛球を打つて、遊撃手に受けとめらる。第三回に於ては、白軍不成績紅軍黒瀬君、遠く左野手に球を飛ばせ、一舉に二壘を占領せしが、遂に歸ること能はざりき。第四回に於ては、白軍は漸く一人二壘を得しのみなりしが、紅軍は能く戦ひて、四點を得たり。第五回に於ては白軍冑の緒をしめなほし、激しく攻め立て、二點を得、紅軍は一點をも得る能はず。斯くて、兩軍必死となり、六回目には、共に生還者なく、第七回に於ては、白軍は三人のスタンディングを出し、紅軍は悉く一壘に斃れぬ。然れども、八九回に於て、白軍遂に回復すること能はずして、休戦となりぬ。

余、今日の劇戦の公評を聞くに、紅軍は白軍を敗りは敗りつれど、僅に二點プラスアルハのみ。その陣營の守者を見るに、紅軍には、數度大戦に勳功あ

遊撃手 金子 勘助	伊佐小二郎
第一壘守 佐々木四郎	村上
第二壘 落合 健	玉木 正之
第三壘 黒瀬 禎祿	中村 章
右野手 中村 誠	井上
中野手 永松 力	立野
左野手 松野 十一	柴田 龍藏

二時三十分の號鐘と共に、紅軍先づ壘に據り、白軍之れを攻撃す。立野君先づ遊撃手にゴロを送つて、第一壘を占領し、中村君續いて進みしが、山田君ゴロを投手に送り、立野君爲めに三壘に死し、玉木君の打球も、投手に捕へられて、中村君三壘に斃れ、伊佐君は、ゴロを三壘に送りて、自ら一壘に死し、二勇士をして空しく壘上に立たしめぬ。茲に於て、攻守地を轉じ、紅軍松野永松二君は、共に死球を受けて進みしが、永松君は二壘を奪はんとして、中道に斃され、續いて、中村君三度振りに死し、佐々木君、投手にゴロを送りて、一壘に死せり。第二回に於ては、林君投手に、ラインナーを打ちしが、惜しい哉、球に後れて壘に入りぬ。柴田君、三壘手をぬ

り、また、嘗つては、遠征の途に上りて、縣下の敵の心膽を寒からしめし老將軍あり。之に反して、白軍は、年少士官のみにて組織せられたり。而して、その働振を比すれば、紅軍は白軍に劣れること數等。噫腑甲斐なき老廢將軍どもかな。然れども、今や、此等の老將は漸く去り、我校庭は敗れたる少壯軍の振ふべき舞臺とはなりぬ。幸に我が野球部のため、益々努力せよ、少壯軍。(M、K、)

庭球部記事

○春季庭球大會、心も身も浮き立つ陽春の俤、未だ全く去りやらざる六月八日、午後二時半より、田中部長の審判のもとに、新設チャンピオンコートに於て庭球大會は舉行せられたり。當日は、唯十數組の勝敗を定めしのみにして、花々しき戦もなかりき。一日おきて十日、第二回の戦は開かれぬ。前日の微雨に塵埃たゞず、長閑なる空色も見えて、今日の戦況如何にとつどふ健兒にて、柳蔭漸く餘地を遺さずなりぬ。

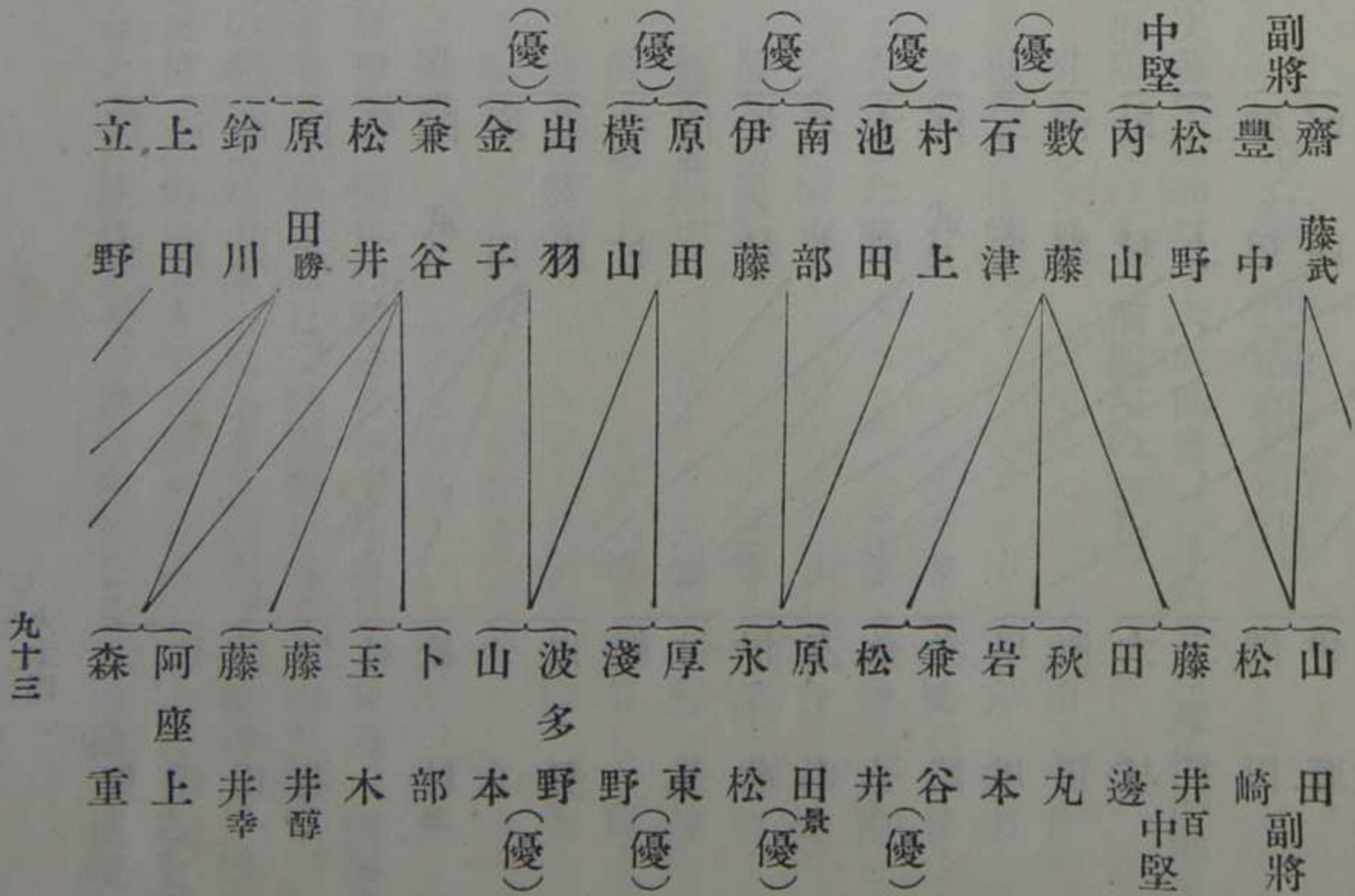
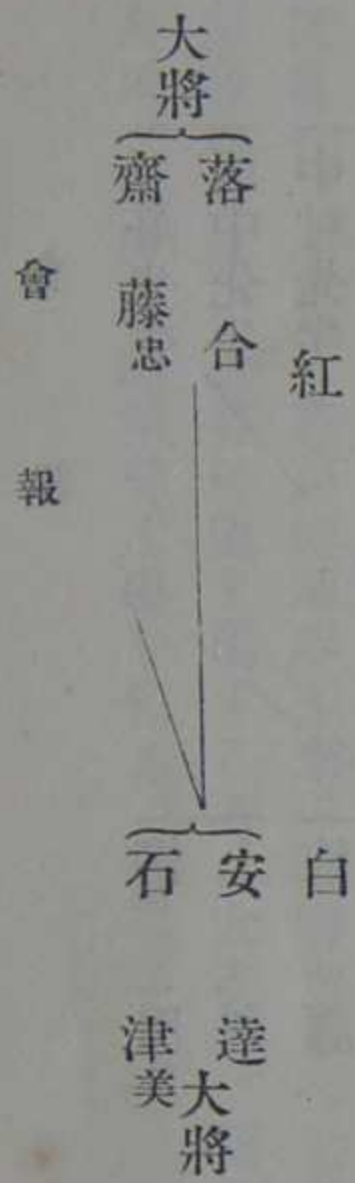
宣戰の宣告と共に、兩軍刻一刻と敵陣に迫り、打ち

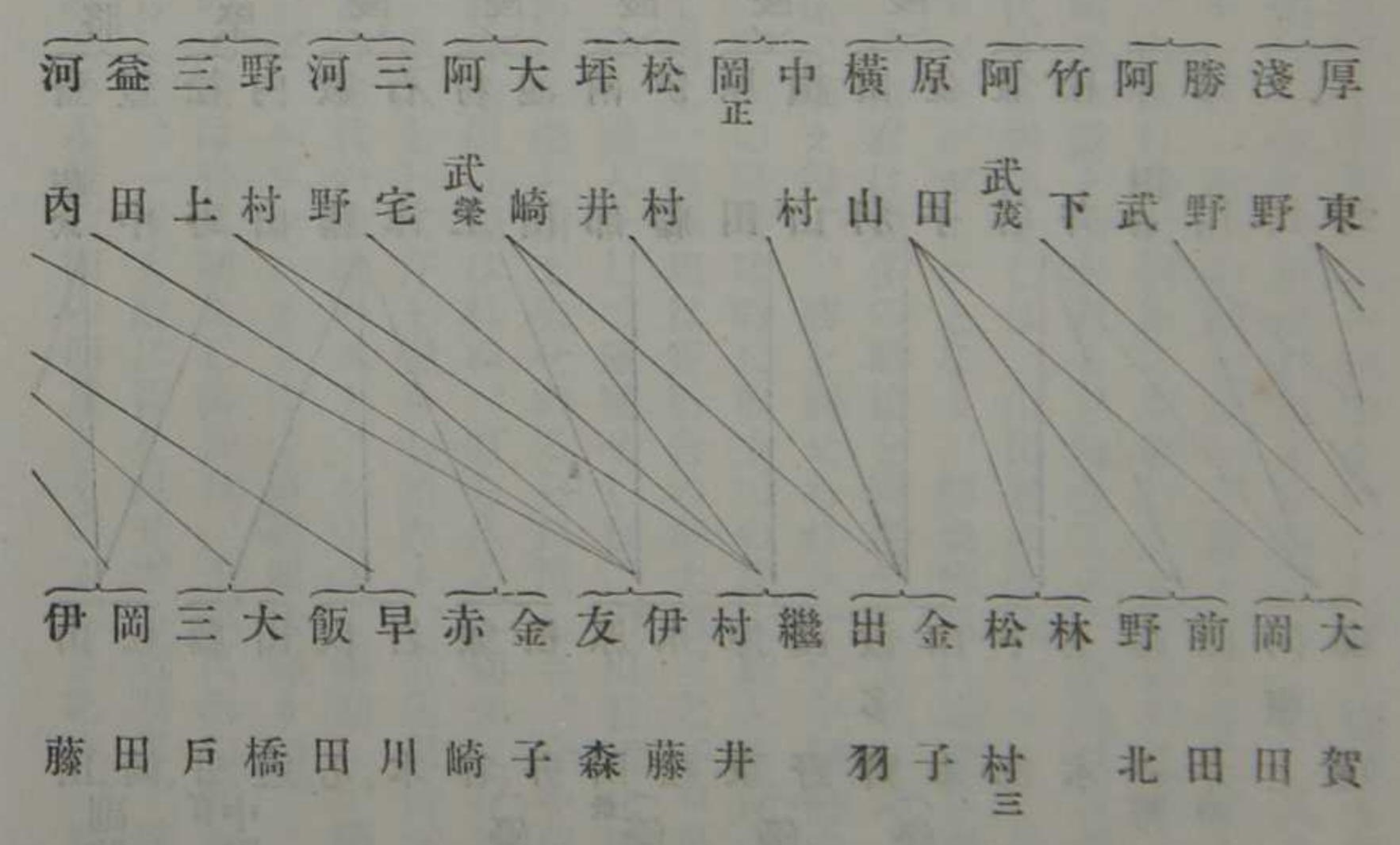
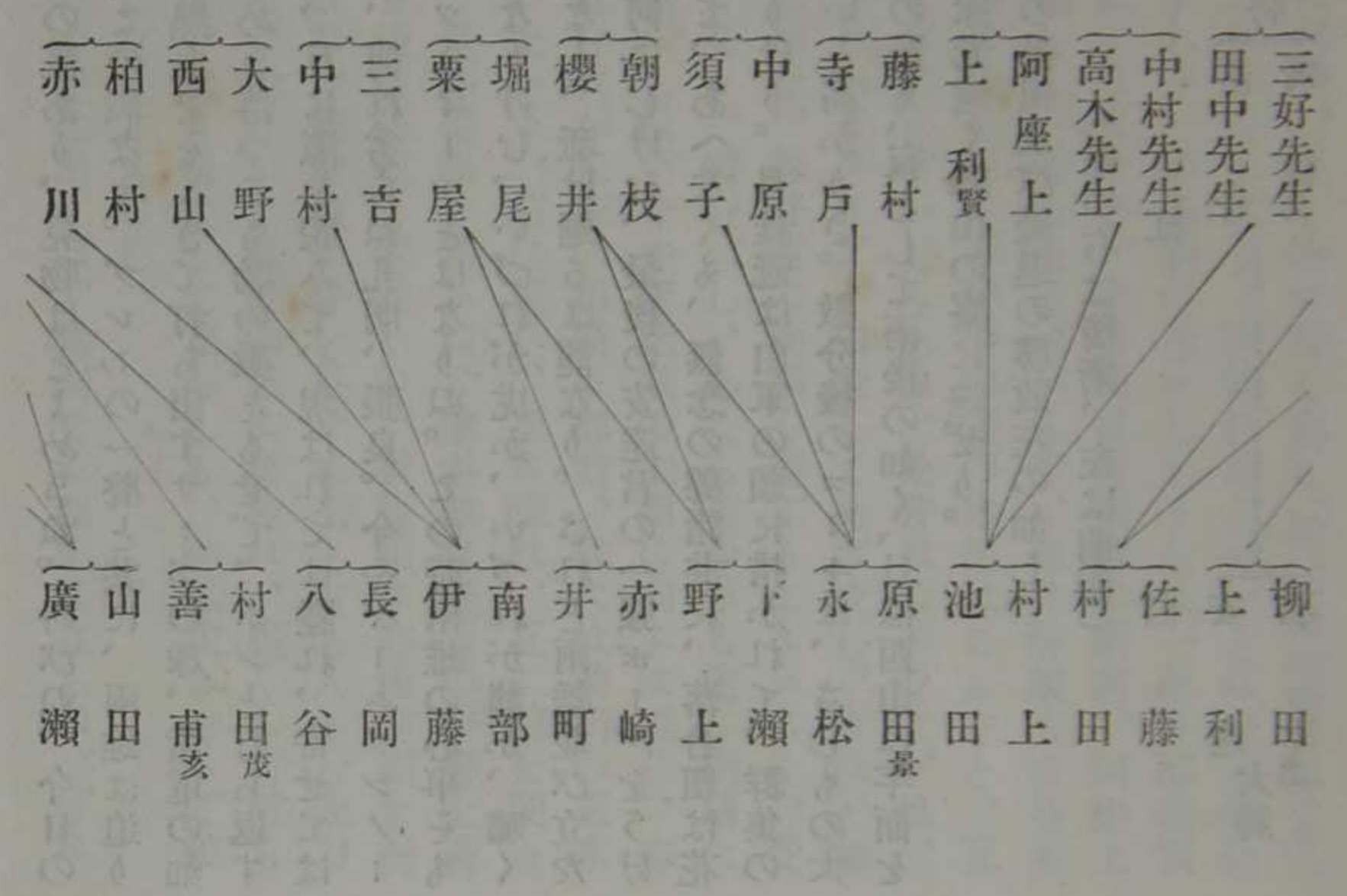
つ打たれつ、おし寄せ押し返し、戦は漸次酣となり、入りかはりたち代り、天晴れ功名せむとはやる健兒の勇ましき。殊に戦の花々しかりしは、藤井醇組對兼谷組よりなりき。兼谷組は寄宿舎の副將、阿坐上組を斃して、勢あたるべからず、藤井醇組もさるもの、胸に染め出すHMSの字の本領はこゝどと、互にまけず劣らずいどみあひ、松井君のドライブは、藤井幸君のドライブと相對してめざまし。されど如何にしけむ、藤井組の腕漸く鈍ぶりてミス多く、受太刀となり、憐むべし、あたら美少年も遂に戦場に屍を晒らしぬ。今や奮然敵の矢面に向ふは誰!!、春秋尙富む我が未來の勇將卜部君、殊には前衛の玉木君、一上一下、右に現れ、左に隠れ、互に鎬を削りしが、是亦覆轍を踏みぬ。兼谷組は優退の榮譽を荷ひ下り後數藤組と對陣しぬ。數藤組は亦後進弱を握るべき器、何ぞ敵に脊を見せんやと打ち入る、太刀先鋭く、敵は早や數度の戦に體疲れ、脆くも打破られたり、秋丸組代りて立ちしも、神風吹きやらで破れにしぞ是非もなし。

藤井百組はHMS連の剛のもの、しげく強球もて、敵を惱し、殊に、田邊君の東奔西走して打ち入るスマッシング、數度の功を奏し、敵をして失色せしめしも、あはれ時に利あらず驛行かず、あたら勇士も遂に戦場の露と消えぬるぞ無念なる。數藤組は優退し、代りて對陣せしは、山田君の鐵砲ボールと松野君のロビングボールとなり、勝負容易に定まらざりしが、山田君は幾多の戦場を経過せししれもの、松野も遂に堪え得て、勝を制せられき。今や副將の戦なり。群集の叫聲は時に取りての櫓太鼓とも聞きなされて勇し。齋藤組は寄宿舎の御大將、之亦HMS連、一舉一動人をして感嘆せしむ。山田君時に振はず、あだし櫻と消え失せぬるぞ口惜しき。今や白軍の大將安達組は現はれぬ、打ち入る、切先はげしく一進一退人をして汗を握らしめたり、安達君のドライブと石津君の手練のストップとよく奏功し、憐むべし、ゲームワンスリーにて齋藤組は降りぬ。紅軍の大將は音に聞えし落合君、千軍萬馬の間を踏み荒らして、一度も敵に背を見せざる老將軍、殊には齋藤君の本校前衛の明星ともいふべきあり、意氣

衝天の概あり、見物はどよめきぬ。叫びぬ。今日の花はこの戦なり。プレーの一聲と共に、兩雄は迫りぬ、熱血をそそぎて打ち出すサーブの球、紫電の如く閃めき落つるも物の數ともせて、ボンと打ち返す手腕、互に隙を睨みて、現はれては隠れ、寄せては開き、何れ劣らぬ孔明、張良。今やゲームワンスリー、ツウオールとはなりぬ。この時兩雄の心事も如何なりけむ、いづれが虎か、いづれが龍か、嘯くは虎なり、駈け廻るは龍なり。されど兩雄並び立たず如何にしけむ、最後の安達君の一強ボールをうけ損じて、あへなくも、無念の聲諸共に、落合組は花と散りけり。月桂冠は白軍の頭に措かれて、群集の歎呼いと高かりき。數分後のコートは、さしもの大戦場の趾も、寂として雨後の如く、日は西山に半面を没し餘光遠く韓山の峯に映ぜり。

(組の右は後衛、左は前衛)





文藝辯論部記事

○文藝辯論部第十六回例会、二月六日放課後開催す。
登壇辯士及びその演題左の如し。

- 男らしき男 片山 平作
 - 専心事に當れ 松井 隆美
 - 交友 三等 大橋 卍
 - 人生の大觀 二等 廣兼 來藏
 - 急進と慎重 落合 健
 - 海外殖民論 三等 野北 重利
 - 社會と學校 三等 伊藤 義雄
 - 置土産 二等 古谷 實
 - 萩地の將來 香積 元清
 - 成功 堀 正一
 - 遺言 桑原 雅亮
- 上原部長の開會の辭終るや、片山君の登壇、無事に演了せり。松井君は、燒點物を燒くの例を挙げ、成功の秘訣は精力集中にありと説き、大橋君は、所謂親友は、順境にありて、樂を共にして、悲は之を避けむとす。然れども、眞の親友なるものは、逆境に

金子 松尾
波多野 山本

今や方に運動のシーズンは來りぬ。我萩中四百の健兒よ、この活動の時機を徒消して、書齋の虫と化する勿れ。Study hard while at study, play cheerfully while at play. は先哲訓戒なり。卿等が、他日社會に立ちて、大活動をなすべき要素たる、大膽小心忍耐敏捷正直は、我がテニスに依りて養ひ得て餘あり。余輩は皮を噛みて其の澁さに蟹殻せし栗鼠を學ぶ或る人及び諸子多きを嘆ずる也。枝葉繁き大樹も、一幹なり。劍道、柔道、野球、庭球、短艇と枝葉は多けれど、幹は即ち一なり。庭球、野球のみを云々するは未だ達觀せざるものなり。請ふ來れコートは卿等を待つこと久し。

終りに尙一言せん。數藤、石津、卜部の諸君は尙春秋に富む、而して我が庭球界未來の驍將たるべし。我が庭球部は、諸君に望を屬すること大なり。諸君の大に、斯界に雄飛せん事を乞ふ。(M、A、生)

ありてこそ現われるれと、雄辯を振り、廣兼君は、大乘と小乗との教義を説きて、着眼點の異なるが故に、或は悲觀し或は快觀すと説き、落合君、常にいそぐべし、然れども苛立つなかれと、達辯縦横に吐鳴りしが、折々會話の口調に變じ、輕々しく聞えしは遺憾なりき。野北君は、狭小なる地に於て、大活動はなす能はず、故に吾人は宜しく海外に航して、世界の富を持ち歸り、我が國を、世界の寶庫となさざるべからずと、最も熱心に説きたり。伊藤君は、家庭は愛の充滿せる第一の社會なり。學校は慈悲の發達せる第二の社會なり。第三の社會は、風波劇しき無情の社會なり。今第二の社會にある吾人は、能く覺悟して、第三の社會に出て、劇浪疾風と戦ふべき準備をなすべき時なりと、雄辯を以て靜に説けり。古谷君は、大聲を發し、熱心に、現世は一旅館なり。故にその宿泊料たる活動を拂はざるべからず。若し、之をなさざるものは、法律の違犯者として、後人より罪せらるべしと説き、香積君は、萩町の繁榮策としては、産業を起すの外なし。機業可なり、染業可なり、養蠶も亦有望なりと辯じ、堀君は、毎時ながら

落ちつき拂つて、古往今來の英傑と呼べる人は、多く不遇の身なり。されど、彼等は萬世に活けり。是、眞の成功なり。美人を得、富を得、地位を得、是必ずしも成功にあらずと、得意の辯を振り、桑原君は、孜孜として毎日勞作するも、歸する所は老と死とのみ、その来るや電光石火の如し。穢れたる世に齷齪として、不快の夢を貪らんよりは、華の天國に至りて、永遠に活さん。華嚴遠からず、淺間亦近しなど、頗る小氣味の悪き事を述べたりしが、得意の滑稽、口を衝いて出て、中々愛嬌なりき。演説既に盡きて、來會者に、茶菓を供す。時に、岩田先生より、會衆に注意あり、曰く、演説と云へば、必ず辯士あり、聽者あり。辯者は、我が思想を、聽者の頭に刻まんとす。話中に美點多き時は、聽者の印象も亦深し。辯士は、宜しく此の點に留意すべしと。
(M、K、生)

秋季陸上大運動會

第九回紀念式終ると同時に、運動會は、例に依りて開かれぬ。さしものに廣き會場も、四周に人山を築き、

殆ど立錐の地を餘さず、頗る盛況を極め、有志の寄贈にかゝる烟花は、時々空中に爆發して、景氣を助けたり。午後五時過閉會、例の如く、萩中學校萬歳を三唱して解散せり。當日競技中の最壯觀なりし者を擧ぐれば、左の如し。

特別障害物競走

- 一等 五、一 増野 雅一 二等 五、二 村田 三介
- 三等 五、二 中西 作介 四等 三、二 栗田 正七

早駆一千米突

- 一等 五、二 武安 明 二等 五、二 大谷 祇詮
- 二等 二、二 藤田 欽一(同)三等 五、二 大田 良吉

竹馬障害物競走

- 一等 三、一 佐藤 政之 二等 五、二 増野 雅一
- 三等 四、一 田中 敬三

各級撰手競走學年

- 一等 二、二 中村 章 二等 一、一 林 武雄
- 三等 一、二 佐伯 正輔 四等 二、二 藤田 欽一
- 同三四五學年
- 一等 三、一 飯尾 三郎 二等 五、一 桑原 雅亮
- 三等 四、一 上利 賢介 四等 五、一 吉澤正太郎

五月十五日、本會各部長委員の改選あり、結果左の如し。

本會各部長委員の改選

- 會長 村上 俊江 副會長 平川 仙吉
- 劍道部長 中島 豐之
- 委員 津田 等 野北 重利 玉木 正之
- 田中 貢 中原 吉雄
- 柔道部長 未定
- 委員 桑原 義輔 山田 專一 前田 孝男
- 林 孝一 栗田 正七 佐々木四郎
- 庭球部長 田中 市郎
- 委員 石津 美矯 安達 茂作 藤村 良作
- 松野 順甫 阿座上久義 秋丸 哲夫
- 卜部 豊 原田 勝次 鈴川 清
- 松浦 時行 三宅 十六
- 野球部長 三好 筆太

委員 林 孝一 佐々木四郎 松村 三郎
 大野 暢夫 伊佐小次郎 村上 正文
 横山 正介 八谷 榮二 岡村 禎祐
 石津 渚 後藤 和夫

ボート水泳部長 清部 壯六
 委員 田中 貢 戸田 剛三 藤原 政一
 栗栖 靜 陶村 政一 渡邊 梅吉
 増野 雅治 金子 潤介 松村 秀之
 下瀬 一郎 松浦 時行 三好 市郎

文藝辯論部長 藤井 百輔
 委員 植村 九一 田中 貢 福田敬二郎
 戸田 剛三 平佐 幹 落合 健
 藤原 政一 藤井 隆美 廣兼 來藏
 栗栖 靜 渡邊 梅吉 長宗 純
 増野 雅治 口羽 忠介 川崎松之助
 下瀬 一郎 山田 健三 後藤 和夫

各地雁信

第三高等學校 堀 正一
 ○柳絲、風に梳らるる、池畔に、涼風を慕ひ、綠葉茂

き路旁、噴泉に、渴を醫したる盛夏も漸く去り、庭前の梧葉秋を報ずる候と相成り候處、親しき會友諸兄には愈々御勇健御勉強の段、慶賀の至りに御座候。偕て、今日、校友會雜誌第八號御發刊に付き、數ならぬ小生に迄、何か投稿せよとの仰、難有拜承仕候、然れども、御承知の通り、天性、文に拙き小生のいかてか、諸兄の御満足を得べきものを作り得んや。去りとして、折角御仰默し難く、杜撰ながら、此の一篇御覽に入る、事と致し候、文の拙劣を咎めず、幸に御一讀を蒙らば本懐に御座候。神陵の西麓、加茂川の東岸に亘り、白線三條、櫻花の徽章を輝すは、これぞ三高七百の健兒にて候よ。山口縣出身のもの四十有餘名、其中にて岩國出身の人殊に多く、我が母校よりは、僅か一部三年甲に三浦唯一君と、二年甲に藤井寛君と小生との三名あるのみにて、甚だ寂寞を感じ申候。然れども、山口縣人會なるもの、組織有之、毎學期の初、一回、必ずミーチングを催し、互に、親睦をはかり、知徳の練磨に資し居申候。是より、本校一般の状況を、部類に劃して申し上げべく候。そもそも、本校は、明治二十七年、勅令第七

十五號、高等學校令第二號に依り、大學豫科として、一部二部三部と分類し、其の豫科生を養成する目的を以て設立せられしものに候。

- 一部には 甲類(英法、政治、商科、英文、經財)
- 乙類(史學、哲學、國學)
- 丙類(獨法、政治、獨文)
- 二部 甲類(建築、機械、電氣、造船等)
- 乙類(理科、農科、醫科、藥學)
- 三部 (醫科)

の如く、各部又色々に分類せられ候、去りとして、本校時代にては、同一類中にては、異りたる事を教授さるゝにあらず、只大學に進みてより、各専門科を修むる事に候。然れども、各類は大に異り、例へば、一部中にては、甲類と丙類とは、各、其の授業時間を異にし、甲の英語九時間に對し、丙は四時間にて、其の代り、丙の獨逸語十四時間に比し、甲は僅か九時間にて、外國教師の出勤にも各相異あり申候。此等の分類及び修學科は、別紙本校規則書を、御校閱覽室に寄送致し置くべく候間、御希望の諸兄には、御一覽なしくだされ度候。依て、小生は、これのみに

止めおき、次に、小生入學以來の情況並に岳水會及び本校寄宿舎の概況御紹介可申上候。數年來、腕を練り刀を磨き、戦闘準備に忙しかりける滿天下一千五百の健兒が、七月中旬、神陵の激戦に於て、或は破れ、或は斃れ、目出度、其の堅壘を抜きし二百五十の殊勳者が、入學宣誓式に列するため、本校の門に向ひしは去にし九月十一日にて候ひき。入學宣誓式とは、一同講堂に集り、各自、御親署の勅語を拜觀し、新入生總代の宣誓文朗讀あり、終りに、一人づゝ、校長の前に出て、宣誓簿に、姓名を自署いたす事に候。授業は、翌日十二日より始まり申し候が、初日は、中學校に於けると同じく教授せられず、諸先生が、以後教授上の注意を述べられたるのみにて、實際の教授は、十三日より行はれ候。過去五年間、同じ學びの庭にありて、互に助け助けられし諸君と離れて、見知らぬ新しき學生と、學びの庭を共にせし時は、随分變な感致し申候。授業は、毎日八時より二時乃至三時までにて、其の五時間及び六時間の内、獨逸語三時間、英語一時間、都合四時間の外國語あり、殊に、獨逸語なるものは、小生等獨法科生

(丙類)の生命とも申すべき學科にて、随分瘳猛につめ込まれ、中々多忙に御座候。岳水會とは校友會とも言ふべきものにて、柔道部、劍道部、水上部、庭球部、野球部、弓術部、雜誌部、講談部に分たれ、各々一名づゝの部長及び理事置かれ、部長は教員之に當り、理事は各部の互撰により決定致し、任期は滿一ヶ年に候。各部の事務は、専ら理事の掌る所にて、部長は只名義のみに候。柔道部、小生、元來、斯道を好む方なれば、入學後、直ちに、道場に出てしに、道場はさほど廣くは之なく、丁度萩中の半分位に候へども、さすがは日本武徳會の本場たる所なれば、従つて、天下の名士集り炎熱焼くが如き日と雖も冷氣肌を刺す時と雖も、健兒の美風を維持致し居り候。而して、秋夏二季に大會開かれ、勝者には、メダルを與ふる事御校と同じ候。又四高、六高等の對校仕合も行はれ、いつも、我が校の勝利とは目出度き事に御座候。三段一人、二段一人、初段三人、劍道部も、柔道部と同じく、中々、盛なる様子に御座候。岳水會諸部中、最も興味あり且つ盛に行はるゝは水上部にて、毎日曜、數十人の健兒は、三里の

悪路を事ともせず、琵琶湖上に、ボートを物する事に候。小生も再三行き候が、實に實に愉快に候。波靜なる湖上に、比叡おろしに吹かれつゝ、遠く雲表に聳ゆる伊吹山を仰ぎ、近く紫霧たなびく比良山の一角を望み、三井、粟津、唐崎の勝景を右にながめ、石山に向ひ漕ぎ候。其の湖上の風景、筆にも、口にも及ばず候。只諸兄の御推察を希ふのみに候。斯くの如く湖上の風景美なるを以て、本校生徒は、唯運動のみにあらず、連日の鬱を散ぜんがために行くも多數之ある由聞き及び候。毎年四月、大競漕會催さるゝ由。また炎熱燃ゆるが如き夏の日も、寒氣烈しき冬の日も校庭は、空に響きて熱球飛び、建兒躍るの活劇を演じ候、これ實に我が野球庭球の練習に候。其の他雜誌部、弓術部も大に隆盛なる由なれど、小生未だ其の内容を存せず候。本校の寄宿舎は、北舎南舎中舎の三舎有之申候。目下百五十餘の舎生寄宿仕居候。小生も、初め一ヶ月許入舎仕り候が、少し考ふる所有之候で退舎仕り候が、中々面白く、殊に小生の如き團隊生活の經驗なきものには、非常に愉快を感じ候。朝五時半の起床にて、六時朝食、夕

食は五時にて、門限は九時に候。中學時代の如き嚴格なる事少しも無之、勉強するものはせよ、遊ぶものは遊べと言ふ風にて、全くの放任主義に候。夜中のストームなどは中々盛なるものに御座候。猶色々とし上度事御座候へども、前申し上げし如く、思ふ通に筆も回らず、又此の節は、獨逸語に苦められ居り候へば多忙に付き之にて失禮仕候。最後に諸兄の御健康を祈り申候。頓首

東京高等工業學校 田原 四郎

今般、貴誌に、我が東高工の模様を載するの好機に接したるを喜び、併せてその光榮を謝します。農は國の基てふ言も、いつの間にか過去となり、將來の富國策は、一に商工に倚らざるべからざること、識者の一般に認むる所、而して、四億の需要者を對岸に扣ふる我が日東帝國の將來の工業の如何に有望なるかは、火を睹るよりも明なる事、敢て我々の喋々を要しません。

然らば、此の如く洋々として多望なる將來を有する工業家たらんとする徑路如何、大體、實地方面よりすると、學理方面よりすると、その兩者を兼ねるも

のとの三方面があります。而して、我が高等工業學校は實にその最後の部に屬するもので、いくら實地だと云つても、學理の伴はざる實地は、要するに無駄が多い。亦一生命、學理から割り出して、例へば、機械を設計しても、鑄物を造つても、仲々机上の理論ばかりではいかぬことがある。此に於て、學理實地兩者を兼ねると云ふことは頗る工業家としては、緊要な事實にして、而して、實に之が本校の標榜とする所であります。元より三年の短日月、到底工業界の堅城を陥落せることは不可能で、要するに、此の間は糧道を絶ち、水源を切る位に過ぎぬ準備時代ののみ。故に、此の時代を一旦經過すれば、イヨ／＼開戦！益眞摯に、周到に、充分難攻不落の未發明城を攻めて攻めて攻め抜くの決心は豫め必要であります。

本校は染織科(色染分科 38%)と機械分科 11.0%に分れる、窯業科 5.0% 應用化學科 11.0% 機械科 27.0% 電氣科(電氣機械分科 23.6%)と電氣化學分科 3.0%とに分る、工業圖案科 4.7% 建築科 11.0%に分れて居ます。各科の下にある數字は、それ等

の全校生徒に對する百分比であります。これは本科生にして、此の外に工業教員養成所なるものがあつて、之は各科に分屬し、大概、本科と行動を一にして居ます。但し、此は修業期が少し長く且つ學費補助の恩典があります。

卒業後の景況如何、換言すれば賣口如何と云ふに、前述の如くまだ發達の餘裕綽々たる工業界は、本年の如き不景氣の年でも、續々需要はあるので、殊に機械科電氣科の如きは、その需めに應じられぬと云ふ有様の由に屢々聞かされました。

學校の修業年限は三年でも、授業時間は毎日午前八時から午後四時まで、時間は正確に出席すべく常に獎勵されます、これ皆將來の大準備の爲めのみと思へば、時間が小少長いとて不平は云へぬのであります。

實修は、始めは、一寸奇異に思はれ、工場服なんか着て立ち働く姿などは、まだ徽章が光り、ツボンの折り目正しき入學當初の熱の高いときには、あまりいい氣持はしないのです。が然し、少し達觀して來ると、決していやてはない。實技は工業家としての

成功の要素なるを思へば、服は油だらけの汚い丈それ丈眞價があると云ふ大眞理が發見されます。こうなつて來て、始めて一人前の藏前健兒と云ふべきか。嘗てこの藏前健兒の資格を供へた服で我々の撮影したものがあつた。某入學者は、之を見て、忽ち志望を變更したとか、此の如き輩は到底工業家たるの資格なきは勿論であります。

さて志望確實なる入學志願者は、頭腦明晰なるべきは申迄もなく、特に注意すべき要件は躰格でありませぬ、僅か三年と云ふても、學校に居る時間は随分長く、おまけに、黄塵萬丈の東京の中の、然も石炭の粉飛び、瓦斯の臭高き工場に出入しなくてはならぬ故に、躰格に就ては充分自覺がなくてはなりません。入學試験は五月で、無試験入學の特典は、四月から、準備を要します。昨年の入學者の總應募者に對する百分比は100%なりしも、然し、科に依りては、大にその値を異にして、有試験の方では、機械の100%電氣の75%が最も猛烈なる競争なりし由、亦科の異なるに従つて、内容を異にするは勿論で、大體二分して、機械系：機械、機械、電機、建築

化學系：色染、窯業、應化、電化、圖案となすこと

とが出来ます。即ち前者は數學的、物理的、後者は、化學的、換言すれば、前者は理屈家、後者は暗記に長けたるものを要求する、この撰擇に就ては、志願者は大に慎重の態度を取る必要があると思ひます。大體の學校の紹介は之で措いて、委細は規則書御一覽を願ひます。規則書は郵券封入で、學校へ申込めば詳細なるものを送附します。

本年は山根君(電機)津守君村田君(機械)がうまくやられたので、萩勢も大に元氣付きました。向後は、一層、多數の諸君が入學せられんことを希ひます。終に臨んで諸君の健康を祈ります。

明治四十一年度校友會費

收支決算報告

收入の部

- 一金四百拾參圓 生徒會費
- 一金百〇八圓七拾四錢 職員會費
- 一金五拾四圓拾貳錢 雜收入

會報

一金八拾七錢五厘

前年度繰越

合計金五百七拾六圓七拾參錢五厘

支出の部

- 一金七拾八圓四拾九錢五厘 劍道部
- 一金七拾四圓四拾五錢 柔道部
- 一金九拾四圓參拾六錢 文藝部
- 一金五拾八圓八拾五錢 球術部
- 一金貳拾圓〇參錢五厘 短艇部
- 一金八拾貳圓拾六錢 運動會費
- 一金五拾九圓四拾八錢五厘 諸雜費
- 一金貳拾九圓六拾錢 賞牌費
- 一金參拾壹圓〇九錢 臨時費
- 合計金五百貳拾八圓五拾貳錢五厘
- 差引殘金四拾八圓貳拾壹錢 次年度繰越

寄贈書目

本會は、左記雜誌書籍の惠贈を辱ふせり。謹みて之を謝す。

- 慶應義塾學報 每號 慶應義塾
- 校友會雜誌皇太子殿下行啓紀念號 德山中學校

校友會雜誌	第八號	岩國中學
校友會雜誌	第六號	山口師範學校
校友會雜誌	第十八號	東京高等師範學校々友會
石田城	第四號	五島中學校々友會
會報		北米合衆國シヤトル山口縣人會
知道月報	每號	水戸中學校知道會
躬行會叢誌	每號	躬行會
同裳會通報	每號	同裳會
多々良	第五號	曹洞宗第四中學林
球陽	第十八號	澠繩中學
校友會雜誌	第三十二號	濱松中學
校友會雜誌	第二十一號	中津中學
滿洲之青年	第五號第六號	大連商業學校々友會
白鷺	第十八號	八代中學
時習	第參參號第參四號	私立徳山女學校
富岳誌	二部	曾田文甫氏
安田善次郎翁	一部	金森通倫氏
大和魂	第一號	軍事教育會



第九回開校紀念式

時は明治戊申十月十八日、指月山下なる我が校運動場の中央に、中空高く、一旒の大國旗は、翻々として朝暎に輝き、數發の煙花は、高く打ち揚げられぬ。是今日は、我が校設立第九週年の紀念日なればなり。午前九時の號鐘と共に、四百の同胞、先づ紅紫の菊花と、赤き燭南天と活けたる大瓶の傍に、校旗の嚴然と立てる講堂に集ひ、續いて職員一同、次に、校長に案内せられて入場せし來賓は、豫備陸軍少將粟屋幹氏、前大阪控訴院檢事長林誠一氏を始めとし、地方の紳士約三十名なり。一同着席するや、校長は、學式の辭に續ぎ、徐に本校の沿革、及び經歷を述べ、生徒に向つて、種々訓戒の辭を述べられたる末に、維新以來、我が萩地は、偉人傑士輩出し、今猶國務に盡瘁し有り、諸子は、その後繼者なり。必ず、此の先輩以上の働きをなさむことを期して、日夜努力

せざるべからずと説き、次いで、粟屋少將は、胸間の勳章さらびやかに、威風凜々として、佩劍の音嚴に登壇し、最も嚴格なる語調にて、現時の元老諸氏は、殆ど我が長州藩士なり。諸子はその後繼者なり。必ず、中絶せざらんことを望む。扱て、又、甲冑に、弓矢を持ち、大小を腰にせし頃は兎に角、今は、腕力のみにては、戦には勝つべからず。否戦争のみならず、何事をなすにも、大に腦力を要するなり。此の故に、普通學を修むることは、先づ第一に必要なり。諸子よ、中學は普通學を受くるの終なるが故に、大に努力せよ。又、我が萩地は、維新前よりの宿弊猶存するものあり。斯くては、社交上に、進歩上に、大不利を招くべし。諸子は、又、之を改良せむことに努めざるべからずと懇々と諭され。席に就かるゝや、校長より、式の終を報せられ、一同降堂、直に、開催すべき校友會秋季陸上大運動會に着手し、來賓一同を、設けの席に導きぬ。(M, K,)

戊申詔書奉讀式

十一月三日、天長節拜賀式を機として、去十三日換

發せられたる詔書奉讀式を行はれたり。當日、例に依り、教育勅語奉讀、御聖影奉拜等の式終り、校長先づ詔書を奉讀し、大意を説明し、奉戴心得につき講話せらるゝ所ありたり。(M, K, 生)

松陰先生五十年祭

十一月二十一日、松陰神社にて、松陰先生五十年祭典執行せらる。吾校は、校長始め職員生徒一同、午前九時より、同社に參拜し、校長は、祭文を朗讀し、幣帛を捧げらる。是より先、「松陰先生は實に天下の偉人にして、萬人の齊しく瞻仰する所なり。幸に、此郷に在るものは、先生の薫化を蒙ること殊に深からざるべからず。深く、先生の薫化を受けむとするには、先生の事蹟を知らざるべからず。今や、五十年祭執行の好機に會し、先生を追懷するの念、平生に異なる者あれば、是時に於て、先生事蹟の大略を知らしめ置かむ。」との意を以て、校長は、安藤紀一先生に托し、去七日十四日の兩日を以て、數時間に涉り、先生の事蹟を講話せしめられ、講話の筆記は講演欄に收む。又河野厚造先生は、松陰先生遊跡

地圖を作り、講演を補はれ、講演終るや、校長は、「先生の至誠剛毅なり。至誠剛毅の精神は國家擁護の大本なり。吾輩は、先生に倣ひ、至誠剛毅の精神を養ひ、以て萬事に當ることを務めざるべからず。」と、一場の訓話を試みられ、又十五日には、第五第一兩學年の諸君は、日曜の休業を利用し、新築社殿の拭掃及境内の掃除をなし、祭典準備の事務を補助せられたり。(F、H、生)

第九回卒業證書授與式

三月二十三日午前九時より、講堂に於て、第九回卒業證書授與式を舉行せらる。陸軍少將粟屋幹、瀧口吉郎以下の來賓諸氏着席の後、校長は、先づ、卒業生に關する報告をなし、證書を授與し、訓誡の辭を述べられ、終りて、首席早川富正君、卒業生總代として、答辭を朗讀せられたり。(卒業生諸君の姓名は、卒業生一覽中に掲ぐ。)右にて式を終り、引續きて、褒賞授與式を行はる。褒賞の種類並に受賞諸氏の姓名は左の如し。

特別賞(銀時計壹個)

本縣々立學校褒賞規定の定むる所に據り、縣知事の授與せらるる者にして、次の條件に該當する者。入學以來、卒業に至る迄、三席を下らざる者。 伍長勤績。 精勤。 操行甲。 成績甲。 卒業成績第二席 堀 正一

壹等賞(書籍)
次の條件に合する者。 各學年の第五席以上。 伍長勤績。 精勤。 操行甲。 成績甲。

受領者
○四學年 中原吉雄 ○三學年 廣兼來藏
大谷雄介 波佐間 久 ○二學年 長宗 純一 渡邊梅吉

貳等賞(書籍)
1) 次の條件に該當する者。 各學年の第五席以上。 精勤。 操行甲。 成績甲。

受領者
○四學年 相島啓祐 田村孝亮
2) 次の條件に該當する者。 伍長勤績。 精

勤。 操行甲。 成績甲。

受領者

○五學年 神田直光 ○四學年 戸田剛三
○三學年 栗栖 靜 藤原政一 ○二學年 堀 政一 大津正一 村田四方介

3) 次の條件に該當する者。 伍長勤績。 精勤。 操行甲。

受領者

○四學年 山田耕作 玉木正之
4) 次の條件に該當する者。 伍長勤績。 操行甲。 成績甲。

受領者

○五學年 早川富正 中村 誠 長井要藏
齋藤武夫 ○四學年 田中 貢 平佐 幹
伊藤孝任 植村九一 ○三學年 飯尾三郎
藤村良作 ○二學年 平島公平 波根彌六
伊佐小二郎 木村榮太郎

5) 次の條件に該當する者。 伍長勤績。 操行甲。

受領者

本校記事

○五學年 安藤芳彦 伊藤義雄 増野雅一
○四學年 石津美矯 安達茂作

6) 次の條件に該當する者。 伍長勤績。 成績甲。
受領者
○三學年 原田正三 松井隆美 兼谷善二
○二學年 原 禎造 伊藤義彦 竹重英治
○一學年 増野雅治 椿 武忠 松村秀之
村田義嗣 河崎松之助 大崎箕市 口羽忠介 多田俊雄 堀 勘市

精勤賞狀

1) 次の條件に該當する者。 精勤。 成績甲。

操行甲。

受領者

○四學年 田中敬藏 梅田吉郎 ○三學年 西山彦一 矢田 篤 末成 茂 山本直正
江原 茂 津田 等 ○二學年 秋本一郎
有倉 誠 高橋保勝 柿並修三

2) 次の條件に該當する者。 精勤。 操行甲。

受領者

○五學年 大田良吉 宇野四郎 吉澤正太郎 永松 力 松野十一 山本傳一 中西作介 ○四學年 村井 勝 榎本勝虎 ○三學年 大野暢夫 ○二學年 坪井三介 下村福次

(3) 次の條件に該當する者。 精勤。 成績甲。 受領者

○五學年 西村武光 ○三學年 齋藤二郎 原田正三 塚本清一 松井隆美 ○二學年 生駒林一 佐伯繩四郎 村上實造 秋丸哲夫 大賀保雄 ○一學年 馬場健一 松尾 潔 有近彌榮 鈴木 清 上岡讓起雄 河野壯介 椿 武忠 上山城守 柴田壽一 笠井秀正 浮里宜也 三輪邦廣 卜部 豊 上利祥介 大田元輔 平山 茂 石川長介 柳屋良輔

(4) 次の條件に該當する者。 精勤。 受領者

○五學年 佐々木四郎 香積元清 岡 良之 ○四學年 柳井政亮 上利賢介 蘭

修學旅行

五月十九日、四五兩學年級は、藤原、安藤(秋)田中、高木、講部、中島諸先生統率の下に、兩隊に分れて、修學旅行の途に上り、又三二一各學年は、二十二日を以て、一日行軍を、大井村になせり。詳細の狀況は、左の各紀行文に盡せり。

●第五學年修學旅行の記

五月十九日 (水) 晴

午前四時三十分、金谷天満宮前に集合す。校長より一場の訓戒あり。其より直に出發、時方に五時十五分。夜は既に明け渡る。冬服の上着に、夏のツボン、草鞋脚絆に身を固め、勇氣凛々として行進す。鶯谷燈より見反れば指月山は未だ睡より覺めず。我々の講堂は朝露の中に、ほの見えて、我等を送るもの、如し。鶴鳴遠近に聞え、玉露朝風に散り、爽快言ふべからず。一升谷に、汗を拭へば、やがて櫻の茶屋なり。暫く息をつぐ。仰げば嶺あり。俯すれば溪あり。春の柳も残り少くして、綠樹陰深く、空を蔽ひし薄雲も消え失せて、暑さ漸く身に加る頃、佐々並に着く。時に九時半喫飯休憩すると半時間にして出發。日益々暑く、流汗愈々繁し。一ノ阪に着く。上りは短かけれども、下りは里餘の九十九曲なり。足に任せてひた下りに下る。下り盡せば山口町なり。麓に於て列を調べて町に入り、直に龜山に上る。時方に二時なり。模製砲臺の工事未だ成らずして、其内部は見る能はざりしも、旅順

好應 横田秀一 三好敬一 枝村匡輔 藤井百合松 ○三學年 伊藤道顯 三浦敬造 松原慶市 山崎秀輔 兼谷善二 福岡義雄 柴田龍三 河口百合長 ○二學年 片山平作 村上正文 奥田準一 井町照文 上田久芳 横田 弘 杉山守輔 山本良輔 野原英式 野村四郎 篠田直武 松永知一 ○一學年 伊藤胤一 吉村慎吾 藤山 二郎 飯田治郎 植田瑞穂 赤崎二郎 堀 信一 村上愛二郎 岡田節藏 田中健藏 村田義嗣 大崎養市 中島一良 赤川 勝 岡田一郎 安部 寛 松尾 雅 守永喜平 渡邊 佐 三吉 勝 多田俊雄 堀 勘市 横山正介 井上恒祐 佐々木政信 宮崎良政 馬場秀藏 安田 安

本縣褒賞規定の制定せられてより、特別賞を受けたるは、堀君を以て嚆矢とす。名譽と謂ふべし。獨早川富正君が、半途より入學せられたるが爲めに、此條件を具備することを得られざりしを惜む。

(M, T, 生)

砲臺の如何に堅固にして、如何に整頓せしか、我勇士の如何に苦戦せしかは、以て追憶想像するに足る。二時五十分、輕便鐵道により小郡に向ふ。一箱の小列車に、我等四十人を載せ、加ふるに、他の乗客を以てせしかば、我等は呼吸する貨物とも云ふべかりき。汽車は青き麥畑の間を縫ひ、川に沿ひて走ると四十分、小郡に着く。宿は、藤岡とて、停車場より數町離れたる處にあり。八時に人員検査あり就床。樂しき修學旅行の第一日は斯して終れり。

五月廿日 (木) 朝曇午後晴

未明床を蹴つて起き、束装して停車場に赴く。五時三十分の汽車にて小郡を發す。空低く曇りて、雨今にも降らんやうなり。一同大に氣遣ひしが、日の昇ると共に、漸く散じ、旭影斜に車内に射る。六時半小野田着煤煙空を蔽ひて模糊たり。直に硫酸製造會社に行きしが、時刻尙早かりし故、セメント會社に行く。此の邊の家々の屋根には、飛散せる粉末眞白に堆積し、風と共に空を蔽ひて、目を開くべからず。此會社は規模甚だ壯大にして、多くは三四層の高樓をなす。二人の案内者に導かれ縦覽す。機械は新蓋二式あり。粘土を乾燥して粉碎する所、石灰石を砕く所、之を焼く所、水を混じて煉瓦狀に造る所、之を焼きてセメントに仕上ぐる所、樽につむる所、或は松の丸木より樽を造る所等、何れも壯大精巧を極めて到らざる無く、製造力の偉大只驚くの外無し。但構内喧囂にして、案内者の説明を聞くに由無く、且つ細粉飛散して、咫尺濃然たれば、息も詰りて久しく見るに堪へざりしを遺憾となす。終りに實驗室に到る。此處にては製したるセメントの善惡を検するなり。即ち其張力壓力に堪ふる力をばかり、或は龜裂を生ぜざ

るかを検す。見終りて、廣き食堂に導かれ、茶菓の饗應を受く。十時半頃謝して去り、小野田尋常小學校にて、茶の供給を受け、辨當を喫し、直に舍密會社に到る。

グールザック塔、グラバート塔、鉛室等、宏大なるもの多く、漂白粉製造機、炭酸曹達、苛性曹達溶液の大なる溜槽等あり。嘗て學びたる所と符合し、甚だ趣味を感じ。但し時間の切迫を憂ひて急ぎたれば、十分に觀ること能はざりしは惜むべし。直に停車場に赴き、午後二時八分の汽車にて小野田を發す。汽車はやがて海岸に出て、周防灘を見渡す。鹽田、松原、潮干湯等の配置いと面白し。漸く長府に近づけば、千珠滿珠水彩畫の如く靜なる海面に浮び出て、翠影白沙相映じ、部崎の燈臺、山の端に見れば、其眺の面白きことは、何人も筆を投すべし。再び山間に分入れば、直に下關なり。時に三時五十分なり。停車場前にて、四年級一行の、枝光より歸りたるに會す。目ざす製鐵所は、縦覽を拒絶せられたる由、一縷の望は此に絶えたり。一同田中町なる神岡旅館に入る。此夜、明日の豫定を折尾の炭坑縦覽と決せらる。各々湯に入りて勞を醫し、思ひ思ひに市街を見物す。今夜は門限十一時なり。點呼了りて床に就く。

五月二十一日 (金) 晴

午前五時起床。下關出發。連絡船に乗りて門司に渡る。直ちに門司停車場に到り、午前七時二十分發の汽車に投す。三十分にして小倉に到着。戸畑枝光を過ぐれば、やがて八幡驛に到る。八幡鐵工場を縦覽せんとなす、これ我等修學旅行最大の目的なりき。されど縦覽を許されず。四年生の切願も拒絶せられたれば、今は我等

もせんかたなし。

汽車は驛を離れ又。直ちに眼に入るものは線路の右に當りて、數十の煙突雲を衝き、黒煙漆々、屋舎廣大なる一大工場なり、これぞ八幡の鐵工場なる。東洋第一と呼べる、大煙突も見えたり。折尾驛に下車す。時方に午前八時二十分。

直に、三好炭坑事務所に到り、縦覽許可の紹介状も得て、炭坑に到る。道程十五町許りなり。折しも、東風すさまじく吹き來て、砂塵を飛ばせ、行路に困難す。

炭坑は低き丘上にあリ。其所には事務室あり。男工夫の住める舎屋あり。石炭積める車の、絶間なく往來する小なる鐵道縦横に敷かれたるあり。又これ等の車に針金の綱つけて、丘より麓へ、又は坑内に、上下せしむる機械あり。少し離れて、ダイナマイト庫あり。

これ等を縦覽して後坑内に導かる。カンテラ十個許りを點じて、一同坑を下る。坑は、横約二間、高さは約一間なり。下ること百數十尺にして、横穴に入る。このあたり、四壁皆石炭なり。坑道には一條の小鐵道あり。又側には、小渠の流るゝあり。入ること二百數十尺にして、坑漸く狭くなれり、石炭採掘の方法など案内者の説明によりて知るを得、蒸し熱きこと甚しければ、暫時にして引きかへす。

坑を出て、事務室にて晝食す。此所を辭して、歸路、東筑中學校を參觀す。横田先生に遇ふ。懐しき事限なし。該校生徒諸君の中に跳足なるものありしは奇觀なりき。

午後六時五十分頃なりき。(田中 實、中原吉雄)

●第四學年修學旅行の記

十九日、朝まだほの暗きに、グートル草鞋の結束にて金谷社前に集る。春の賑さめがたく、時刻に遅るゝもの多し。やがて、校長の不如意を忍べてふ告諭ありて、出發す。時しも五時十五分、豫定時より遅ること四十五分なりき。

進むに隨ひ、天地次第に明るくなり、曉の風吹き來りて、衆の意氣ますます壯なり。山々皆、鮮かなる緑をかざり、明木村を過ぎてよりは、其の中に躑躅の點せるなどありて、いと美しく、其が谷川の流に映じたるは殊に趣深し。雲雀峠に休み、繪堂に憩ひて進むほどに十一時頃、大田に着く、晝食して暫し憩ひ、十二時出發す。

日漸く烈しくなり、初蟬の聲さへ聞えて、道に塵の立つこと甚し、疲るゝもの夥からざるまゝに、長田、湯の口、眞名と、それ々々、休憩して、五時頃、小郡に着し、末永といふ宿に入る。山口に廻りて五年生は一時間前に着したりといふ。この夜、門限八時。

二十日、起床三時三十分、小郡驛五時三十分發の汽車に乗り、轟々の音と共に西行す。山去り、川來り、民家林叢皆走りて、應接にいとまならず。阿知須の邊よりは、轉ずる山々の芝生の間に、躑躅の散りみだれたる、昨日のそれに勝りて、織りなしたる錦を動かすが如し。埴生驛を過ぎて、始めて、右に内海を見る。一行はからず快と叫ぶ、波いと靜かに、眞帆片帆の沖に浮べる、何となく、北海と異りて見ゆ。小郡より、驛をすぐること、十トンネルを數ふる六にして、八時、下關に下車す。此の驛は、流石に山陽

午後二時五十分まで自由散歩。我等の中、大半は、先生に従ひて、三好炭坑の庭園と云ふを見に行きたり。

一同集合し、人員検査後、午後三時十三分の汽車に乗り、小倉を過ぎ門司に到り、直に、連絡船にて、下關に渡り、又汽車にて、午後八時二十分小郡驛に到着。下車して、石田旅館に投す。

外出するもの少く、一同漸く疲れて直に寝に就く。

五月二十二日 (土) 晴

午前五時起床。支度を整へて、小郡を出發せしは、六時三十分なりき。行程三里、眞長田村湯口に到着。椿旅館にて休憩す。時は午前九時に垂んとす。歩遅き者を先頭にして出發す。須子君は、前夜來の腹痛に堪へかれて、此所より、人力車にて歸れり。

午前十時四十分、大田に着す。湯口より二里餘なり。此所にて晝食す。午前十一時過ぎ全隊を二つに分ちて出發す。進み進みて、赤郷を過ぎ、雲雀峠を登りつめ、其所の茶屋にて暫し休息す。

其所をたち、坂を下りつむれば、明木村なり。又暫時憩ひて、急坂を上り、遂に鹿脊ヶ坂隧道前の茶屋に着く、午後五時なりき。漸く萩に近づきたりとして元氣、益々盛なり。暫く休みて、一同、名物の外郎、家萱にと買ひ求め、其所を出發して、隊伍整々、大谷曠も一寸ちに、萩に乗り込み、金谷に到れば、諸先生の出迎を受く。これ、一同の感謝に堪へざる所なり。一同、金谷神社前に集り、人員検査あり。校長の慰勞の辭あり。續いて、平川先生の紹介、並びに、同先生の新任の辭ありて、後、一同解散せるは、

線の終點にて、規模いと大なり。直に、連絡船に乗り、波を切りて關門海峡を渡る。汽船の數しれず集るを見る、船に居ること十五分、九州の地に入る。門司驛の状況も、下關に劣らず。九時、發車、大里をすぎ、宮本武蔵と佐々木巖流とが武技を角したりと聞く巖流島を右に見て、小倉に到る。此處にて、豊前線と分れ、進みて、枝光驛を過ぐれば、右に煙突數多ち並び、工場長く連るを見る。これ、目指し來れる製鐵所なり。十時頃、八幡驛に下車し、製鐵所の南門に至りて、縦覽の許可を乞ふ。本門に至りて乞へとのことにて、歩いて枝光に向ふ。やがて、枝光に歸りて本門に入り、先生等は交渉に行かぬ。一行は門内に待つ。場内には、縦横無数の線路布かれて、石炭を積みたる汽車いくつともなく、汽笛を揚げて回る。空には、煤煙濃く漲りて、日光見深たり。しかのみならず、工場の物音、喧囂として天に響き、人をして、身の西洋の大工業地に在る思ひあらしむ。待つ間に、傷者を擔架に乗せて急ぐものを見る、こと再度。聞くならく、日として、職工の死傷せざることをなしか。あゝ、憐むべく、恐るべきは職工の身の上なるかな。暫くにして、先生等事務所より出て來られ、遂に縦覽を許されざるを報ぜらる。衆みな失望、爲す所を知らず。毛利家の炭礦に赴かんとの説ありしも一行離る色あり。詮方なく、是も人生の不如意とあきらめて、枝光驛の前まで歸り、路傍に辨當を喫して暫し憩ひ、二時枝光發の列車にて歸途につく。二時五十分、門司に着し、思ひ／＼に、市街を巡る。家屋、工場の狀大なるものあれども、煤煙立ち舞ひて清淨ならず、三時三十分、連絡船に乗り、い

／＼九州を離る。願れば、豊山依々として相送るに似たり。十五分にして、下關に歸る。此の市は賑はしき上に、煤煙の不潔もなく、清淨なる都會なり。此夜、岡次館といふに宿る。夕食後、十一時の門限まであちこちと、各々思ふがまゝに、遊びまはりつ。二十一日、今日も心地よく晴れたり。朝まだき、宿を立ち出て、六時三十分發の列車にて東に向ふ。八時十五分、小野田に下車し、舍密會社を側に見て、先づ、セメント會社に至る。許可ありて、二隊に分れ、技師の丁寧なる説明の下に、工場を巡る。粉灰こく立ちまひて人衣を白うす。器械の壯大にして巧を極めたる、驚くに絶えたり。其の音轟々、百雷の落つるが如く、説明の聲全く耳に達せざる所すらあり。意外の壯大に驚きて呆然たる中に、參觀を終り、食堂に入りて辨當を喫す。時に、茶菓の饗應を受く。謝して、社を出て、時おくれたれば、希望の者のみ、中島先生引率の下に、舍密會社に立ち寄る。此所も稍壯大にして、工場として誇るべし。酸臭烈しく鼻を刺し覺えず咳嗽を發せしむ。觀終りて、二時十分、乗車して小野田を發す。一時間にして小郡に着し、直に輕便鐵道車にて山口に向ふ。四時二十分、山口に下車し、龜山公園を過ぎて香川旅館に入る。門限九時。明日、歸萩の筈なり。二十二日、六時三十分起床。八時出發。今日も山の緑を友に、軍歌の聲勇まじう進む。一の坂に至れば、路漸く急峻にして汗沬雨の如し。喘ぎ登りて峠に至れば、清風さつと吹いて、胸開頓に爽快を覺ゆ。十二時十分、佐々並の林屋に着きて晝食し、暫し憩ひて一時出發す。

行く／＼空を仰ぐに、天青く澄みて日光烈しく、山の綠益々濃し。一升谷の石路を下りてより、或は馬手に水聲を聞き、或は弓手に琴歌を見て進む。櫻の茶屋に休み、鹿脊坂前の店に憩ひて驚谷巖に至れば、指月山笑の色を湛へて一行を迎ふ。衆の意氣い／＼壯、歌聲堂々として金谷社前に至れば、校長、級長其の他諸先生待ちて一行を迎へらる。時に四時五十分。此處にて校長の慰諭、平川先生の就任の辭ありて解散す。斜陽赤く照りて、家路を急ぐ人々の頬を射る。(廣兼來藏)

●一日旅行の記

明治四十二年五月廿二日、第三學年以下、大井方面に、一日旅行をなす。午前七時迄に、長添山招魂場に集合すべき様、豫て定められたれば、同時刻迄に、三々五々集ひ來りて、都合二百八十四名と註せらる。何れも正服を着け、辨當を肩にし、ゲートル草鞋の扮裝甲斐斐しく、愉快の色勃々として面に溢る。やかて笛聲を合圖に、一同社前に整頓す。點呼終りて後、相島先生の旅行に就ての注意あり。第三學年を先頭とし、約五分間を隔て、第二年生、第一年生と順次に打ちつれて、歩を小畑方面にと進む。これ本日旅行の端緒にして、時に七時二十分なり。此の日や、天氣晴朗、微風徐に面を掠め、空には、雲雀の鳴くを聞き、野には、蝶の舞ふを見る。既にして濱邊に出づれば、晩春の海洋々として鏡の如く、島嶼點々基石を布くに似たり。水天髣髴の所、一抹の黒烟棚引けるは、汽船の走れるか。三つ四つ二つ海鳥の浮ぶかと怪まるゝは、帆船の往來か。早くも歸途の航海を聯想して、肉を躍らすものあり。かれこれと相談する内に、いつしか前小畑、後

小畑を通過して、大藤の峠にさしかゝりしに、朝氣體に適し、足自ら運ぶ。登り行く程に堤あり。水清澄なり。登り盡せば、眼界頓に開け、渺茫たる蒼海は際限なく、岸打つ波は輕響として眼下に狂ひ、氣爽かにして、足の疲を忘る。時まさに八時を過ぐる、と十分なり。休憩する事五分間にして、急峻なる坂路をひた下りに下るに、衆頗る難める色あり。度々轉倒せんとして、辛じて海岸に出て、歩を大井村に進む。海岸に沿ひて行く事遠からずして、高倉荒神社の前に着す。時に八時五十五分なり。此所にて解散の號令の下に、第三學年以下第一年生に至る迄、名にし負ふ阿武の松原に憩ふこと約一時間。十時、此處を發して、越ヶ濱に向ふ。オーソンの富みたる海氣を呼吸しつゝ、軍歌に勇を鼓して、早くも午前十一時、越ヶ濱なる巖島神社の前に到着す。暫くありて、田總先生の報告によりて、憩ふ時間も確定せられ、我々一同は午後三時迄自由の行動をとる事を許されたり。されば、己がむきむき或は笠山に攀ち登りて、頂上なる噴火口を探らんとするもあり、或は生簀に臨みて、遊魚を數へんとするもありて、各方面に散ぜり。かくて、午後三時になりぬれば豫定の如く、八艘の和船は、我等を送る爲めに續せらる。乃ち、一同は、波止場より、或は五人、或は四十人、或は三十人と、第三年生より順次に分乗せり。纜をとくや否や滿帆は、風を孕みて、船體相啣み波を蹴つて進む、皆々歡喜の餘り、拍手快哉を叫ぶ。一船呼べば一船應へ、一船歌へば一船和す。海波爲に沸き、海若爲めに懼るゝ概あり。或は遅れ、或は先ち、興未だ盡きざるに、船は早くも打ちつれて新河口に入る。名淺を惜みつゝ、一同無事上陸し、其より隊伍整齊、雁

鳥橋に至りて解散す。時に午後四時二十分なりき。(渡邊梅吉)

山根代議士の演説

展墓の爲歸省せられたる山根代議士は、六月五日、本校を訪はれ、其序を以て、講堂にて、二時間に渉る有益なる一場の訓話を試みられたり。(訓話の梗概は講演欄に收む)氏の滔々たる雄辯と懇切なる戒告とは、生等を益すること尠からざりき。記して謝意を致す。

戊申詔書奉體心得の配布

七月七日、校長、全校生徒を講堂に會し、戊申詔書奉體心得の大意を演述せらる。是より先、校長、戊申詔書奉體心得一斑と題する小冊子を草し、勤儉治産去華就實、忠實服業荒怠相誠、惟信惟義醇厚成俗の三大綱を提げ、之が實行上の細目を列擧し、印刷に附して、全生徒に配付せられたりしを、更に生徒の了解をして明瞭ならしめむとて、此事ありしなり。

恩師の送迎

本學年の如く、先生の交迭頻繁なりし事は、恐らく、類例少かるべし。特に、タヅブ河野平川三先生の、前後相踵ぎて長逝し給ひしが如きは、實に空前の珍事なりとす。既に生起したる事實は、今更、之を如何ともすること能はず、唯生等は、之を以て、絶後となさんことを切望する者なり。

○四十一年九月二十六日、山本光二先生、愛媛縣師範學校に轉任せらるに付き、告別式を舉げらる。先生尙春秋に富み、元氣旺盛、頗る熱心に、授業に従事せられしが、忽ち榮轉し給ふ事となれり。榮轉と云ひ、家郷往復の便利なる事といひ、誠に餘儀なき事ながら、生等は、自今又先生の熱心なる教授を受けることを得ざるを憾となす。

○四十二年一月十五日、井上要二先生辭職せらる、に付き、告別式を舉げらる。先生の我校教務上に盡されたる功勞の多大なるは、今更、生等の喋々を要せざる所なり。然るに、今回、韓國宋秉峻氏の聘に應じ、往きて、一進會所立の某學校管理の任に當ら

る、事となれり。我校の失ふ所小ならざるべしといへども、而も、先生に在りては、其利器を試むべき好地位を得られたるものといふべし。生等は、韓人教育の將來に向つて、先生に屬望すること多し。先生其れ自愛し給へ。

○三月三十一日、横田慎治先生、此地を出發し、東築中學校に轉任せらる。先生は赴任以來、柔道の指南を兼職せられ、懇切勵精、少も厭倦せず、吾校斯道の隆盛を致し、もの、先生の功少しとなさず。先生去り給ひて、後任の師範未だ定らずといへども、生等決して怠らず、斯道をして荒廢に至らしめざらん事を期せり。先生幸に念となし給ふこと勿れ。

○四月十日、岩田博藏先生西條中學校長に榮轉せられ、此日を以て出發赴任し給へり。先生は、生等の最も深く敬慕せし所の人、而して、一朝此命あり、生等の失望何者か之に若かん。先生の熱誠なる、能く生等の惰氣を鞭朴し、勉勵せざらんと欲すとも得ざらしめしかば、生等の謏劣なるも、知らず識らず進境を開くを得たり。諄々として生等を訓戒せられたる告別の辭は、生等の一日も忘るゝ能はざる所

なり。生等先生に別れたるを惜むの心を推して、西條中學校學生諸君の、良校長を得られたるを慶するものなり。

○四月十三日、上原勝之進先生亦相尋ぎて、石川縣第一中學校に榮轉し給へり。先生赴任以來、専心教授に従事せられたるのみならず、文藝部長として、力を效されたること尠ならず、生等の依頼する所なりき。而して、一朝此命あり、生等惜別に堪へず。然れども、金澤は大藩の城址、北陸の雄鎮なり。先生の驥足、それはより伸びんか。

○四月三十日、羽石校長岩國中學校轉任の途に上り給ふにより、生等は、衆先生と共に、之れを金谷に送りたり。生等既に數良師に別れ、頗る不安の感ありしに、忽ち又、首腦を奪ひ去らる、何ぞ消沈せざるを得んや。校長は寡言力行、生等の畏敬せし所なり。而して、施設將に漸く緒に就かんとするに當り。忽ち轉任の命に接せらる。人生何ぞ意の如くならざる事の多きや。

○七月二十四日、熊本縣鹿本中學校に轉任せらるゝ中島豊之先生は、此日、海路より赴任の途に就き給へ

り。先生は、横田先生の柔道に於けるが如く、剣道指南を兼任せられ、勤精職に盡し、熱心事に當られたる結果として、斯道大に振興し、一刀流の名聲漸く揚らんとするの時に於て、此轉任に遇ふ、最恨むべしとなす。然れども、流派の如何を問はず、將來斯道の發達に關しては、先生開拓の功豈夫れ没すべけんや。

○四十一年十一月十八日、藤井二郎先生の紹介式を行はる。先生は、去七月を以て、東京物理學校理化學科を卒業せられたり。生等は、今より、先生の修得せられたる、最新なる方法により、數學の授業を受けることを得るを喜ぶ。

○四十二年一月二十六日、中村宏規先生來任せらる。先生は東京府立尋常中學校出身にして、三十四年七月、第三高等學校を卒業せられたり。今回、井上先生辭任の後を承けて、英語教授の任に當らる。先生幸に、生等の爲に、其蘊蓄を披瀝することを怯み給ふことなかれ。

○四月八日、三好筆太先生來任せらる。先生は島根縣第二中學校出身にして、四十一年五月、神宮皇學館

本科卒業、國語漢文歴史科教員免許狀を受領せられ、佐賀中學校教諭に拜命せらる。郷里津和野への往返便利なりといふを以て、今回の就任を見るに至れるなり。生等は、先生の來任を得て、又一創を癒し得たり、喜ぶべき哉。

○五月七日、村上新任校長來着せらる。校長は山口高等學校の出身にして、二十九年七月、帝國大學哲學科を卒へられ、三十年四月より群馬愛知兩縣中學校教諭に歴職せられ、三十三年九月、大分縣中津中學校長に榮轉の命あり、三十九年十一月、熊本縣八代中學校長となり、今回本校に轉任せられたるなり。是より、生等、又經驗ある校長の訓育指導を受くるを得べく、以て大に、消沈せる意氣を回復すべし、豈快からずや。

○五月十日に、菊池七郎先生、同十一日に、高木九一先生の新任式執行せらる。菊池先生は東京麻布中學校の出身にして、三十六年九月、北米合衆國イリノイス州オルトン市私立大學シャートルレツフ、カレツヂに入り、四十一年六月、同校卒業、バチエラリオブサイエンスの學位を受け、同九月、同州々立大學校

より、スカラシップを得、同校大學院數學科に入學せられたりしが、會々父君の憂に依り、歸朝せられたり。高木先生は、山口中學校廣島國學院東京國學院等の各學校に修學せられ、四十二年二月、受験の上、國語漢文科第一種教員免許狀を受けられ、廣島國學院助教諭、石川縣第四中學校、滋賀縣第一中學校教諭心得を歴て、四十二年四月、滋賀縣第一中學校教諭に任せられ、又本校に轉ぜられしなり。此の如く、良師の續々就任せらるゝありて、創傷殆ど癒えたり。生等、是より、其懇切周到なる指導に接するを得ることを思へば、欣喜措く能はざるものあり、豈奮起勉勵せざるを得んや。

○六月十七日、嗚呼、此日は如何なる日にして、かゝる一大悲慘事は、本校に起りしぞ。此日午後二時、英語履教師米國人タツプ先生は、菊池先生と共に、菊ヶ濱に、水浴に赴かれしに、不幸にも、先生は溺没せられたり。當時の實況を記すれば畧左の如し。

是より先二回、タツプ先生は、菊池先生を、水浴に誘はれしも、菊池先生は毎に先生を制止せられたりしが、當日は、菊池先生も、此上制止せんことも如何なりと、遂に相伴ひて海濱に到り、潮水

を排して進むこと數百歩、菊池先生は、水、肩を没するに及びて止まれしに、タツプ先生は長身の人なれば、尙進みて止まず、遂に、水、頤に達する所まで出でられたり。此時兩先生の距離は十數間ありたりと云ふ。會々菊池先生は、誤りて、海底の凹處に、足を失して、特に溺れんとせられたりしも、辛じて、水を掻き、足、水底に達するを得られたり。顧みれば、タツプ先生も亦、水中に出没して、將に溺れんとするものゝ如し。菊池先生赴き救はんとせられたれども、悲い哉、先生も、游泳の技に熟せられず、如何ともすべきなし。乃倉皇陸に上り、救援を求めむとて、海濱に沿ひて走られしに、遂に、砂上に卒倒して、人事不省に陥られたり、其時幸にも、數兒童あり、之を見て、走りて急を報せしかば、人々、船を出して來救ひ、タツプ先生を、海底より搜出し、一面に、人を走らせて、岡本玉木有福其他の醫師を迎へ、百方手を盡したれども、遂に蘇生せらるゝに至らざりき。先生は、滿期十數日の後に迫り、解雇の上は、韓國を跋渉して、風土人情を究めて歸國せんと、雄心勃勃たりしに、一朝、不虞の災厄に罹り、忽ち隔世の人とならる、人世悲慘の事、何物か之に過ぎん。生等痛惜の涙を禁ずること能はざるなり。遺骸は、校長之を引取り、先生の寓居に運び、其夜は、職員數名、五年生數名、其他日本基督教會員數名、徹夜遺骸を警護し、先生の知人在山口なるエーレス氏に急報して來萩を請ひ、遺骸埋葬の準備を急ぎたり。十八日午前七時、エーレス氏來萩し、電報を以て、東京なるフィッシュヤル氏に、遺骸の處置方を問合せたるに、氏は火葬すべく返電せり、是に於て、各地の先生知人に喪を發し、明日午後、葬儀を執行す

ること決定す。此夜も亦徹夜遺骸を護すること前夜の如し。十九日午後二時、日本基督教會傳道師高井太氏の司式を以て、葬儀を先生寓居に執行せり。會葬者は、吾校々長を始め、各先生生徒卒業生合して四百五十餘人、教會員土地有志者亦百餘人、同國人としては、豊浦中學校履教師ミルス氏、山口中學校履教師アラック氏、エーレンス氏、長崎なるデビス氏等ありき。柩前には、吾校友會より贈れる入對の生花と、外に、青年會員、土地有志者より贈れる數對の生花とを並列し、整々として、西ノ濱に赴き、火葬に附したり。式全く終りたるは四時過ぎなりき。本縣は、先生生前の功績に對し、特に金壹百圓を贈與せり。

○七月十三日、平川仙吉先生長逝せらる。先生は福岡縣出身にして、業を修猷館に修め、熊本第五高等學校を了り、大學に進み、三十六年哲學科を卒業せられ、岩手縣福岡中學校に聘せられて、育英に従事せられたりしが、病の爲に辭して、東京に還らる。會々本校岩田教諭榮轉の事あり、後任として、五月十九日就職せられたり。然るに、來任後幾もなく、病患再發し福岡病院に入りて治療を受けられしに、藥石効なく、終に長逝せらる哀哉。

○七月二十二日、河野厚造先生長逝せらる。先生は本校第一回の卒業生にして、第一回臨時教員養成所に入り、三十七年業を了り、國語漢文科教員免許狀を

受領せられ、全十二月、本校教諭に任ぜられ、三十九年十月、廣島中學校に轉任せられ、四十一年四月、再本校に轉任せらる、以來、熱心教務に従事せられたりしに、本年四月に至り、二豎の侵す所となり、荏苒起たざるに至れり。二十四日、葬儀を行はる。校長以下各先生學生會葬す。小畑灣頭、英魂長に眠る、嗚呼哀哉。因に記す、會友奥野真一、藤井達吉の兩君も亦相前後して長逝せらる。聞く藤井君は、游泳中誤りて溺没せられたるなりと。嗚呼何ぞ慘事の多きや。



勤王諸家詩文

松陰先生五十年祭執行の當日、有志等相謀りて、當時、國事に盡瘁せし志士の遺墨を蒐集し、長防兩國人に係るものを、故品川子爵別莊花月亭（是は、元三田尻なる藩公の別業を、此地に移したるもの）に、兩外國の人に係るものを、鈴木氏宅に陳列して、衆人の縦覽に供したり。出品無慮數百點、室に入れば、

正氣躍々、慷慨淋漓として、今尙忠憤の聲を聞くが如く、人をして、聳然として敬を起さしめぬ。其が中に、松陰先生詩文の如きは、既に、松陰遺著其他の書に收めて、世に公にせられたる者多ければ、之を略し、其他に就きて、數篇を、左に摘録し、以て、當日觀覽することを得られざりし諸君に示さん。

送前原兵部大輔還于長州歌 三條實美
父母の國に都久寸毛大君の御爲と於毛飛立かへり天武

失題

麻田公輔
(周布政之助)

眼前春色正清明、深喜靈犀通此情、醇酒百林何所用、醉胸吐出八稜城、

觀獵次瘦竹先生瑤礎 同
牙旗閃々擬兵營、天霽南山雪色清、銃手爲圍某樣布、昇夫舉獲凱歌轟、羽臺往事難相繼、文化先蹤亦不輕、仰看吾公欣滿面、一藩壯士足干城、

壬戌東役將去萩城有此作錄乞雪水老兄叱正 同
征衣相映白櫻花、被誘韶光辭我家、忘老慈訓言切々、

初生孩兒泣哆々、進酬恩寵真難得、死是尋常何足誇、成敗在天心已定、春風四十髻絲華、

失題

謙虛言可受、不息事終成、八面縱橫術、何能及一誠、辛酉夏七月赤間關即事 前田孫右衛門
怒潮汨々蹴沙鳴、波底漂沉幾長鯨、遺恨十年平氏魄、化成雄蟹漫橫行、

哭金子重輔

日下 誠
(久坂玄瑞)

聞汝奇男子、布衣爲國憂、風濤漂一葦、困圍斃孤囚、成敗何須問、誠忠本日酬、恨他無半面、泉下路悠悠、

金川途上

同

投筆請纓志轍軻、秋風孤劍發悲歌、王師未報擒夷將、邊柳蕭疎胡馬多、

辛酉九月念一日夜作時寓伏見驛

同

螻蟻千言草未終、滿胸悲憤與誰同、鏗然半夜起投筆、月在秋灣寒水中、

詠史

同

蜀險鄱陽不顧生、一心運用鬼神驚、却憐棠棣花難瓣、

風雪滿山春薄情、

失題

大村益次郎

春度春歸無限春、今朝方始覺成人、從今克己應猶及、願與梅花俱自新、

全

幾歷辛酸志始堅、丈夫玉碎愧甄全、一家遺事人知否、不爲兒孫買美田。

呈長門羽林慶親朝臣

正三位源 重德

子是非常臣、正逢非常君、即今非常日、須策非常動、

客中作

高杉晋作

歸未可歸留亦難、思家憶國淚闌干、春風三日武城雨、諸處梅花花盡殘、

早梅

藤本鐵石

衆禽飢不飛、萬竹倒難起、大雪誰能堪、梅花獨綻耳、

失題

月性

外夷交定我憂深、邪教從今必浸淫、僧侶不知防戰說、出於嚴護法城心、

癸丑季秋作

村田清風

蜻蜓突出穴門藩、一百萬餘人亦蕃、豈管三神降伏祭、江家兵法有淵源、

同

海防上策是屯田、振起慶元土着年、自事沉險宜拙速、三靈儼在紫城天

失題

同

邦國深謀身可親、豈唯拘例若泥人、弘安後少海防事、誓意動天鎮此民、

薩陀嶺望嶽亭題壁

同

惟石蹲如虎、老松臥似龍、驚人詩未作、獨立半天峰、

又

白雪青天色、人吟滄海秋、誰收神秀氣、五七字中流、來て見れば中々比喜志不二の峰釋迦も孔子もかくやあるべき

高杉晋作書翰

幸即君御來臨先生之御書翰難有奉拜讀候實に彼は利の爲にし我は義の爲にす天地隔絶同日之論に無御座候貴論明快感服之至に御座候乍爾鎖國なれば彼を知るに不及候得共航海を致し候得ば自ら軍艦製作などに至つては彼も不取を得ざること出來は不仕哉貴論承度爾し是れは砲術の上の事に無御座候故著書に無御座は御尤の事に御座候段々御論承度御座候得ども筆紙には難盡孰れ登門之上謹て貴論承度候其上御著

書一讀位にては御議論仕候ても空論に陥り申候先は一讀之上勿々心緒を机下に呈し申候拜具

閏三月二十三日夜認

二白追て登門仕候間其節宜敷御教訓被下度奉願候

再拜

高杉晋作

守永先 生座下

吉田松陰書翰

大阪にて大久保要を訪水戸の京都留守を問ひ玉へ于今鶴飼吉左衛門に候哉鶴飼は没文漢なれ共剛直人と見受たり朝廷並に紀伊の事は任して穿鑿致たり梅田は固より御知己の事梁川星巖公卿間の事能存知居候久我卿の諸大夫春日讃岐守少し執拗の由なれ共道學者にて人なり町奉行の淺野又河路杯は書生貞にて御尋被成候も妙ならむか天下の役人は流石大器なる處あり區區尋被成候も妙ならむか御機嫌には及申間敷相考申候

（宛名自姓共になし斷編と見えたり）

周布政之輔書翰

一横濱を京都之殘兵にても一隊を出し筑波と合し夷

館を迫る

一恭順に出る時は彼倍強傲毛利家を亡さずんば不止
一九重路塞哀訴とても一橋高松ならては取次者なし
一尾紀二藩を依り候はゞ一橋之通達も成るべき歎
一本願寺を頼み候はゞ且々書面の取次は出來申べし
一攘夷を以て聲勢を張り彼の暴を押へずんば外に活路なし
一萩表人心固結一途に御大事を相考少も動亂不仕様に御處置不能申上候此危急に相迫り候而御内輪潰亂候而は千歳之恥辱不過之候處一死之境に臨み候而は錯亂仕易き人心に付精々被入御念候様にと奉存候

右之外申上度儀も有之候得共筆端に難盡且一心窮迫是迄死所を失候儀殘念至極にて精神茫然と罷居候間差扣不能多言候今日は別段御届をば不申出候間萬御察被成下何分御沙汰被仰付可被下候猥萬死敬白

九月五日

宍戸九郎兵衛書翰

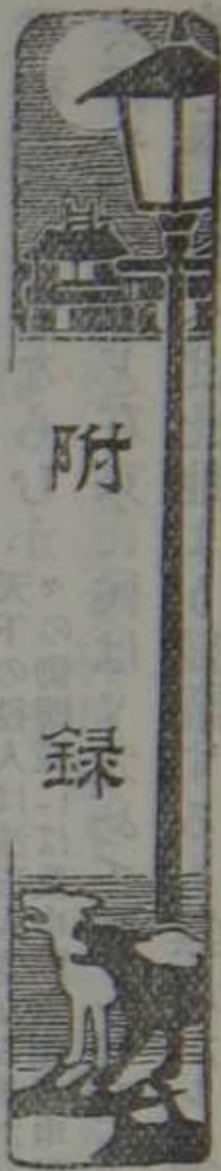
今般之暴動は罪狀拙老が一身に歸し申候間嚴科に被處諸人之些罪は御宥赦被爲在度依之幽囚之心得にて

直様郷里に嚴命を相待居候間此段御裁斷可被下候

恐惶謹言

子七月

宍戸左馬介眞澄花押



山口縣立萩中學校沿革略

本校は舊藩主毛利氏の設立に係る巴城學舎に濫觴す
 ○後改めて公立中學校となし明治十一年五月又改め
 て山口中學校の分校とし大に教則を改正す○山口中
 學が高等中學となり文部省の所管に歸するに及び本
 校は萩分校と改稱せられ高等中學の豫備校となれり
 ○二十年四月改めて萩高等小學校別科と稱せられ重
 見經誠氏主幹となる○同年八月重見氏轉任し綿貫氏
 代る○同年十二月萩學校と改稱せらる○二十一年一
 月職制の改正あり綿貫氏校長に任ぜらる○二十三年
 四月公立を改めて私立とせられ防長教育會の所管に
 歸せり○二十九年九月防長教育會之を本縣に寄附し
 山口縣立山口中學校の分校となし校則の全部を改正

す○同月綿貫氏萩分校主事を命ぜらる○三十一年三
 月教諭渡邊盛次郎氏代りて主事心得となる○同年四
 月渡邊盈作氏主事に任ぜらる○三十二年九月一日分
 校より獨立して山口縣立萩中學校となり縣令を以て
 規則を發表し職制並に事務章程を定められ元萩分校
 生徒二百九十三名に加へて新に百十人の入學を許し
 渡邊盈作氏校長心得を命ぜらる是より先校舎は江向
 村なる明倫館跡に在りしが是に至り堀内村なる新築
 校舎に移る○同月十八日雨谷羔太郎氏校長に任ぜら
 る○十月十八日開校式を行ひ此日を以て本校の紀念
 日と定む○三十四年四月十五日第一回卒業式を行ふ
 卒業生三十七名。是月始めて補習科を設く○三十五
 年二月新築寄宿舎を開き舎生を收容す○同年四月十
 七日第二回卒業式を行ふ卒業生四十二名○三十六年
 三月二十九日第三回卒業式を行ふ卒業生五十一名○
 三十七年三月三十日第四回卒業式を行ふ卒業生五十
 二名○同年十月十二日雨谷校長病没せられ教諭塚本
 又三郎氏校長事務取扱を命ぜらる○同年十二月七日
 塚本氏校長に任ぜらる○三十八年三月廿七日第五回
 卒業式を行ふ卒業生四十三名。是月縣令を以て共通

入學試験の制を定めらる○同年八月塚本校長第二高
 等學校に轉任せられ教諭岩田博藏氏校長事務取扱を
 命ぜらる○九月長崎縣立島原中學校長羽石重雄氏校
 長に任ぜらる○三十九年三月二十七日第六回卒業式
 を行ふ卒業生六十一名○四十年三月二十三日第七回
 卒業式を行ふ卒業生五十六名○四十一年三月二十四

日第八回卒業式を行ふ卒業生四十四名○十一月三日
 戊申詔書奉讀式を講堂に行ふ○四十二年三月二十三
 日第九回卒業式を行ふ卒業生三十八名。本年より縣
 令を以て共通試験を廢せらる○四月三十日羽石校長
 岩國中學校長に轉任せらる○五月七日熊本縣立八代
 中學校長村上俊江氏校長に任ぜらる。

職員表

(明治四十二年六月一日現在)

受持學科	職名	就職年月日	姓名	原籍地
修身、英語	校長	四十二年四月	村上俊江	山口縣
英語、漢文、習字	教諭兼舎監	三十二年九月	藤原甚吉	福岡縣
國語、漢文、習字	教諭	三十二年九月	頓野多介	山口縣
國語、漢文、習字	教諭	三十二年九月	安藤紀一	山口縣
國語、漢文、習字	教諭	三十二年九月	中島豐之	熊本縣
國語、漢文、習字	教諭	三十二年九月	安藤秋士	熊本縣
國語、漢文、習字	教諭	三十二年九月	藤井百輔	山口縣
國語、漢文、習字	教諭	三十二年九月	戸塚巍	愛媛縣

附 錄 一

明探	明治四十四年九月	探用ノモ	補習科	第五學年	第四學年	第三學年
山村耕作	桑原雅亮	黒田禎三	宇野四郎	三木一郎	横田孝一	伊藤
大野暢夫	山中耕作	田中直養	益田清直	竹内正治	玉木秀一	齋藤二郎
伊駒林	大野暢夫	大谷雄介	伊藤道顯	齋藤二郎	藤田孝一	

武學貸費生表

學年	第一年	第二年	第三年	第四年	第五年
最長年齡	二十一年十月	二十一年二月	二十一年八月	二十年八月	十七年十一月
最少年齡	十六年七月	十六年三月	十四年十一月	十三年八月	十二年八月
平均年齡	十九年五月	十八年六月	十七年四月	十六年五月	十五年六月

生徒年齡調査表

(明治四十二年十月一日調)

郡 關 美		郡 浦 豐		郡 敷 吉		郡 他		郡 府		郡 下		郡 關	
秋吉村	岩永村	赤郷村	共和村	大嶺村	大美村	長府村	豐前村	彦島村	計	山崎村	嘉川村	名田村	計
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

治用	田坂榮助	益田直養	大谷雄介	厚東四郎次
神田	田直助	木田正之	伊藤道顯	橫田弘
武安	明光	藤田孝一	齋藤二郎	黑瀨知
相島	金田子	伊藤敬藏	大野順甫	堀政一
伊藤	相島	藤田啓祐	大野順甫	堀政一
藤田	相島	藤田啓祐	大野順甫	堀政一
藤田	相島	藤田啓祐	大野順甫	堀政一
藤田	相島	藤田啓祐	大野順甫	堀政一
藤田	相島	藤田啓祐	大野順甫	堀政一
藤田	相島	藤田啓祐	大野順甫	堀政一
藤田	相島	藤田啓祐	大野順甫	堀政一

生徒入學前の成業別調査表

(明治四十二年七月一日現在)

學級	成業學年	高等小學校卒業	元高等小學校三學年修了	元高等小學校二學年修了	合	計
補習科	四年	四	六	一	一一	一一
第五學年	三年	三三	一六	二	五一	五一
第四學年	二年	四五	二〇	三	六八	六八
第三學年	一年	四三	三九	四	八六	八六
第二學年	一年	五一	二九	一	九二	九二
第一學年	一年	五〇	五四	一六	一二〇	一二〇
合計		二二六	一六四	三八	四二八	四二八

卒業生一覽

第一回(明治三十四年三月)

- 早稻田大學法律科卒業 厚東太郎
- 廣島高等師範學校助教諭 山本政人
- 大阪高等商業學校卒業商業ニ從事 岡村喜與
- 大津郡日置村酒造業 堀清一
- 在京文學研究 河野厚造
- 熊本縣立玉名中學校教諭 山田藤介
- 下關養治小學校訓導 宮川鐵藏
- 東京帝國大學工科大學 都野正一
- 東京商船學校卒業商船乘組 橫田直藏
- 死 亡 梨羽次郎
- 枝光製鐵所在勤 香原祐江
- 海軍中尉 三戶基介
- 高知大林區署山林屬 坂上五一
- 海軍中尉 阿武信一
- 早稻田實業學校卒業三菱會社員 田中三造
- 陸軍步兵大尉 中村章一
- 商業 增山良四郎
- 死 亡 平田千秋
- 未詳 柏村吉博
- 阿武郡生雲村開業醫 山本吉德
- 海軍中尉 藤井達吉
- 死 亡 兒玉良三
- 在米國桑港實業ニ從事 宮原朝吉
- 新潟縣林業技手 農學士 岡本精一
- 陸軍步兵中尉 在郷 桐山敏輔
- 在下關ニツケル商會 齋藤良輔
- 陸軍工兵中尉 陸軍工兵少尉(旅順役戰死) 木川貞輔
- 東京商船學校卒業 勝野清
- 陸軍工兵少尉(旅順役戰死) 光藤健介
- 通信官吏 石田藤八
- 東京下谷電話交換局在勤 伊藤治郎
- 東京商船學校卒業 山本豐
- 陸軍步兵中尉 井上四郎
- 陸軍砲兵中尉 藤井清

以上三十七名

第二回(明治三十五年三月)

三池炭坑在勤 工學士 林新作
 鐵道廳在勤 工學士 永田民也
 東京商船學校卒業(歐洲航路汽船乘組) 和田準介
 海軍中尉 阿武清
 死 石津御楯
 長崎醫學專門學校卒業 野村正一
 法學士 湯原綱
 海軍中尉 山本松四
 陸軍步兵中尉 前田正敏
 德島電信電話建築官駐在所在勤 土屋小七郎
 死 小澤泰二
 未詳 林章貫
 農學士 栗屋春太郎
 廣島縣立廣島商業學校教諭 佐伯益豐
 哲學館大學卒業萩泉福寺住職 林信丸
 陸軍輜重兵中尉 中村喜代藏
 未詳 安江棧生
 三田尻鹽務局在勤 品川鴻介

在韓國漢城中學校 山口縣立山口中學校教諭
 石油會社員 在鄉 法學士 山根省三
 陸軍步兵少尉(步一八) 山根孝一
 秘露國里麻明治殖民會社員 柿並誠一
 在滿洲 上原多一
 在神戶石炭商會員 三宅彌太彦
 陸軍步兵中尉 阿川義介
 仙臺東北中學校教諭 河野通毅
 山口縣立山口中學校教員 佐藤虎介
 海軍少尉 和田專三
 在鄉農業ニ從事 阿座上長一
 死 木村彌三
 東京帝國大學農科大學 渡邊五六
 東京體操學校卒業 山本百合熊
 明倫高等小學校教員 江川暢
 陸軍步兵少尉 青木英一
 早稻田大學 波根良弼
 陸軍二等軍醫 芥川山一

門司稅關官吏 增野榮三
 臺灣協會學校卒業 杵築市助
 國學院大學 原川國介
 死 山本慈雲

第三回(明治三十六年三月)

廣島縣立廣島中學校教諭 玉木正之
 京都帝國大學文科大學 兼常清佐
 死 中村文治郎
 海軍少尉 佐古良一
 工學士 大田明治
 陸軍輜重兵中尉 木村磯治
 未詳 吉田光胤
 東京美術學校師範科 羽根義三
 死 寺田林市
 東洋捕鯨會社東京兩國支店 阿部昌介
 海軍三等主計 曾根昌一
 死 藤井勉
 農科大學林學實科卒業 宇野英一
 新潟縣立高田中學校教諭 林壽香

根室商業學校教諭 片山市太郎
 陸軍少尉(步四一) 白上貫之助
 東京高等商業學校卒業實業ニ從事 赤川省吾
 長崎郵便局在勤 飯尾強介
 海軍筆記 島尾平七
 東京高等商業學校卒業 大多和作太
 明治大學卒業 島田八重丸
 在鄉 三浦國藏
 兵庫縣廳 渡邊儀賢
 門司三井物產會社員 弘毅太郎
 未詳 紀藤庄介
 東京高等商業學校卒業 蓑妻規一
 未詳 山田正一
 海軍少尉候補生 田村能介
 海軍機關少尉 田坂信一
 未詳 栗屋勝
 在鄉實業ニ從事 坂本治郎
 兵庫縣廳在勤 松本治淳
 東京慈惠醫院醫學專門學校卒業 口羽雅介
 商業 高木孫治

橫濱ビソンク商館員
 早稻田大學商科卒業
 慶應義塾大學部豫科
 在京城商業
 未詳
 未詳
 在郷
 慶應義塾大學
 東京高等工業學校染織科卒業
 農科大學實科卒業
 大阪商船會社三ヶ濱支店員
 大阪高等醫學校
 在京
 神戸税關在勤
 陸軍歩兵中尉(步四二)
 内務省福井縣土木出張所事務員
 醬油製造兼米商
 以上五十一名
 第四回(明治三十七年三月)
 東北農科大學
 津田武雄

大玉 完
 中島 常介
 末岡 周介
 松本 民介
 稻田 茂太
 今井 省三
 中野 清
 杉野 道助
 篠原 五郎
 厚東 健二郎
 波多野 晋平
 田中 唯一
 内田 贊一
 八谷 俊一
 上田 米太郎
 片山 熊雄
 永富 儀三郎
 陸軍砲兵少尉(野砲七)
 海軍少尉
 神戸高商卒業臺灣銀行在勤
 山口高等商業學校卒業
 京都帝國大學理工科大學
 兵 役
 未詳
 陸軍歩兵少尉(步二一)
 神戸燐寸會社
 陸軍三等主計
 三池炭坑在勤
 陸軍歩兵少尉(步四二)
 陸軍歩兵少尉(步四二)
 海軍少尉
 慶應義塾商工學校
 東京大學法科
 京都大學文科
 死亡
 東京高等工業學校機械科卒業
 收稅屬
 香積 見弼
 佐田 健一
 佐々木 義彦
 兒玉 馨四郎
 林 俊香
 白根 政輔
 中村 良弼
 寺西 啓太郎
 山下 盛太郎
 宮原 藤吉
 木津 谷泰夫
 松尾 英一
 乃美 忠次
 杉山 俊亮
 安間 定次
 福田 信彦
 久保 田庄作
 三浦 九一
 村田 癸太
 兒玉 武男

九州鐵道管理局在勤
 陸軍經理學校
 死亡
 一年志願兵
 未詳
 未詳
 死亡
 東京高等商業學校
 少尉候補生
 鹽務局在勤
 東京帝國大學法科大學
 未詳
 早稻田大學
 仁川木材商店員
 東京商船學校
 在韓國
 士官候補生
 東京外國語學校獨語專修科
 在京
 在郷酒造業
 吉見 市郎
 藤井 晴一
 新庄 順一
 伊藤 傳次
 室谷 貞一
 山本 公介
 佐古 芳次郎
 橋本 秀
 能美 留壽
 高橋 熊太郎
 浮里 俊道
 青原 忠一
 今井 武方
 吉武 傳一
 横田 三介
 井上 正作
 原田 信藏
 山田 俊治
 中村 敏介
 桂木 庄市

兵 役
 陸軍少尉(步四二)
 山口高等商業學校卒業
 三見高等小學校教員
 京釜鐵道在勤
 慶應義塾大學
 東京外國語學校獨逸語科
 未詳
 陸軍工兵士官(工五)
 早稻田商業學校卒業
 在韓國
 第五回(明治三十八年三月)
 東京高等商業學校
 東大法科
 東洋大學
 撫順炭坑在勤
 海軍少尉候補生
 陸軍少尉(步四二)
 陸軍少尉(臺灣)
 村橋 孫市
 和田 正敏
 木村 精男
 有吉 武彦
 正木 孝介
 根來 行藏
 信國 武尚
 井田 昌一
 西村 昌一
 笹原 孝一
 山田 昌介
 以上五十二名
 大谷 清記
 大賀 幾太
 榮 正範
 仲 義輔
 寺田 幸吉
 前原 四郎
 大谷 卓三

陸軍少尉
未詳
札幌農學校
陸軍少尉
慶應義塾大學
同
熊本高等工業學校採鑛冶金科
在郷
死亡
死亡
岡山醫學專門學校卒業
在郷
八幡製鐵所在勤
早稻田大學
岡山醫學專門學校
早稻田大學
自宅商業
慶應義塾大學
自宅商業
神戸市役所在勤

南方秋亮
中村芳樹
大田三郎
村田仁介
中村助順
横地素之進
赤川義助
林香
村井俊治
羽崎勝五郎
下瀬政三
厚東洋
野村英一
大田健太郎
増野純亮
笹村武一
百井盛一
河野利長
高橋信一
國弘壽

早稻田大學
死亡
長崎醫學專門學校
大阪高等工業學校卒業
未詳
京都佛敎大學
明治大學
京都佛敎大學
在東京府
未詳
在郷
在郷
未詳
臺中驛傳車事務員
私立東京高等農學校卒業
瀬戸崎小學校教員

吉富嘉春
坪井海乘
岡田信太郎
落合兼文
神崎一郎
河名識雄
田中義雄
藤津亮然
中村正治
堀兼治
口羽素介
日比豊
水津貞輔
東谷光亮
國重熙
山田八郎
以上四十三名
第六回(明治三十九年三月)
長崎醫學專門學校
慶應義塾大學
堀俊雄

山口高等商業學校卒業
陸軍士官候補生(砲二二)
第五高等學校
未詳
第五高等學校
山口高等商業學校
第六高等學校
兵役
第二高等學校
東北農科大學
宗頭小學校教員
死亡
陸軍士官候補生(歩一一)
奈古小學校教員
海軍機關學校
東京外國語學校佛語科
海軍機關學校
慶應義塾大學
第五高等學校
海軍少尉候補生

新谷太兵衛
中子徳一
井上欽一
田村繁人
森重操
口羽順藏
繁澤利往
堀永仲三
上堀太郎
石津半治
田中武雄
岡萬藏
森重忠作
阿川與一
大深眞輔
福本義亮
佐々木竹四郎
榎崎豊樹
高木良輔
簗妻準二

陸軍士官候補生
兵役(近衛歩兵三ノ七)
神戸ライジンクサン石油會社員
大阪高等工業學校卒業
第三高等學校
下ノ關郵便局在勤
慶應義塾大學
實業(在旅順)
陸軍士官候補生(歩一一)
熊本高等工業學校土木工學部
山口高等商業學校
生命保險會社員
在郷
山口高等商業學校
未詳
山口高等商業學校
在東京
三見小學校教員
東京國民銀行員
長崎高等商業學校

山本良輔
長谷千代一
石村勘次郎
長井寛治
三浦惟一
溝部九一
柏村堅吉
臼杵嘉幸
岡藤甚三
松野研一
平島哲郎
堀澤正政
大中正次
山本爲善
渡邊幾輔
山縣四郎
青野直彦
宮原道廣
永井要輔
石原忠亮

在郷
未詳
三池炭坑
在郷
椿東小學校教員
慶應義塾大學
未詳
未詳
未詳
山口縣立師範學校
未詳
在郷
神戶電氣鐵道會社
未詳
山口高等商業學校
死亡
在郷
死亡
未詳

金子精一
藤井龜松
加藤保一
杉山判二
山本敏造
山科元二
奧田又助
木村六郎
松尾民治
長澄市衛
西山七郎
鹿野政一
讚井毅一
三好謙一
井上謙輔
小田太吉
栗栖康生
波根又介
伊藤八郎

第七回(明治四十年三月)
東京高等工業學校
未詳
東京高等工業學校
山口高等商業學校
東京高等商業學校
東亞同文書院
陸軍主計候補生
山口高等商業學校
第三高等學校
第五高等學校
海軍兵學校
陸軍士官候補生
陸軍士官候補生
小學校教員
山口高等商業學校
大阪高等工業學校
早稻田商科學校
山口高等商業學校
陸軍士官候補生(步三五)

田原四郎
厚東刻夷
堀田幾太郎
水門義繼
善甫正三
佐藤良文
村田歲一
三浦正夫
藤井式寬
松井芳部
厚東芳介
益田謙一
原田淳一
岡田亮一
小野梧一
神田賴孝
吉村賴正
小林京介
中村樹介

陸軍士官候補生
小學校教員
東京商船學校
陸軍士官候補生
第四高等學校
在郷
東京高等商業學校
釜山稅務署
陸軍士官候補生(步四二)
在東京
陸軍士官候補生(步四二)
官吏
未詳
山口高等商業學校
兵役
早稻田大學(理工科)
在東京
在東京
在米國
早稻田大學

林義助
吉岡恒郷
長岡忠雄
山下寬一
國重孝
河北一三
金子雨一
三村五郎吉
大谷二郎
阿川義人
羽倉市熊
阿川景亮
品川庸平
秋本善五郎
三戶良一
伊藤利博
田村壯介
大谷壽福
吉浦緒信得
村崎敏行

在郷商業ニ從事
中央大學
名古屋高等工業學校
兵役
未詳
大津郡深川小學校教員
神戶稅關吏員
神戶鐵道廳經理係在勤
在東京
陸軍士官候補生
在東京
關東都督府大連土木出張所員
山口高等商業學校
大阪坂鶴鐵道員
在東京
死亡
神戶稅關吏員

德富周平
杉山清一
江原一良
柳田昇二郎
長谷川秀一
來島元助
橫見莞爾
平川春助
村上欣一
水井精一
黒瀨白
福岡四郎
田中豐
中村誠一
河野次郎
奧野眞一
兒玉忠彦

第八回(明治四十一年三月)
以上五十六名
榎木貞一郎

山口高等商業學校
海軍機關學校
東京高等師範學校
岡山醫學專門學校
東京高等工業學校
陸軍士官學校
陸軍士官候補生
海軍兵學校
海軍機關學校
東京高等工業學校
山口師範學校
東京高等工業學校
東京高等商業學校
大阪高等工業學校
士官候補生
長崎造船場
東京高等商業學校
未詳
在韓國
陸軍士官候補生

大草又七
三戶由彥
富田義介
彌政竹雄
山根四朗
平川新太郎
石光憲弋
濱屋七平
木原直孝
津守完
波佐間靈
村田泰
木村生三
粟屋誠一
小倉誠一
杉本基良
原純一
中村信介
齋藤新一
田坂榮助

在韓國
陸軍士官候補生
在京都
山口高等商業學校
山口高等商業學校
在鄉
未詳
早稻田大學
在鄉
在鄉
奈古小學校教員
未詳
山口師範學校
長崎高等商業學校
未詳
死亡
未詳
未詳
在大阪
山口師範學校

岩崎利七
藤田秀八
吉岡良平
河內通祐
末永一郎
藤井愛咲
津守重猛
上田重一
岡德一
早川德一
竹重賴三
山本顯祐
岡藤又七
松浦鈍一
伊藤時重
山中喜一
中村道生
西村基助
小倉誠一
野村昇輔

未詳
未詳
山口師範學校

落合實藏
齋藤轍多
白井洗

第九回(明治四十二年三月)

第一高等學校
第三高等學校
在東京
在吳
在東京
樺東小學校教員
在鄉
山口高等商業學校
奈古小學校教員
士官候補生
在東京
在韓國
在大阪
在韓國
在鄉

早川富正
堀正一
中村誠一
兒玉一男
長井要藏
神田直光
西村武光
齋藤武夫
堀永修一
增野雅一
安藤芳彦
石川光一
渡邊光潔
渡邊迪知
大谷祇詮

在鄉
第七高等學校
在京都
在鄉
在東京
山口高等商業學校
第五高等學校
在鄉
在鄉
在鄉
大津郡正明小學校教員
樺東小學校教員
樺東小學校教員
未詳
在鄉
在東京
在北海道
在鄉
在鄉
在鄉
士官候補生

村田三介
松野十一
齋藤定一
黑瀨禎祿
永松力
松野信次
古谷實
瀧退一
岡良一
三村惣一郎
宇野四郎
香積元清
伊藤義雄
中西作介
吉澤正太郎
武安明
山本傳一
金子勤助
大田良吉
桑原雅亮

附 録

在郷
在郷
在郷

白井 曉彦
松浦 好輔
窪井 隆三
以上三十八名



會 告

- 一、今回も、原稿の多く集りしが爲、遺憾ながら、悉く載録すること能はず。高諒を乞ふ。
- 一、原稿は、漢字は楷書、假名は平假名、用紙は本校作文用紙に限る。其歐文なるは、草跡を用ゆることを妨げずといへども、字畫は、必ず整齊ならんことを要す。
- 一、本誌は、會友諸君の寄稿を切望す。期限は毎年九月十日迄とす。原稿用紙は隨意。
- 一、會友にして、本誌の寄送を望まらざる諸君は、郵税共實費金貳拾錢（郵券代用苦しからず。但貳錢券、若くは壹錢券に限る。）を送附せらるべし。

明治四十二年十一月二十八日印刷
明治四十二年十一月三十日發行

《非賣品》

發行兼編輯者

益 成 敏 熊

山口縣阿武郡萩町

印刷者

勝 亦 省 三

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所

株式會社 秀 英 舍

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

東京義美堂印刷